

大使 朝鮮使節ノ我國ニ來ル毎ニ其囊裏常ニ乞シク、旅費ヲダモ支辨シ能ハザルコトアルハ比々皆然リトス。朝鮮政府及ビ人民ノ我國ニ負フノ債額實ニ些少ナルニ非ラズ。朝鮮政府ノ最後ノ使節我國ニ渡來セシ時ノ如キモ、囊中全ク竭キテ歸途ニ就クノ費ヲモ辨ズルコト能ハザリシ。朝鮮人ノ赤貧ナルハ本大臣ノ曾テ知悉スル所ナリ。朝鮮ノ我商民ニ負債スルノ額ノミニテモ殆ント四五萬圓ニ下ラズ。

李 朝鮮ノ我ニ負フ所ノ債額殆ント二十萬兩^{ドル}ニ上リ到底償還ノ望ナシ。

大使 果シテ償還ノ望ナクンバ其金額ヲ以テ朝鮮人ニ惠投スル可ナリ。促スモ亦詮ナキニ似タリ。雑談ハ姑ラク措キ、貴國ノ士官ヲ朝鮮ニ駐留セラレントスルノ事ハ本大臣ノ斷ジテ抗説スル所ナルコトヲ明亮ニ了解セラレタシ。

李 然ラバ閣下ハ將來相扶ケテ朝鮮ノ美ヲ成スノ望ヲ有セラレザル歟。

大使 朝鮮果シテ自國ノ兵ヲ教練スルガ爲ニ外國ノ士官ヲ撰雇スルノ費用ヲモ辨ズルコト能ハズトセバ、如何ゾ朝鮮自ラ進ンデ文明ヲ漸磨スルノ宏圖ニ就クヲ得ンヤ。朝鮮兵ノ教練ヲ受ケンガ爲ニ貴國ニ來ルハ素ヨリ不可ナシト雖モ、貴國ノ兵ヲ朝鮮ニ駐留セシムルノ一事ニ至テハ斷然前説ヲ主張セザルヲ得ズ。蓋シ他ナシ、本大臣ノ素懷漸ク黨派ノ軋轢ヲ除キ、以テ朝鮮ノ靜謐ヲ希フニ外ナラザルヲ以テナリ。本大臣ガ朝鮮ノ進歩ヲ希フノ精神ハ或ハ閣下ノ

意衷ヨリモ更ニ一層切ナルモアラシ。

李 朝鮮ニ駐留セシメント欲スル我士官ノ數ハ僅ニ二十名ヲ超ヘズ、彼輩ハ固ヨリ高等ノ士官ニ非ズ。

大使 彼輩ハ何等ノ官職ヲ帶ブル者ナル歟。

李 下士官ニ過ギズ。尋常ノ兵卒モ亦其内ニ在リ。

大使 一朝該地ニ事ヲ起スニ臨ンデハ、則チ二十名ノ士官ハ以テ朝鮮兵ヲ指揮シ計ヲ成スニ足ル、閣下幸ニ之ヲ諒察スベシ。本大臣ノ求ムル所偏ニ將來ニ事變ノ再發セザランコトヲ患ヘ專ラ善後ノ事宜ヲ商籌スルニ在リ。

李 過慮モ亦甚シ。

大使 兩國ノ和好ニ關シ事體殊ニ重シ、固ヨリ心ヲ潜メ深ク慮ラザルベカラズ。

李 朝鮮國王其兵辨ヲ我國ニ派遣シ、以テ教練ヲ受ケシメバ則チ可ナリ。假令我士官ヲシテ朝鮮ニ駐留セシムルモ、碌々卑官ニ居ルノ儕輩ニ過ギズ。其掌ル所朝鮮兵ヲ訓練スルニ在リ、復タ何ヲカ爲サンヤ。倘シ朝鮮國王其兵辨ヲ我國ニ派遣スルコトヲ肯諾セザルニ於テハ、一旦我兵ヲ撤回スルノ後、更ニ兩三年ノ期限ヲ以テ其朝鮮ニ駐留スルノ約ヲ定ムベシ。

大使 到底貴國ハ士官ヲ朝鮮ニ駐留セシメ、我ニ於テ之ヲ駐留セシムル事ヲ得ズト云フガ如キ

アラズ、是レ公平均一相互ノ約束ヲ旨トスルノ趣意ニ悖ルモノト云フベシ。

李 大臣ハ必ズ朝鮮國王ニ勸ムルニ我士官ノ雇ヲ解キ、我駐兵ト一般共ニ歸途ニ就クヲ得セシメシコトヲ以テスベシト雖モ、惟ダ恐ル朝鮮國王ハ其任ヲ解クコトヲ肯ゼザラン事ヲ、果シテ然ラバ則チ我士官ノ爲メ更ニ兩三年ノ期限ヲ以テ朝鮮政府ト約ヲ結ブベシ。此事貴國ニ取リテ關係ノ大ナルモノニ非ズ。本大臣幸ニ閣下ノ知遇ヲ辱フス、本大臣應々誠衷ヲ開キ更ニ伏藏スル所ナク閣下ニ告グルニ實ヲ以テセンニ、過般變亂ノ前ニ在テハ我士官ノ訓練ヲ受クル所ノ朝鮮兵二黨アリ、貴國士官ノ訓練ヲ受クル所ノ兵モ亦二黨アリキ。而シテ貴國士官ノ訓練ヲ受ケシムルコトヲ欲セズ、今日ニ至テハ偏ニ我士官ノ訓練ニ依頼スルモノ、如シ。閣下ノ尊話ニ朝鮮ニ二派ノ黨與アリ、其一ハ日本ヲ賛成シ他ノ一派ハ清國ニ左袒スト云ヘリ。然レドモ今日ニ至テハ朝鮮國內絶ヘテ一人ノ我清國ニ反對スルモノナシ。蓋シ過般ノ變亂ヲ起シタル亂賊ハ皆日本黨ニ出デシコト、上國王ヨリ下庶民ニ至ル迄皆能ク之ヲ知悉スレバナリ。變亂ノ實況ヲ目撃シタル傍觀者ハ皆竹添公使ノ其事ニ關係シタルヲ信ジテ疑ハズ。蓋シ前日ノ變亂ヲ起シタルモノハ日本黨ニシテ、支那黨ニ非ザリシヲ以テ、竹添公使其事ニ關係シタリト云フハ敢テ其理ナキニ非ザルナリ。

大使 朝鮮ノ日本黨果シテ囊キニ匪謀ヲ企テタルノ亂黨ナリシヤ否ヤ、其事素ト朝鮮ノ内事ニ屬シテ本大臣ノ更ニ與カリ知ルベキ所ニ非ズ。日本黨其力ヲ竭シテ反對黨ト決闘スルコトアルモ、我國ニ敢テハ毫モ痛痒相關スルコトナシ。

李 本大臣ハ單ダ變亂ノ原因ニ溯リテ其事實ヲ叙述シタルニ過ギズ、竹添公使既ニ多少其事ニ干與シタル以上ハ、之ヲ貴國ニ取テ亦全ク干渉ナシトモ云ヒ難シ。

大使 是レ閣下ノ懸疑ニ過ギザルノミ。

李 本大臣ノ懸疑ニ非ズ、朝鮮國王書ヲ本大臣ニ寄セテ其事ヲ告ゲタリ。

大使 日本黨果シテ前日ノ事ヲ遂ゲタランニハ、該國王ノ閣下ニ告グル所必ズ全ク其揆ヲ異ニスルモノアランノミ。

李 日本黨ハ朝鮮國臣民ノ與ミセザル所、其成功絶テ望ミナシ。

大使 概シテ之ヲ云ヘバ朝鮮國人無智昏蒙政治ノ得失ニ至テハ能ク其辯ズル所ニ非ズ。朝鮮國人中ニ能ク政治ノ改良ヲ謀リ舊來ノ積弊ヲ一洗スルノ長計ヲ算畫スルモノアランヤ。

李 貴國會テ名聲ヲ與國ニ轟カシタルガ如ク、朝鮮國中政治ノ改良ヲ謀ル人ノナキハ本大臣ノ知悉スル所ナリ。朝鮮國ノ人民ヲ舉テ誠心國家ヲ憂ヒ、進歩改良ヲ謀ルノ人士ナキハ歎ズルニ猶ホ餘アリ。

大使 朝鮮久シク鎖國ニ安ンズ、其外交ヲ始ムル實ニ近年ニ在リ、遽カニ國家ノ改良ヲ以テ任

ズベキ善良ナル爲政家ノ輩出セン事ヲ求ムルモ、豈ニ得ベケンヤ。但ダ此事談判ニ涉ラズ宜シク措テ以テ他ノ要件ヲ議スベキナリ。

吳大徵 朝鮮國人ノ中年少壯ニシテ大ニ將來ニ望ヲ屬スベキノ士ハ過般ノ變亂ニ於ケル如キ非謀ニ與ミスルニ至ル、實ニ朝鮮政府ノ爲ニ痛惜セザルヲ得ザルナリ。

大使 東西何レノ國ニテモ此ノ如キ情實ヲ免レズ。

吳大徵 金玉均ハ米國公使フート氏ト屢々來往シ互ニ交際アリ、金玉均同公使ニ面會シタル時告ゲテ曰ク、朝鮮政府ハ恰モ屏裡一點ノ燈火ノ如シ、暗黒ニシテ之ヲ見ル能ハズト、公使答テ曰ク、徒ラニ屏ヲ除カント欲シテ燈ヲ消スノ愚ヲ招クコトナカレト。

大使 雜談ニ時ヲ移ス惜ムニ餘アリ。更ニ要件ニ涉テ論議スル所アラン。朝鮮政府貴國ノ士官ヲ任用スルニ於テ其數ヲ一二名ニ止メシメバ本大臣又敢テ其間ニ異議ヲ挾マズト雖モ、苟クモ二十名ニ内外スルニ至テハ本大臣斷ジテ抗議ヲ提出セザルヲ得ズ。實ニ士官二十名ハ以テ朝鮮兵ヲ指揮シ事ヲ謀ルニ足ル。

李 我士官ヲ撰雇スルハ朝鮮兵士ヲ指揮スルガ爲ニ非ズ。其士官タル固ヨリ下等ノ士官ニシテ專ラ朝鮮兵ノ訓練ヲ掌ルノ外絶テ朝鮮兵ヲ指揮スルノ事ニ涉ラズ、其朝鮮兵ニ於ケルハ恰モ獨逸士官ノ我兵辨ニ於ケルガ如キニ過ギザルノミ。

大使 我國ノ陸軍學校ニ於テハ亦獨佛ノ士官ヲ撰雇ス、固ヨリ我兵ヲ指揮スル士官ト其所掌異ナリ。抑モ兩國駐兵撤回ノ議ハ均一ヲ主トシテ偏頗スルナク、相互ノ双肩ヲ以テ訂約ノ根據トセザルベカラズ。貴國若シ朝鮮兵ヲ訓練スルガ爲メ果シテ貴國士官ヲ朝鮮ニ駐留セシムルノ要アリト云ハバ、本大臣ハ將ニ閣下ノ考案ニ供スルニ双方朝鮮國王ニ勸告シテ他ノ外國士官ヲ撰雇セシムベキノ議ヲ以テスベシ。他國ノ士官ヲ撰雇スルガ爲ニ要スベキノ費用ハ概算スルニ一人ニ付毎月二百弗ヲ超ヘザルベシ。他國ノ士官ハ概ネ皆能ク兵事ニ練熟セルヲ以テ之ヲ撰雇シテ訓練ノ用ニ充ツルハ其便モ亦尠シトセズ。朝鮮兵固ヨリ高等ノ學科ヲ修メタル教師ヲ要セズ、其急務トスル所單ダ訓練ノ一事ニ止マル、即チ費用ノ如キモ亦本大臣ガ既ニ既算スル所ノ如キニ過ギザルベシ。之ヲ要スルコト朝鮮政府ノ望ム所ナルヤ否ヤヲ以テシタルニ、同氏ハ答フルニ朝鮮政府兩國ノ撤兵ヲ望ム甚ダ切ナリ、兩國兵ノ駐留セザルハ朝鮮政府ノ甚ダ便利トスル所ナリ云々等ノ語ヲ以テセリ。

李 穆仁德氏ハ朝鮮國王ノ未ダ信任ヲ措カザルナリ。

大使 或ハ然ラン、然レドモ朝鮮國王自ラ信任ヲ措クノ官吏トシテ日本ニ派遣シタルハ如何。榎本 此頃聞ク所ニ據レバ、貴國ノ將官ハ閔泳翌ノ許ニ清兵ヲ派シ、閔氏ノ之ヲ厭フモ敢テ意トセズ強テ其家ヲ護衛セシメタリ。是ニ由リ遂ニ一場ノ事件ヲ惹起シ來リ、閔氏ノ家僕某ハ

清兵ヲ殺シタリト、閣下未ダ曾テ之ヲ聞カズヤ。

李 未ダ曾テ之ヲ聞カズ、貴國ノ新聞紙並ニ上海ノ新聞紙等ニ載セテ其事アリ、然レドモ清兵ヲ以テ閱泳翌ノ護衛ニ充テタルコトナシ、日本新聞紙ノ妄誕訛傳ヲ載ス、往々此ノ如ク甚シキモノアリ。

榎本 未ダ曾テ貴國ノ新聞紙ノ如ク甚シカラズ。

李 決シテ然ラズ。

榎本 貴國疆土廣シト雖モ新聞紙ハ僅ニ二種ニ過ギズ。之ヲ我國新聞紙ノ數ニ比スレバ極メテ寡少ナリ、訛傳ヲ掲グルノ多少ニ至テモ自ラ其差ナキ能ハズ。

李 素ト是レ新聞ニ過ギズ、時アリテ訛傳ヲ掲グルハ復タ免レザル所ナリ。

榎本 朝鮮國王ヲシテ苟モ普通ノ感覺ヲ備フルノ人ナラシメバ、則チ其輦轂ノ下ニ外國兵ノ駐留スルヲ見ルハ決シテ其心ニ慊シトセザル所ナルベシ。蓋シ朝鮮國王必ズ公ヲ秉テ偏スル所ナク、兩國各其兵ヲ撤シ更ニ其一ヲ駐留スル事ナキヲ希フハ本大臣ノ確信スル所ナリ。

李 本大臣向後應ニ朝鮮ノ事ニ干涉セザルベシ、即チ貴國干涉セザレバ我モ亦敢テ干涉セズト云フノ意ナリ。

大使 双方再ビ此ノ如キ干涉アルベカラズ。

李 或ハ貴國ノ居留臣民暴殺ニ遭ヘルヲ辭柄トシテ、或ハ其他ノ名義ヲ構ヘテ貴國再ビ兵ヲ朝鮮ニ派スルガ如キコトアラバ、我國ニ於テモ亦直ニ我兵ヲ派スベシ。是レ双方ノ約束相互均一ナル所以ナリ。

大使 洵ニ然リ、貴國兵ヲ派スルコトアラバ我國ニ於テモ亦必ラズ應ニ兵ヲ派シ其軌轍ヲ同フスベシ。

李 貴國兵ヲ派スルノ事アル迄ハ我國再ビ兵ヲ派セザルベシ。只ダ恐ル一朝我兵ノ撤回スルヲ待チ、其機ニ乗ジテ貴國ノ直チニ朝鮮ヲ併吞スルコトアラナラフ。

大使 請フ復タ恐ル、勿レ。我國素ヨリ朝鮮ノ如キ貧弱ノ一小國ヲ併スルノ念慮ナシ。日本既ニ貧弱ノ國タリ、之ニ併合スルニ朝鮮ノ貧弱ヲ以テセバ勢ヒ自ラ貧弱ノ極ニ陥ラザルヲ得ズ人各富強ヲ願フ、我豈ニ獨リ自ラ貧弱ニ陥ルコトヲ願ハンヤ。苟モ一國ヲ略取スルニ於テハ其疆土ニ關シ一切ノ責ヲ負擔セザルヲ得ズ。閣下幸ニ諒察スル所アレ。

李 將來朝鮮ニ於テ再ビ事變ヲ生ズルトキハ、我國特ニ欽差ヲ派遣シ復タ之ヲシテ兵員ヲ隨帶セシメザルベシ。

大使 固ヨリ我ニ於テモ兵ヲ派スルコトナカルベシ。然レドモ前日事アルノ後、吳氏兵ヲ帶ビテ朝鮮ニ赴クノ報ヲ得タルヲ以テ、已ムヲ得ズ我國ヨリモ亦兵ヲ派シタルナリ。我全權大使

ハ最初隻兵ヲ隨ヘズ、其下ノ關ニ達シ始メテ吳氏ノ兵ヲ帶ブルノ報ヲ聞クニ及ビ則チ我政府ニ稟議スルニ均シク兵員ヲ帶ビンコトヲ以テセリ、吳氏ニシテ曾テ兵ヲ帶ブルコト微ツセバ我大使モ亦必ズ護衛兵ヲ引率セザリシナラン。

榎本 是レ當時我政府ノ朝鮮ニ兵ヲ派シタル所以ナリ。

李 然ラバ咎ノ歸スベキハ則チ吳氏帶兵ノ報ニ在リ、過般變亂ノ後ニ至テハ流傳百出殆ンド其孰レガ信、孰レガ僞ナルヲ分辨スルニ違アラザリキ。

大使 幸ニ我國公使ノ貴國ニ駐劄スルアリ、前日ノ如キ變亂ノ時機ニ遭遇スルニ當テハ、政府當ニ漫リニ信ヲ風説ニ措クノ事アルベカラズ。我駐劄公使ニシテ苟クモ貴國政府ニ告グルニ實ヲ以テセザルガ如キアラバ、則チ我政府忽チ之ヲ召還スベシ。

李 (榎本公使ニ對シテ曰ク)當時風説アリ、閣下貴政府ニ報ズルニ此機ニ乘ジテ朝鮮ヲ併セズンバ何レノ日ガ之ヲ略スルノ時アラントノ一事ヲ以テセラレタリト。

榎本 本大臣曾テ書ヲ著ハシ我國ノ爲メニ謀ルニ必ラズ朝鮮ヲ征略スベキノ論ヲ爲セシコトアリ。

李 本大臣ノ述べタルハ其事ニ關セズ、閣下ノ前キニ朝鮮ヲ略取スベシト云ヘル密書ヲ外務卿ニ贈ラレタルヲ云フナリ。

榎本 外務卿ノ東京ニ歸ラレタルハ一月二十二日ナリ、請フ之ヲ忘ル、コト勿レ。

李 閣下ノ密信或ハ途中ニテ外務卿ノ手ニ達シタルナラン。

大使 百河水結ノ後、北京ヨリ日本ニ書信ヲ送ルニ凡ソ幾日ヲ費スベキ歟。

李 實ニ此風説アリタルヲ以テ今閣下ニ告グルノミ、其實否ニ至テハ只ダ榎本公使ト外務卿ヲ除クノ外之ヲ知ルモノナシ。

榎本 閣下ノ舉措ニ關シテモ亦之ニ類似ノ風説アリ、今敢テ茲ニ之ヲ告グルヲ要セズ。

李 閣下敢テ之ヲ告ダザレバ本大臣應サニ自ラ之ヲ告グベシ。即チ伊藤大使ノ方寸絶テ主戰ノ意ナキコト是レナリ。

榎本 閣下疑念ノ深キ實ニ驚クニ堪ヘタリ。

李 是レ懸疑ニ非ズ、事實ニ亘レバナリ、本大臣日本ヨリ密報ヲ得テ其事ヲ知レリ。

大使 諸君ヨリ請フ無用ノ雜談ヲ止メヨ、我談判ノ要件ニ移レ、復タ徒ラニ時ヲ銷遣スル勿レ。

抑モ双方ノ間ニ向後妥協ヲ經ルノ事項ハ凡テ之ヲ書ニ筆センコトノ議ヲ閣下ニ提出スベシ。閣下ノ説ニ立約ノ後必ズ批准ヲ要スト、果シテ然ラバ畫押蓋印ノ日ヨリ起リ二ヶ月内ニ批准ヲ交換シ四ヶ月内ニ双方駐兵ノ撤回ヲ行ヒ、以テ批准ト撤兵舉行トノ間ニ一月乃至二週間ノ餘暇アラシムベシ。

李 閣下ノ述ベラレタル所畫押蓋印ノ日ヨリ四ヶ月内ニ貴國ノ兵ヲ撤セラレントスルノ意歟。撤兵ノ事ハ勿論双方悉ク談論ノ事項ヲ議了シタルノ後專條ヲ訂立シテ以テ其約束ヲ定メ、双方之ニ畫押スベシ。本大臣畫押蓋印ノ權アルハ閣下ノ既ニ領知セラル、所ナリ、本大臣敢テ問フ、撤兵ノ事ハ貴國先キニ之ヲ舉行セラルベキ歟。

大使 否撤兵ハ同時ニ舉行セザルベカラズ、只ダ同時ニ撤兵ヲ舉行スルニ由テ双方最モ慎重ノ意ヲ加ヘザルベカラズ。閣下願クハ命ヲ朝鮮駐紮ノ貴國將官ニ下セ、本大臣モ亦將ニ我代理公使ニ訓示スル所アラントス。

李 貴説洵ニ善シ、本大臣我將官ニ命ズルニ細節ニ關スル事項ハ近藤氏ト商辨シ、不都合ナカラン事ヲ要スル旨ヲ以テスベシ。想フニ貴國兵ハ濟物浦ヨリ、我兵ハ馬山浦ヨリ撤回セシムル可ナラン。兩國駐兵各其撤回ノ處ヲ異ニスル甚ダ得策ト信ズ、今ヤ兩國ノ全權相遇フテ互ニ意衷ノ同ジキヲ知り、交情親密ナリト雖モ、兩國ノ將官ニ至テハ尙ホ軍人粗暴ノ風ヲ免カレズ、爲メニ再ビ何等ノ紛争ヲ起スベキヤモ計ラレザルナリ。

大使 實ニ然リ、此輩相遇フ猶ホ火藥ヲ以テ烈火ニ近クガ如シ。貴我双方既ニ交情親密ヲ致ス無事ニ今回ノ案件ヲ了シテ以テ双方ノ素旨ヲ貫カザルベカラズ。若シ試ニ兩國ノ兵員ヲシテ此件ヲ商議セシメバ果シテ如何ノ結果ヲ生ズベキヤ、殆ンド豫想スベカラザルモノアリ。

李 兩兵相遇フ争鬪ノ外ナシ、願クハ貴國將官ニ訓示シテ貴國兵朝鮮ニ駐留スルノ間ハ事端ヲ滋サバランコトニ成ルベク注意セシメラレン事ヲ、我ニ於テモ亦應サニ同ジク我將官ニ訓示スベシ。

大使 本大臣力ノ及ブ限りハ兩國兵ノ間ニ事端ヲ生ズルヲ防遮スベシ。我國ニ在テハ成ルベク速カニ我兵ヲ撤回セン事ヲ希望ス。

李 我兵貴國ノ兵ヲ疑フノ念甚ダ深シ、我將官ノ報ズル所ニ據レバ貴國ノ兵凡ソ二十人許一列ヲ爲シテ屢々市街ニ徘徊シ、以テ我兵ト争鬪ヲ啓カン事ヲ求ムルノ情アルガ如シト。依テ本大臣ハ我將官ニ嚴命ヲ下シ、嚴正ニ規律ヲ執行シ、縱令路ニ貴國ノ兵ニ遇ヒ粗暴ノ所行ヲ加ヘラル、コトアルモ、決シテ争鬪スルコト勿レト云ヒ、且ツ更ニ附言シテ若シ貴國ノ兵我兵營ヲ襲フコトアラバ、則チ我ニ於テモ亦事宜ニ應ジ力ヲ以テ之ヲ防グベシト命ジタリ。

大使 曾テ朝鮮ニ在ルヤ、我兵員ノ屢々瑣細ノ件ヲ以テ大使ニ訴フルモノアリ、此時ニ當リ大使ノ訓令ヲ下ス、其意大略閣下ノ前キニ貴國將官ニ下シタル所ニ同ジ。

李 兩國ノ官吏ニ下スニ嚴命ヲ以テシ、事端ノ再生ヲ防グノ必要ナルト、且ツ朝鮮ニ於テ向後再ビ事端ヲ生ズルコトアルモ、貴國ハ委員ヲ派シテ其事實ヲ查明スルニ止メ、再ビ兵員ヲ携帶セシムルコトナカランコトヲ以テ閣下ノ注意ヲ請ハザルヲ得ズ。

大使 其事双方相互ノ約束ニ成立タザルベカラズ、苟モ朝鮮ノ我國ニ對シテ開戦ヲ布告スルニ非ザレバ我國ニ於テ再ビ兵ヲ派スルノ事ナカルベシ。向來前日ノ如キ事變アルニ臨テ我國ノ所爲ハ專ラ貴國ト同一ノ舉措ニ出ルノ外アルベカラズ。

李 貴國朝鮮ヲ占領スルノ事ナキハ既ニ閣下ノ明言ヲ以テ確信スルニ足レリ。然レドモ異日他國ノ朝鮮ヲ睥睨スルガ如キアラバ則チ我國ニ於テハ兵員ヲ派遣セザルヲ得ズ。其時ニ當リテハ貴國モ貴國ノ便宜ニ從ヒ兵員ヲ派スルコトヲ得ベシ。

大使 朝鮮獨立ノ國體ヲ維持シ以テ他國ヲシテ其疆土ヲ侵略スル事ノ事ナカラシメンコトハ我國ノ切ニ希望スル所ナリ。

李 貴國果シテ朝鮮ヲ併合セントスルトキハ則チ國力ノ及ブ限リヲ以テ貴國ト戦ハザルヲ得ズ我國若シ朝鮮ヲ併合スルコトアレバ、貴國應サニ全國ノ力ヲ舉ゲテ我國ト戦ヲ決スベシ。若シ他國朝鮮ノ地ヲ睥睨スルモノアレバ、貴國ト我國トハ互ニ相連合シテ力ノ及ブ限リ其侵略ヲ防グベシ。

大使 話次他國ノ事ニ及バザルヲ善シトス。

李 本大臣敢テ公然其事ヲ言フニ非ズ、即チ貴我相互ノ密約トシテ各之ヲ心ニ銘スベシ。

榎本 本大臣ヲシテ全權大使ノ地位ニ在ラシメバ輒チ今回ノ如キ約ヲ成スコトヲ承諾セザルベ

シ蓋シ本大臣ノ素志○○○○○○○在ルヲ以テナリ。

李 是レ本大臣ノ甚ダ閣下ヲ疑フ所以ナリ。閣下ノ他日頭等欽差ノ榮地ニ昇ルコトヲ得ル迄ハ

宜シク伊藤大使ノ政略ニ從ハザルベカラザルナリ。

榎本 勢ヒ已レヲ狂ゲザルヲ得ザルナリ。

李 閣下ノ曾テ書ヲ著ハシテヨリ、大ニ貴國人民ノ心ヲ惑ハシ、朝鮮ハ當ニ日本ノ占領ニ歸セ

ザルベカラズト論ズルモノ漸ク多キヲ加フルニ至レリ。

榎本 或ハ知ラン閣下モ亦日本ヲ併呑スルノ志ナキヤ否ヤ。

李 絶テ其志ヲ懷クコトナシ。

榎本 其實否ニ至テハ上帝ヲ除クノ外他ニ能ク之ヲ知ルモノナシ。

李 本大臣ハ應ニ上帝ニ誓フベシ、未ダ曾テ此ノ如キ希望ヲ懷キタル事アラザルヲ、今ヤ貴國朝鮮ヲ併合スルノ念慮ナキハ本大臣ノ深ク信ジテ疑ハザル所ナリト雖モ、前年森有禮氏貴國公使トシテ我國ニ駐劄セラレタルノ日、余ニ告ゲテ曰ク、日本ハ朝鮮ト戦ヲ啓クノ辭柄ヲ發見スル能ハズト、閣下曾テ此事ヲ聞キタル事アリヤ、是レ曾テ本大臣先年郷邑ノ間ニ漫遊スルノ際、氏本大臣ヲ訪問シテ偶マ告グル所ノ言ナリ、時恰モ貴國朝鮮ト紛議ヲ生ジタルノ際ナリキ。

大使 我國ノ朝鮮ニ於テ他意ナキコトハ閣下ノ既ニ確信セラル、所ナリ、我國ニシテ果シテ朝鮮ヲ侵略セント欲セバ何ゾ曾テ朝鮮ト條約ヲ立ツル等ノ事ヲ爲サンヤ。蓋シ條約ヲ立ツル等ノ事ナカラシメバ却テ我ノ爲ニ謀ルニ朝鮮ヲ併呑スルノ易キヲ加ヘタラン。往事本大臣曾候ニ面晤シタルノ日、我日本ノ朝鮮ニ對スルノ所見ヲ詳述シタリ。閣下曾テ之ヲ曾候ニ傳ヘ聞キタルナラント信ズ。

李 然リ他國ノ朝鮮ヲ侵略セントスル如キアラバ全國ノ力ヲ舉ゲテ之ヲ防禦シ、以テ朝鮮ヲシテ獨立ヲ維持セシメザルベカラズ。

判談此ニ至テ止ム、時已ニ午後六時三十分、各食堂ニ入り晚餐ヲ共ニス。

伊藤李天津會談筆記要略

第六回

一千八百八十五年四月十二日午後三時天津日本領事館第六回會談ヲ開ク、出席者ハ日本側伊東大使、榎本公使、井上議官、伊藤大書記官、鄭權大書記官ニシテ支那側ハ李鴻章、吳大澂、續昌、伍廷芳、羅豐祿ナリ、伊東大書記官英文並ニ和譯筆記ノ任ニ當ル。

大使 撤兵ノ事ニ就テハ本大臣條約ノ案ヲ起稿シタルヲ以テ、之ヲ閣下ノ瀏覽ニ供シ、敢テ高論ノ在ル所ヲ問ハントス。

(此所ニテ漢文ノ草案ヲ朗讀ス其文左ノ如シ)

一、議定嗣今不論有何等名義何等約疑在朝鮮國內兩國均不得有派兵師差兵辯建有兵營占有營地屯處港口之事以免有兩國滋端之虞

- 一、前條約款仍與兩國交戰之權不相交涉
- 一、將來在朝鮮國如有日清兩國交涉事端或有彼此一國與朝鮮國交涉事端兩國當均特派委員務依平和便法妥商辦理
- 一、兩國均允勸朝鮮國王使其團練精良巡兵足以自護其國兼保護駐留外國人又依兩國所協同認可由朝鮮國撰他國武弁一員或數員委以教演練習之事
- 一、兩國均允遵第壹條所載將現在彼此派駐朝鮮國兵員於畫押蓋印之後四個月限內均行盡數撤回大日本帝國兵由仁川港撤去大清國兵由馬山浦撤去
- 一、至前兩條所載事宜節日彼此當於成約批准之後均簡委員派往朝鮮國漢城批籌酌訂以便施行

李 (草案ヲ熟覽シタル後) 草案中第二項ノ載スル所本大臣明カニ其主意ヲ解スル能ハズ。

大使 第二項ハ別ニ深意アルニ非ズ、是レ凡ソ獨立邦國ノ享有スル交戰ノ權ヲ云フ、即チ本案ノ約疑ハ凡テ其交戰ノ權ト相交渉スルコトナキノ意ヲ示スナリ。例ヘバ朝鮮日本ト釁端ヲ啓キ、日本ノ港灣ニ進撃スルコトアランニハ、我日本ニ於テハ即チ朝鮮ニ對シテ宣戰ノ布告ヲ爲シ、朝鮮ニ兵ヲ發スルノ權ヲ有スベシ。故ニ本案ノ所載ノ約款ハ公法ニ照ラシ、凡ソ弊國ノ有スベキ宣戰ノ權ト相渉ルコトナシ。本條ニ疑アラバ左ノ如ク其明文ヲ修正セバ如何。

前條約款仍與依準公法交戰之權不相交涉

李 成ルベク的確ノ字句ヲ用ヒ、其主意ヲ明晰ニ畫定セザルベカラズ。

大使 假ニ貴國ト朝鮮國ト戰ヲ交ユルノコトアランニ、時ニ當リテ貴國ハ機ニ應ジテ兵ヲ該地ニ發遣スルノ權ヲ有スヤ明ナリ。

李 第一項ニ「不論何等名義何等約款」ノ文字アリ、是レ何等ノ事ヲ指ス歟。

大使 第一款ニ此文字ヲ掲グルハ將來或ハ何等辭柄ヲ設ケテ此約ヲ破ルモノアルニ至ランカヲ慮リ、殊ニ戒心ヲ加フルノ意ニ出ヅ閣下若シ將來ニ戒心スル所アル爲ノ、特ニ明文ヲ要セズト思考セバ此等ノ數字ヲ刪除スルモ可ナリ。

李 若シ將來朝鮮ニ於テ内亂起ルコトアリテ、朝鮮國王我ニ保護ヲ依願シ、我ニ兵員ヲ派遣ヲ請求スル等ノ事アルニ方リ、此草案ニ率遵スルトキハ之ヲ處スル果シテ如何スベキ歟。

大使 此ノ如キ場合ニ於テハ双方均一ヲ旨トシ、相互ニ双務ノ約ヲ守ルノ外アルベカラズ。若シ反對ニ於テ朝鮮我ニ請求スルニ同一ノ事ヲ以テセバ、我國ハ將ニ如何カ之ヲ處スベキゾ。

李 朝鮮國王若シ貴政府ニ向テ貴國兵ヲ派遣セラレンコトヲ請求スル如キコトアラバ朝鮮國王ハ應ニ先ヅ我政府ニ告グルニ其事ヲ以テシ、我政府ヲシテ貴政府ト商辨スルノ便ヲ得セシメサルベカラズ。

大使 若シ朝鮮國王貴政府ニ向テ兵員ヲ派出セラレンコトヲ請願スルコトアラバ、貴政府モ亦同ジク我ニ通知スルニ其事ヲ以テセザルベカラズ。

李 然レドモ貴國ノ朝鮮ニ對スルト我國ノ朝鮮ニ對スルトハ其地位各相同ジカラズ、閣下其ノ異同ノ點ニ就テ孰慮スル所アレバ自ラ釋然タル所アラン。抑モ朝鮮ノ我ニ於ケル古ヨリ我附庸ノ國ニシテ、其國內ニ起リタルノ件ハ必ず之ヲ我國ニ報知スルノ義務ヲ有セリ。然ルニ貴國ノ朝鮮ニ於ケル僅ニ條約上ノ交際アルニ過ギズ。

大使 善シ閣下論ジテ其問題ニ涉ラバ之ガ爲メ重大ナル問題ヲ惹キ起シ、貴我双方ノ間ニ談判スベキ事項ハ益々煩雜ヲ加フニ至ルヲ恐ル。閣下ノ意果シテ如何。

李 閣下素ヨリ此問題ニ涉リテ論議スルノ權アルベカラズ。

大使 素ヨリ其權アリ、然レドモ本大臣心ヲ潛メ深ク慮リテ以テ殊更ニ其論點ヲ避クルモノハ双方ノ間難ヲシテ益錯綜ニ陥ラシムルノ恐レアルヲ以テナリ。

李 敢テ請フ其問題ニ涉リ論議スルノ煩ヲ取ルコト勿レ。

大使 雙方其問題ニ涉リ論議スルノ事アラバ徒ラニ間難ヲ挑發シ、事端ヲ滋スノ外ナシ復タ詮ナキノ所業ト云フベシ。

李 刻下其問題ニ涉リ論議スルノ權ハ本大臣ノ現ニ有セザル所ナリ。本大臣ハ兩國ノ駐兵ヲ撤

回スルノ議ヲ商辨スベキノ外決シテ其他ノ事ニ涉リ議スベキナシ。

大使 前回ノ會議ニ於テ閣下ノ說ニ我ヨリ兵ヲ朝鮮ニ派セザルノ間ハ、貴國必ず兵ヲ該地ニ派セザルコトヲ訂約スベシト、抑モ兩國駐兵ノ撤回ヲ舉行センコト相互均等ノ約束ニ依テノミ双方始メテ肯諾スベキナリ。

李 條約ノ草案ハ昨日吳氏ヨリ瀏覽ニ供シタル如キモノナランコトヲ要ス。

(此時吳氏ノ草案ヲ讀ム乃チ其明條左ノ如シ)

- 一、議定兩國各撤駐朝之兵自畫押蓋印之日起以四箇月爲期四箇月以後中國將駐紮朝鮮各營盡數撤回日本亦將紮朝鮮保護使館之兵盡數撤回兩國同時辦理不得違逾
- 一、朝鮮練兵各營有中國教習武辨酌留十餘人至二十人爲度定立年限年滿再行撤回
- 一、以後朝鮮商民或與日本商民偶有爭端如日本派員前往查辨毋庸帶兵或中國有派員查辨之事亦不帶兵免滋疑忌

不再留防

大使 吳氏ノ草案第二項ニ就テハ昨日日本大臣ノ直ニ吳氏ニ面陳シタル如ク、本大臣斷ジテ之ヲ抗論セザルヲ得ズ。此事前回ニ於テ親シク閣下ニモ陳述シタル所ナリ。貴國ノ士官ヲ朝鮮ニ

駐留セシメント欲セラル、ニ於テハ、貴我双方相互均一ノ標準ヲ得ンガ爲ニ、我國ニ於テモ亦我國ノ士官ヲ駐留セシムル事ヲ主張スベシ。其草案中第四項ノ如キハ以テ今回ノ條約中ニ加ヘンコト本大臣ノ最モ異議ヲ挾ム所ナリ。

李 吳氏草案ノ第三項ハ立言簡約能ク其旨ヲ盡ス、之ヲ貴案ニ比スレバ更ニ一層明晰ヲ加フルモノ、如シ。

大使 吳氏ノ草案第三項ハ貴我兩國商民ノ間偶々爭論アルノ場合ヲ云フニ過ギズ。事苟モ一個ノ亂民我公使館ヲ襲撃スルガ如キ事アラバ、我ニ於テ已ムヲ得ズ兵ヲ該地ニ派遣セザルヲ得ザルナリ。

李 凡ソ約款ノ立言ハ詳備明晰ニシテ主意ノ判然スルヲ善シトス。

大使 本大臣ノ草案第一項中「不論有何等名義何等約款」ノ字句ニ異論アラバ之ヲ删除スベシ閣下果シテ之ヲ删除スルヲ欲スル歟。

李 然リ删除ヲ可トス。

大使 之ヲ删除スルモ別ニ意義ヲ異ニスルコトナシト雖モ、閣下ノ需ニ應ジテ之ヲ删除スベシ李 屯所ノ二字ハ何等ノ事ヲ指ス歟。

大使 兵辨ヲ屯駐セシムル所ヲ云フナリ。

李 閣下一タビ本條約ニ畫押セラル、ノ後ハ貴政府ニ於テモ斷然朝鮮ヲ併合スルノ志ヲ抛タザルベカラズ。

大使 我國ニ於テハ閣下ノ懸疑セラル、ガ如ク毫モ朝鮮ヲ併吞スルノ志ヲ抱クニ非ズ、我國人ノ中或ハ閣下ノ懸疑ヲ受クベキモノアルヤ否ハ本大臣ノ能ク斷言スル所ニ非ズ。復タ我國人ノ各自朝鮮ニ對スル意衷如何ニ至テハ、素ヨリ本大臣ノ閣下ニ對シテ證明スルニ由ナキ所ナリ。我國人ノ中偶々閣下ノ懸疑セラル、如キ意想ヲ抱ク者ナキニアラザルベシト雖モ、事瑣末ニ屬シ、敢テ閣下ノ意ヲ煩ハスニ足ラズ。我 皇帝陛下及ビ政府ノ朝鮮ニ對スル意如何ニ至テハ、閣下宜シク潛思熟慮スル所アルベシ。本大臣既ニ反覆此事ヲ陳述セリ、閣下唯ダ當ニ信ヲ措クベキノミ。

李 榎本公使ノ曾テ著ハサレタル書典ノ序文中、朝鮮ノ略取スベキハ日本人ノ輿論ニシテ、決シテ一家ノ私言ニ非ズ云々トアリ。此事十年前ノ著述ニ係ル、今閣下ノ證明ニ據テ之ヲ見レバ、貴國ハ爾來朝鮮ヲ侵略スルノ志ヲ變ジタルモノト推測スベキノミ。

大使 我國人中曾テ朝鮮ヲ略取セント志ス者アリヤ否ハ本大臣ノ閣下ニ對シテ保證シ能ハザル所ナリ。然レドモ此事苟モ政府ノ志ス所ニ非ザル以上ハ、又閣下ノ痛痒ニ關セザルコト明カ

ナリ。且ツ貴國人中ニモ亦或ハ我國ト戰ハント欲スル者アルハ本大臣之ヲ知ルト雖モ、本大臣ハ其言ヲ以テ直チニ政府ノ志ス所ト認メザルナリ。

李 我國人中曾テ一人タリトモ貴國ト鋒ヲ交ヘントスルガ如キ非謀ヲ企テタルモノアル事ナシ。

大使 或ハ貴國人民中此ノ如キ志ヲ懷ク者ナキヲ知ルト雖モ、貴國顯官ノ一人現ニ貴國皇帝陛下ニ上奏シ、勤ムルニ日本ト戰ヲ交ユベキヲ以テシタルコトアルヲ聞キ、幸ヒニ其奏議ノ寫文ヲ得テ之ヲ詳ニスルヲ得タリ。但シ其寫文ノ正否ニ至テハ本大臣自ラ保スル能ハズト雖モ貴國高官ノ一人我國ニ對シテ深ク敵意ヲ挾ムモノアルハ、本大臣ノ斷ジテ疑ハザル所ナリ。請フ事ノ曲折ニ涉ルモノハ姑ク之ヲ言外ニ措カレンコトヲ。

李 (微) 本大臣モ亦希フ所ナリ、貴案ノ第二項「前條約款與兩國交戰之權不相涉」トノ字句ハ更ニ増補ヲ加ヘ其文意ヲ明亮ニセザルベカラズ。僅々此數字アルノミニテハ我國人ヲシテ之ヲ讀マシムルトキハ殆ンド其意ヲ解スル能ハザルノ虞アレバナリ。

大使 少シク公法ヲ諳ズル者ハ能ク其事ヲ解スベシ。伍廷芳氏ハ法律家ナリト聞ク、李中堂能ク其文ヲ解セザレバ之ヲ中堂ニ説明スベキハ伍氏其ノ人ナリ。

李 日本、清國、朝鮮三國執レノ間ヲ問ハズ、向來永ク開伏交戰ノ事アルベカラズ。彼此相互ノ間恒ニ和好ヲ保續セザルベカラズ。閣下倘シ第二項ヲ削除スルコトニ異議ヲ懷カル、トキ

ハ、其文字ヲ改メテ「前約條款仍與中日兩國戰時之權無干」ト爲シ、以テ明ニ中日兩國ヲ指シ特ニ朝鮮ヲ除クベシ。

大使 各邦必ズ宣戰ノ權ヲ享有シ、且ツ宣戰ノ後ニモ亦一定ノ權ヲ有ス。

李 將來朝鮮ノ貴國ニ對シテ戰ヲ宣ブルノ事絶ヘテ無カルベキハ本大臣ノ保證スル所ナリ。

大使 此件素ヨリ貴我双方ノ間ニ專斷スベキ私事ニ非ズ。凡ソ死生常ナキハ人生ノ免レザル所タニ邦國ノ大事ヲ議シテ且ニ黃土ノ客トナルモ亦知ルベカラズト雖モ、國ハ永ク存シテ死セザルモノナリ。刻下貴我双方ノ間ニ論議スルモノハ永ク標準ヲ萬世ニ垂レ、遠ク効驗ヲ命數窮リナキ兩國ノ上ニ及ボサントスルノ大事ニ屬ス、請フ之ヲ忘ル、勿レ。

李 試ニ史乘ヲ繙テ古來ノ成績ヲ尋ヌルニ、朝鮮ハ常ニ防守ノ地位ニ居リ、日本ハ常ニ進攻ノ地位ヲ占メタル事復タ掩フベカラザルノ實蹟ナリ。

大使 本大臣ハ閣下ヲ待ツテ清朝當代ノ政府ヲ代表スルノ全權大臣ヲ以テシタルニ、今ヤ閣下往古ノ事蹟ニ溯リ、晉ニ支那歷朝ノミナラズ、終ニ高麗ノ朝ヲモ代表セラレントスルノ意アラバ本大臣ハ應ニ曾テ元代ニ起リタル歷史上顯著ノ事蹟ヲ此ニ提出シ、以テ閣下ニ満足ノ決答ヲ得ンコトヲ請求セントス。即チ元ノ代ニ當テ貴國ノ兵我國ニ來襲スルモノ前後二回、初メニハ貴國ノ兵上海ヨリ來リ、後ニハ朝鮮ヲ經テ來ル。閣下博ク古今ノ史乘ニ涉ル、此事已

ニ閣下ノ知了スル所ナラン。閣下ハ此事ニ於テ將ニ何等ノ言ヲ以テ本大臣ニ答ヘントスル歟
李 往古日本ヲ襲スタルモノハ支那人ニシテ、朝鮮人ニ非ズ。故ニ曰ク、朝鮮人ハ曾テ貴國ニ
對シ進攻ノ地位ニ立チタルコトナシト。

大使 決シテ然ラズ、日本ヲ襲ヒタルハ元兵ナリシト雖モ、當時韓人現ニ元軍ヲ援ケタリ。韓
人ニシテ嚴ニ局外中立ヲ遵守セバ果シテ元兵ノ其疆土ヲ過グルヲ許サバリシナラン。

李 本條約ヲ調印シタル後ハ我國ニ於テハ必ず再ビ兵ヲ朝鮮ニ派セザルベシ。貴國モ亦必ず其
軌ヲ同フセザルベカラズ。故ニ日本若シ將來朝鮮ヲ經由シ、我國ヲ襲ハント欲セバ、貴國ノ
爲ニ謀ルニ朝鮮ヲ略取スルヲ以テ第一着トスベシ。

大使 日清兩國間ニ於テ戰ヲ交ユル事アルモ、今將ニ訂成セントスル條約ハ兩國各享有スル所
ノ交戦ノ權ニ涉ラザルナリ。

李 草案第二項ノ意ハ果シテ其事ヲ云フ歟。
大使 即チ其事ヲ云フナリ。

李 若シ他國朝鮮ノ疆土ヲ犯スコトアラバ我國ニ於テハ必ず兵ヲ派遣セザルヲ得ズ。
大使 其時ニ當リ兵ヲ該地ニ派遣セラル、ノ權アルコトハ勿論ナリ。

李 其時ニ當テハ我政府ハ必ず貴政府ヲ誘ヒ共ニ兵ヲ該地ニ遣リテ連衡ノ措置ヲ施シ、以テ朝
鮮ヲ防禦スベシ。閣下應ニ其事ヲ諾セラルベキカ。

大使 未生ノ兒ニハ名ヲ命ジ難シ如何。

李 閣下ハ一ニ他國ヲ恐ル、歟、將タ他國ト何等密約スル所アル歟。

大使 他國何レモ恐レザルニ非ズ、而テ本大臣ハ殊ニ貴國ヲ恐ル、ナリ。

李 双方密約ノ件ヲ以テ閣下ノ特ニ之ヲ訂成スルコト能ザルハ如何。

大使 蓋シ本大臣ハ貴國ト秘密連合ノ約ヲ訂スベキ權ヲ有セザレバナリ。想フニ閣下ニ於テモ
亦然ラン。

李 閣下若シ此約ヲ訂スルヲ肯ズルヲ得バ、本大臣ハ此ノ如キ條約ヲ訂成スルノ全權ヲ有ス。
大使 然ラバ本大臣ハ將ニ云ハントス、閣下ノ全權ハ本大臣帶ブル所ノ全權ニ比スレバ遙ニ重
シト。

李 閣下或ハ一ニ他國ノ意ヲ傷ハン事ヲ恐ル、ナラン。

大使 其時機ニ遭遇シ、斷然施ス所アルヲ要スル迄ハ、何等他國ニ涉リ議スルコトナキヲ要ス
李 閣下小心事ヲ慮カル甚ダ深シ、雜談ハ姑ク置キ草案ノ第二項ニ「若他國與朝鮮或有戰爭亦
不在前條之例」ノ一句ヲ加ヘバ稍々本案ニ同意スルニ足ラン。

大使 上疑ノ明文只ダ其大體ヲ示スヲ善シトス、本大臣第二項ニ載スル所大體ヲ盡シテ遺スナ

シ。

李 然レドモ若シ他國朝鮮ノ疆土ヲ犯スコトアルニ臨ンデハ我國當ニ兵ヲ派スベキノ義務ヲ負フナリ。

大使 朝鮮ニ在テ防禦ヲ要スル場合ニ臨ミ、今閣下ノ陳ベラレタル如キ其國ノ舉措ヲ禁ズルハ本項載スル所ノ趣意ニ非ズ、此ノ如キ場合ニ於テ朝鮮ニ貴國ノ兵ヲ派スルヲ得ルハ勿論ノ事ニシテ、本案載スル所ト更ニ牴觸スル所ナシ。要スルニ本案ノ第一項ニ載スル所ハ、兩國各其駐兵ヲ撤回スル爲ニ相互ノ約束ヲ立ツルニ在リ、異日朝鮮外國ノ侵略ニ逢ヒタルノ時、貴國ノ止ムヲ得ズ兵ヲ朝鮮ニ派セラル、ガ如キ場合ニ於テハ、本條約載スル所貴國固ヨリ之ニ率準スルヲ要セザルナリ。

李 故ニ本大臣ハ本條約ニハ今一層明瞭ナル條款ヲ設備センコトヲ欲ス。

大使 閣下強テ第二項ニ異議ヲ挾マル、ナラバ、本大臣ハ寧ロ悉ク此項ヲ削除スルコトニ同意スベシ。

李 本大臣ハ他國ノ侵略ニ對シ朝鮮ヲ防護スル爲メ、我國ニ於テ朝鮮ニ兵ヲ派スルヲ得ルノ權利アルノ明條ヲ本條約中ニ加ヘンコトヲ希フ。

大使 斯ル場合ニ臨ンデ貴國ノ朝鮮ニ兵ヲ遣ルノ權アルハ本大臣ノ承認スル所ナリ。然レドモ刻下貴我双方ノ間ニ妥協ヲ遂ゲントスルモノハ專ラ貴我兩國兵ノ朝鮮ニ駐紮スルモノヲ撤回スルコトニ關シ條約ヲ訂成スルノ一事ニシテ、更ニ其他ノ事ニ關セザルコトヲ察セザルベカラズ。

(尙通辨羅ニ對シテ曰ク) 朝鮮異日他國ト交戦スルアルモ、又然ラザルモ、今我國ノ貴國ト訂成スベキ條約中ニ加フベキ事項ニ屬セズ。

李 貴國ト我國トノ間ニ戰ヲ交ユル場合ニ至テハ、我國ニ於テ兵ヲ朝鮮ニ派スベシ。而シテ又他國ノ朝鮮ヲ侵スノ場合ニ於テモ亦同ジク兵ヲ派スベシ。

大使 異日他國ノ朝鮮ヲ侵シ、爲ニ貴國ノ利益ヲ妨害セルトスルノ場合ニ於テ、貴國ノ朝鮮ニ兵ヲ派スルコトヲ得ルノ權アルハ本大臣已ニ反覆之ヲ辨明セリ。蓋シ本大臣ノ認テ以テ貴國ニ此權アリト爲ス所以ノモノハ、朝鮮ノ獨立ト不獨立トノ兩途ニ關スル問題ト相涉ラザルナリ。若シ他國ノ來テ日本ト朝鮮トノ間ニ在ル島嶼ヲ占領スルアラバ、則チ此侵略ニ對シテ防禦セザルベカラズ(此所ニテ地圖ヲ示シ) 若シ他國此島嶼ヲ占領シ、若クハ之ヲ攻撃シ、我ハ其所ニ陸海軍ノ兵營ヲ設クルガ如キアラバ、我國力ヲ盡シテ之ヲ防禦セザルベカラズ。故ニ他國ノ若シ此島嶼即チ巨摩島ト名ヅクルモノヲ占領スルコトアレバ、貴國同ジク兵ヲ遣リテ防禦セザルヲ得ズ。

李 閣下ハ他國ヲ指シテ云フコトヲ厭フノ甚シキ蓋シ一ニ他國ノ意ヲ傷ハンコトヲ恐ル、モノ、如シ。

大使 閣下ノ敢テ自ラ恐ル、所ナキハ貴國ノ大ナル故ヲ以テナルコトハ本大臣ノ既ニ諒スル所ナリ。然レドモ我小國ニ於テハ敢テ他國ノ意ヲ傷ハンコトヲ恐ルザルヲ得ザルナリ。

李 是レ豈ニ閣下ノ意衷ヨリ出ヅルノ言ナランヤ、本大臣能ク之ヲ知ル。

大使 本大臣今回ノ條約ヲ訂成スルノ後兩國政府ハ各委員二名ヲ派シテ朝鮮ニ前往セシメ、以テ條約ノ事項ヲ施行シ、兼テ其項ノ細目ニ涉ルモノニ就キ彼此妥協酌定スルニ便ナラシムルノ議ヲ此ニ提出シ以テ閣下ノ高裁ヲ得ントス。本大臣ノ深ク慮ル所ハ兩國各委員ヲ派シ、朝鮮ニ在テ彼此妥籌セシメ、以テ兩國駐兵ノ將官ヲシテ自ラ其事ニ與カリ聞カシメザルヲ得策ナリト認ムレバナリ。知ラズ閣下以テ如何ト爲ス。

李 委員ヲ簡派スルノ事ハ我國ニ於テ難事ニ非ズト雖モ、本大臣ヨリ特ニ公文ヲ行ヒ、我將官ニ下スニ本大臣ノ訓令ヲ以テセバ則チ定レリ。我將官等敢テ本大臣ノ訓令ニ戾ルコト能ハズ常ニ恭順事ニ從フモノナリ。況ンヤ彼輩羈旅ニ異域ニ在ル久シカラズトセズ、故國ヲ去リテ已ニ三年、眷戀ノ情自ラ禁ズル能ハズ、佇立延領日ニ歸帆ノ命到ルヲ待ツモノナルニ於テヤ。

大使 閣下人ヲ疑フノ念實ニ深シ、本大臣モ亦少シク閣下ヲ疑ハザルヲ得ズ。向來端ヲ滋スノ虞アルヲ免レ、以テ條約ノ事項ヲ施行スルニ便ナラシメンガ爲ニハ、本大臣兩國政府ヨリ各委員ヲ派遣スルヲ以テ甚ダ必要ナル事ト思惟ス。

李 閣下ノ忠告ニ從ヒ委員ヲ派遣セザルガ爲ニ、倘シ事端ヲ生ズルコトアラバ本大臣當テ其責ニ任ズベシ。已ニ一旦約ヲ設クル上ハ堅ク之ヲ履踐シテ毫モ違フコトナキヲ以テ、夫等ノ事ニ關シテハ各國公使等孰レモ本大臣ニ信ヲ措カザルガモノナシ。

大臣 本大臣ノ忠告ヲ浴レザルガ爲メ向來何等ノ事端ヲ起スニ至ルモ、閣下當テ其責ニ任ゼザルベカラズ。

李 豈ニ敢テ尊慮ヲ煩スコトヲ須ヒンヤ、貴國ノ駐兵既ニ朝鮮ノ地ヲ撤回スルニ及ビ、倘シ我國ノ兵本大臣ノ命令ニ違ヒ強テ該地ニ駐留セントスルガ如キアラバ、本大臣當ニ其責ニ任ズベシ。向來必ズ此ノ如キ情事ノ生ゼザラン事ハ本大臣ノ斷ジテ疑ハザル所ナリ。

大使 異日事端ヲ生ゼザランコトヲ防グニハ成ルベク小心注意スルヲ要ス、一旦事變ノ起ルニ及ンデヤ復タ如何トモ爲シ難シ。寧ロ初メヨリ小心事ヲ處スルニ如カザルナリ。

李 朝鮮ニ駐紮スル我兵士ハ皆本大臣直轄ノ兵ナリ。此兵ハ多クハ本大臣ノ郷里ヨリ出ヅルモノナルヲ以テ、本大臣ノ命令スル所ハ能ク之ヲ遵守シテ毫モ差フコトナシ。我政府ノ希望ニ

副ハント欲スルトキハ、兩國相互ニ兵ヲ撤スル約ノ如キハ決シテ本大臣ノ當サニ承諾スベカラザル所ナリ。吳氏ノ如キモ亦本大臣ガ閣下ノ發議ニ同意シタルヲ喜バズ頗ル異論ヲ唱ヘタリ。今回ノ條約蓋印ノ後ニ至ラバ、我政府顯要ノ職ニ在ルモノ概ネ皆本大臣ガ閣下ノ爲ニ已ムヲ得ズ條約ヲ結ビタルヲ不可トシ、本大臣ニ向テ非常ノ攻撃ヲ爲スベキコト必セリ。

吳大徵 李中堂已ニ閣下ノ發議ニ同意セリ、本大臣此事ニ關シ頗ル異論ナキニ非ズト雖モ、今日ニ在テハ已ニ容喙ノ權ナシ。

榎本 此條約ハ固ヨリ兩國ノ便利ニ基ケリ、苟モ普通ノ感觸ヲ有シ、少シク將來ヲ慮カルノ人ハ必ズヤ容易ニ其議ヲ承諾スベシ。

李 他日朝鮮ニ事アルノ日ハ我國再ビ兵ヲ派セザルヲ得ザルガ故ニ、今我國ノ兵ヲ撤回スルハ我國ノ爲ニ更ニ利害痛痒ナシト云フベシ。若シ他日朝鮮ニ前日ノ如キ事變ヲ生ジタルニ於テハ、我國ハ則チ我國ノ義務トシテ兵ヲ派シ、朝鮮國王並ニ其政府ヲ輔翼セザルヲ得ズ。已ニ朝鮮國王ヲ輔翼スルコト我國ノ義務ナル以上ハ、假令兵ヲ派スルヲ欲セザルモ亦之ヲ派セザルヲ得ズ。此事明カニ之ヲ條約中ニ載センコトヲ要ス。今閣下ノ草案第二項ニ「若他國與朝鮮或有戰爭或朝鮮有叛亂情事亦不在前後之例」トノ數字ヲ加ヘタシ。

大使 閣下ニ於テ此ノ如キ増補ヲ主張セラル、時ハ、我國ニ取リテハ之ヲ以テ相互均一ノ約束

ニ成立ツモノト認ムルヲ得ズ。我國ニ於テ將來再ビ兵ヲ派セザル間ハ、貴國ニ於テモ再ビ兵ヲ派スルコトナシト閣下前回述ベラレタルニ非ズヤ。然ルニ今復タ増補ノ說アリ、閣下屢々新規ノ問題ヲ提案シ來リ、益々論端ヲ滋スニ因テ愈々相互均一ノ主意ヲ失フニ至ラントス。

李 朝鮮他國ト戰ヲ開クカ、又ハ内亂ノ起リタルニ際シテハ我國ニ於テ兵ヲ派シテ以テ朝鮮國王並ニ其政府ヲ助ケザルベカラズ。是レ即チ我國ノ義務ニシテ復タ已ムヲ得ザルモノナリ。

大使 然ラバ今閣下ノ承諾セラレタル撤兵ノ事ハ只ダ一時ノ約束ニ過ギズト云フノ意歟。

李 他日朝鮮ニ内亂ノ起ル事アルカ、又ハ外國ヨリ之ヲ侵略スル等ノ如キ事變ノ現ニ生ゼザル間ハ、我國ヨリ再ビ兵ヲ派スルコトナカルベシ。

大使 此條約ニ據テ見ルモ猶ホ我國ノ朝鮮ヲ侵略スルノ志ヲ抱カザルコトヲ察スルニ足ルベシ。想フニ我日本兵ノ現ニ京城ニ駐紮スルヲ見テ、閣下ノ心ニ喜バザルベキハ猶ホ我國ノ貴國兵ノ朝鮮ニ駐紮スルヲ見テ之ヲ喜バザルニ同ジカラン。閣下ハ曾テ朝鮮ヲ併合スルノ意ナシト云フト雖モ、或ハ却テ自ラ朝鮮内亂ノ機ニ乗ジテ其疆土ヲ侵略セントスル者ナラザル歟トノ懸疑ハ貴國モ亦全ク免ル能ハズ。

李 閣下ハ已ニ能ク朝鮮政治上ノ實況ヲ領知セラル、ナラン。朝鮮ニハ政治上多クノ黨派アリ、各相軋轢シテ互ニ權ヲ爭フ、此黨派中即チ日本ノ朝鮮ヲ略取センコトヲ恐ル、モノアリ、本

大臣竊カニ思フニ、朝鮮政黨ニ此恐ヲ抱カシメタルモノハ或ハ榎本公使ナラン。抑モ彼ノ黨派ハ其由テ來ルコト既ニ久シク、其權力モ亦隨テ甚ダ強大ナリ、今日日本黨或ハ支那黨ト稱スルモノ、如キハ僅カニ近年ニ起リタルモノニシテ、其實虛名ノミニシテ別ニ實力アルニ非ズ。

大使 閣下ノ修正案ニ「或朝鮮有叛亂情事」等ノ語アリ、此ノ如キ場合ニ臨マバ我國ハ豫メ貴國ニ知照スルヲ須ヒズシテ兵ヲ派スルヲ得ルノ意ナル歟。

李 貴國兵ヲ派スルトキハ貴國必ズ我政府ニ向テ豫メ知照スルヲ要ス、我國兵ヲ派スルニ於テモ亦同ジク知照スベシ。

大使 本大臣ハ其事ニ關シ特ニ明條ヲ設クルヲ要セズト爲ス。必要アルニ臨テハ必ズ双方互ニ知照スベシ。今此條約中ニ特ニ其明條ヲ設クルトモ管ニ何等ノ益ナキノミナラズ、却テ他日ノ問難ヲ増スニ過ギズ。

李 然ラバ其事ニ關シ別ニ條約ヲ訂成セバ可ナラン。

大使 否、其事モ本大臣ノ異存アル所ナリ。

李 然ラバ則チ將來朝鮮ニ於テ叛亂又ハ其他ノ内亂ノ起リタル場合ニ於テモ、我國ヨリ朝鮮ニ兵ヲ派スルヲ得ズト云フコトノ主意歟。

大使 貴國兵ヲ派セント欲スルトキハ其兵ヲ派スルノ主意ヲ以テ直ニ我國ニ知照スルヲ要ス。

我國ハ即チ此知照ヲ得ルニ由テ果シテ朝鮮ニ兵ヲ派スルノ必要アルヤ否ヲ查訪スルヲ得ベシ。此事ニ關シ前ニ條約ヲ結ブハ本大臣ノ斷ジテ承諾スル能ハザル所ナリ。若シ他日我國ヨリ兵ヲ派スル事アルトキハ直チニ其旨ヲ貴國ニ知照スベシ。

李 既ニ閣下ノ高諭アリ、本大臣敢テ屬國論ニ涉リテ論議セザルベシ。但シ此ニ閣下ニ一言セザルベカラザル所ノモノナリ。朝鮮人ハ我國ヲ景慕スルノ念甚ダ深シ、故ニ若シ朝鮮ニ反亂等ノ事アルニ際シテハ、我國ハ之ヲ鎮定スルニ便宜ヲ有スルノ多キコト即チ是レナリ。是ヲ以テ朝鮮ニ事アリ、危急ノ際ニ於テハ我國ハ直ニ兵ヲ派シテ之ヲ救ハザルベカラズ。閣下若シ此等ノ場合ノ爲ニ特ニ明條ヲ設ケテ約束ヲ結ブヲ抗論セラル、ニ於テハ、我國ニ在テハ僅々タル寡少ノ兵ヲ該地ニ派スル爲ニ非常ノ困難ニ陥ルベシ。我國朝鮮ニ兵ヲ派ス、其費固ヨリ少ナシトセズ。而シテ是レ皆到底償還ヲ得ザルモノニシテ、我國ノ負擔ニ歸スルモノトス。我國素ヨリ朝鮮ヲ併合セントスルノ志ヲ懷カザルハ復タ辯明スルヲ要セザルナリ。

大使 或ハ然ラン、然レドモ本大臣ニ在テハ閣下ノ述べラル、所ヲ以テ果シテ確實ナリト認ムルコト能ハズ。

李 朝鮮人曾テ害ヲ清國ニ加ヘズ、獨リ日本ヲ害セントス。

大使 是レ亦閣下ノ臆測ニ過ギズ。

李 朝鮮人貴國人ニ害ヲ加ヘタルコト本大臣ノ知ル所尙ホ一回ニシテ止マズ已ニ二回ニ及ベリ大使 然ラバ貴國ハ朝鮮ト戦ヒタルコト幾回アリヤ。

李 閣下ノ意蓋シ昔日ノ事ヲ問ハル、ナラン、朝鮮ハ素ト獨立ノ國ナリシガ、明代ノ後我國戰勝テ其國ヲ得タリ、今閣下ニハ種々異論アリ、即チ左ノ文ヲ條約中ニ加ヘバ如何。

中國一面派兵一面知照日本事定後亦即撤兵回國不再留防

大使 其文ニハ貴國ノ兵ヲ朝鮮ニ駐留スルノ期日ヲ豫メ定ムル能ハズ、他國ノ關係ヨリシテ貴國朝鮮ニ兵ヲ派スレバ本大臣之ヲ承諾スベシト雖モ、其他ノ事ニ因テ兵ヲ派スルガ爲ニ、特ニ條約ヲ定メントスルハ本大臣ノ承諾スル能ハザル所ナリ。

李 朝鮮ノ變亂ニ際シテ常ニ其政府ヲ輔クベキハ我國ノ義務ナリ。例ヘバ朝鮮國王亂黨ニ弑セラル、事アランニ其警報達スルヤ否ヤ我國ニ於テハ直ニ號令ヲ我軍隊ニ下シ、瞬息ノ間朝鮮ニ進軍セシメテ國王ノ遺族ヲ保護セザルベカラザルノ義務アルモノトス。

大使 今閣下ノ發議セラレタル如キ條項ヲ加ヘンコトヲ固ク主張スルニ於テハ、本大臣ハ何等ノ條約ヲ訂成スルコトナク、寧ロ今日ノ現狀ヲ保護シテ更ニ改ムルコトナキニ若カザルナリ夫レ此ノ如クンバ双方ノ論議到底歸着スル所ナカルベキナリ。

李 朝鮮政府ニ對シ叛亂ヲ起スモノアルニ當テ、我國兵ヲ派スルノ權ナシ、夫レ兵ヲ派セズシテ將タ何ヲカ爲サンヤ。

大使 唯ダ朝鮮ヲシテ當ニ自ラ護ルニ足ルベキ兵士ヲ教練セシメ、以テ徒ラニ他國ノ援助ニ依頼スルコト勿ラシムベキノミ。

李 吳氏ノ草案第四項ノ明文ニ更ニ修正ヲ加ヘバ必ズ閣下ノ異議ヲ除キ本案完結スルニ至ラン依テ其明文ヲ左ノ如ク改削セバ則チ閣下ノ意ニ慚フモノアラン。

(修正案) 朝鮮本國如有叛亂滋事該國王若請中國派兵彈壓中國一面知照日本事定之後亦即撤兵回國不再留防

大使 今此ノ如キ條項ヲ加フルトキハ朝鮮ハ恰モ日清兩屬ノ姿ヲ爲スベシ。朝鮮ノ内事ニ干渉セントスルガ如キハ曾テ我國ノ希望スル所ニ非ルナリ。朝鮮ノ當ニ自ラ辦理スベキ事項ハ必ズ朝鮮宜シク自ラ之ヲ辦理シ敢テ他ノ干渉ヲ容ルベキニ非ルナリ。

李 朝鮮ハ未ダ曾テ日本ノ屬國タリシコト非ズ、之ニ反シ朝鮮ノ我屬國タルコト由來實ニ久シ。

大使 朝鮮曾テ我屬國タリシコトアリ、往昔我神功皇后三韓ヲ征服シタル後、朝鮮ノ我屬國ナリシコトハ閣下未ダ曾テ之ヲ聞カザリシ歟。

李 即チ明朝ノ世ニ方テ日本ノ對島及ビ釜山ヲ占領シタル時ノ事ヲ云ハル、歟。

大使 否其時ヨリモ遙カニ數百年前ノ事ナリ。

李 對馬ハ素ト朝鮮ニ屬シ、後世ニ至リ朝鮮ヨリ日本ニ割讓セシ地ナラズヤ。

大使 否決シテ然ラズ、對馬ハ古ヨリ我日本ノ疆域内ニ屬シタルノ地ニシテ釜山ハ當時我人民ノ居留地ナリキ。我ノ朝鮮ニ於ケル毫モ之ヲ侵略スルノ意ナキコトハ既ニ反覆證明セリト雖モ、今閣下ノ提出セラレタル如キ條項ハ斷ジテ之ヲ條約中ニ加ユルコトヲ抗論セザルベカラズ。

李 然ラバ則チ閣下ハ我國ヲ視テ果シテ朝鮮ヲ併合スルノ意アルモノトセラル、歟。

大使 夫レ或ハ然ラン、刻下貴國ヲ疑フベキ證據アルニ非ズト雖モ、亦果シテ其事ナシト云ヒ難シ。獨リ我ノ朝鮮ニ望ム所ハ貴我兩國密着ニ過ギ、却テ軋轢ヲ生ズル事アランヲ防グガ爲メ、朝鮮ヲシテ兩國ノ間ニ居仲スルノ藩屏タラシメントスルニ在リ。

李 我國果シテ朝鮮ヲ侵略スルノ意アラバ何ノ今回ノ如キ約ヲ結ブコトヲ肯ズベケンヤ。

大使 閣下ノ已ニ本件中ニ増補スベシトテ提出セラレタル吳氏草案第四項ノ修正說ハ、實ニ貴我双方ノ間ニテ妥協ヲ妨グルノ一大障礙ナリト云ハザルヲ得ズ。

李 閣下ハ已ニ第一條ニ就テ異論ヲ起サレタルヲ以テ、今復タ吳氏草案ノ第四項ニ修正ヲ加ヘ

事定ルノ後ハ仍ホ即チ撤回スルノ事ヲ増補セント欲ス。我國兵ヲ派スルニ當リ果シテ遣兵ノ必要アリタル歟否、或ハ其事ノ鎮定シタル歟否ハ、貴國駐劄ノ我公使ニ諮詢セバ則チ其實情ヲ得ベシ。若シ其定リタル後ニ於テ我兵尙ホ兵ヲ留メテ之ヲ撤回セザル如キアルニ至テハ、我國固ヨリ約束ニ違フノ責ヲ免レザルナリ。

大使 否、其増補說ニ至テハ決シテ同意スルコト能ハズ。苟モ朝鮮ノ内政ニ關スルノ事ハ宜シク朝鮮ヲシテ自ラ之ヲ措辦セシムベシ。朝鮮ノ常ニ苟且媿安ニ流レ、或ハ貴國ニ、或ハ英ニ或ハ露ニ、一時ノ救援ヲ求ムルヲ見ルハ本大臣ノ實ニ願フ所ニ非ルナリ。朝鮮ノ當ニ自ラ治ムベキ事項ハ必ズ朝鮮ヲシテ自ラ之ヲ治メシメザルベカラズ。今回ノ條約ヲ訂成スルニ相互均一ノ約束ヲ以テスルニ非レバ、到底本大臣ハ承諾スルコト能ハザルナリ。

李 朝鮮國內ニ叛亂アリ、朝鮮國王爲ニ兵ヲ派スルコトヲ請フトキハ義務トシテ我國ニ於テハ兵ヲ派セザルヲ得ズ。

大使 然ラバ則チ貴國更ニ全ク駐兵ヲ撤回セザルヲ可トスルナラン。

李 其事定ルノ後仍ホ乃チ撤回ヲ行フベシ。閣下ノ將來ヲ慮ラル、或ハ恐ル其甚ダシキニ失スルモノアランヲ。

大使 今回ノ條約ハ必ズ相互均一ノ約束ニ基カザルベカラザルコトヲ主張セザルヲ得ズ。閣下

ノ我國ヲ疑フノ念實ニ深シ、過慮ニ失スルトキハ蓋シ閣下自ラ云フモノナラン歟。
李 數年前ニ在テ本大臣稍々貴國ヲ疑フコトアリタリト雖モ、今日ニ及ンデハ絶テ其念ヲ晴ス
ニ至レリ。

大使 他國トノ關係ヨリ貴國ノ兵ヲ派スルノ權アルヲ認容シテ、特ニ明條ヲ掲ゲルコトハ本大
臣ノ承諾スルコトヲ得ル所ナリト雖モ、其他ノ點ニ涉リテハ決シテ承諾スルコト能ハズ。

李 閣下ノ草案中最後ノ二項ヲ存シ、前段意味ヲ變ズルナクシテ字句上少シク修正ヲ加ヘバ果
シテ閣下ノ意ニ適スベキ歟。

大使 閣下ガ本大臣ノ提出セル草案ノ各項ニ對シテ異論アルニ於テハ、已ムヲ得ズ本大臣ハ條
約ニ由テ朝鮮ニ兵ヲ駐ムルヲ得ルノ權ヲ主張セザルヲ得ズ。

李 先ヅ一旦兩國各其兵ヲ撤回スベシ。而テ貴國ニ於テハ條約上朝鮮ニ兵ヲ駐ムルノ權利ヲ保
有スルコト妨ゲナシ、然ルトキハ則チ我國ニ於テモ亦事宜ニ應ジ何時ニテモ兵ヲ派スベシ。

大使 然ラバ則チ今日ニ至ル迄ル迄彼此論議ヲ盡シタルノ効更ニ無シ。今閣下ノ云フ所ノ如キ
ハ一時ノ約束ニ過ギズ。一時ノ約束ハ以テ貴我兩國駐兵ノ間ニ將來滋端ヲ防グノ主意ニ慚ハ
ズ、且ツ兩國和好ヲ妨ゲントスルノ障礙ヲ排除シ、善後ノ事宜ヲ商籌スルニ於テ何等ノ効力
アルコトナシ。是レ洵ニ事ヲ半途ニ附シ去リ徒ラニ苟且安ヲ媮ムニ外ナラズ。

李 我國ニ於テハ何時タリトモ兵ヲ派スルヲ得ベク、將來該地ニ於テ再ビ昨年ノ如キ變亂ヲ生
ゼザランコト必セリ。

大使 然ラバ則チ貴國ニ於テモ亦朝鮮ニ兵ヲ遣ルノ要用ナカルベシ。

李 本大臣ハ只ダ内亂ヲ恐ル、ニ在リ。

大使 今閣下ノ說ニ一旦我兵ヲ撤回スルノ後ハ、必ズ再ビ變亂ヲ生ズベシト云ハレタルニ非ズ
ヤ、果シテ之ヲシテ信ナラシメバ貴國モ亦兵ヲ遣ルノ要用ナカルベシ。

李 然レドモ朝鮮ニ内亂若クハ叛亂ナシトハ斷言シ難シ。閣下幸ニ本大臣ノ直言スルヲ許サバ
本大臣當ニ閣下ニ一言スベキモアリ。過般一條ノ密報ヲ得タルニ、日本人ハ此頃頻ニ朝鮮政
府ヲ教唆シ、清國ノ關係ヲ絶チ、進デ獨立ノ地位ヲ取ラシメンコトニ盡力スト、是レ蓋シ政
府ノ意ニ非ルベシト雖モ、一旦此ノ如キノ場合ヲ生ズルニ至ラバ、我國ハ勢ヒ兵ヲ派セザル
ベカラザルニ至ラン。

大使 朝鮮政府ニ勸ムルニ清國ニ對シテ獨立ノ地位ヲ確クスベシト云コトヲ以テスルハ必ズ在
ルベキノ理ナリ。朝鮮人尙ホ且ツ自ラ公言シテ云ク、朝鮮人ハ須ラク清國ニ對シテ獨立ノ地
位ヲ維持スルニ力ヲ盡サルベカラズト、之ヲ要スルニ此等瑣末ノ事項ハ此席ノ論議ニ於テ
更ニ注意ヲ要セザル所ナリ。

李 日本常ニ朝鮮ヲ教唆スルニ此ノ如キ不善ヲ以テス。

大使 或ハ我國ノ一個人朝鮮國王ニ勸ムルニ其國ノ獨立ヲ維持センコトヲ以テスルモノアルモ未ダ知ルベカラズト難モ、其事我國ニ取テ更ニ關要ナシ。然レドモ唯ダ閣下ニ一言スベキハ朝鮮已ニ獨立國ノ體面ヲ全フシテ外國ト條約ヲ訂成シタルコトハ更ニ争フベカラザル事實ニシテ閣下モ亦之ヲ藐視スルヲ得ザルモノ即チ是ナリ。

李 我國ト朝鮮トニ關スル交渉ノ如何ハ敢テ尊慮ヲ煩ハスヲ要セズ。

大使 本大臣モ亦タ敢テ思慮ヲ煩ハスコトナシ、閣下其事ヲ開談シタルヲ以テ閣下ノ論議ニ對シテ開陳セルノミ。

李 貴我双方ノ論議此ノ如クナルニ於テハ到底商議ノ好果ヲ結ブ能ハザランコトヲ恐ル。吳大澂 雜談ハ姑ク措キ、今双方論議ノ要點ニ歸着シテ談論ヲ盡サルベカラズ。我方ニ於テハ閣下ノ草案第二項ノ增補ヲ主張セザルヲ得ズ、本項ニ此增補セントスル所以ノモノハ將來滋端ノ虞アルヲ免レンガ爲ナリ。

大使 將來滋端ノ虞アルコトヲ免レンニハ、閣下ノ提出サレタル增補說ノ如キハ更ニ何等ノ功アルベキモノニ非ズ。苟モ善後ノ事宜ヲ謀ラント欲セバ朝鮮國王ヲ勸メテ兵士ヲ教練シ以テ自ラ其國ヲ護ラシメ、其自ラ當ニ治ムベキ事項ハ徒ラニ他國ノ救援ニ依頼セズ、自ラ之ヲ治メシメザルベカラズ。是ヲ以テ本大臣ノ思考スル所ニ據レバ、閣下ノ提出シタル增補說ノ如キハ善後ノ事宜ニ於テ更ニ何等ノ効アルモノニ非ズ。

李 素ヨリ本大臣ハ朝鮮國王ニ勸ムルニ兵士ヲ教練シ、以テ其一身ヲ護シ、又其國ノ治安ヲ謀ルコトヲ以テスベシ。然レドモ朝鮮國王ハ自ラ此計畫ヲ實施スル能ハズ、數年ヲ出デズシテ將ニ我國ニ懇請スルニ再ビ遣兵ノ一事ヲ以テセントスルヤ炳焉タリ。蓋シ清國ノ朝鮮ニ兵ヲ派スルヲ見バ日本人ハ恰モ之ヲ清國ガ朝鮮ノ内治ニ干涉スルモノ、如クニ思惟スルコトナキニ非ザルベシト雖モ、其實我ヨリ彼ノ内政ニ干涉スルガ如キコトナシ。

大使 其說閣下ノ一家言ニ過ギズ。前キニ朝鮮ニ貴國ノ兵ヲ派遣セラレタルノ際、輿論ノ之ヲ評スルモノ大ニ貴說ニ反スレバナリ。

李 先ヅ第二項ノ條款ヲ改テ左ノ如クセバ如何。

前條ノ約款ハ從來朝鮮ニ於テ兩國ノ施行シタル權利及ビ向後保有スベキ權利相渉ルナシ此ノ如キ明條ヲ設ケレバ或ハ貴意ニ適スルナランカ、貴國ノ朝鮮ニ於ケル見テ以テ獨立國トナシ、我ノ朝鮮ヲ見ル我屬國ト爲ス。此兩途ニ涉ルノ問題ハ刻下論議スルヲ要セズ、只ダ第二項ノ明文ハ右修正案ノ如ク大體ノ意義ヲ掲グルヲ以テ足レリトス。

大使 我國一たび朝鮮ト條約ヲ訂成セシ以來、朝鮮ノ地歩ハ我國ノ判然ニ領知スル所ナリ。貴

國ト朝鮮トノ交渉如何ニ關シテハ敢テ之ヲ閣下ニ質スノ煩ヲ取ルヲ要セズ、曾テ外國政府ヨリ貴政府ニ質議スルニ朝鮮ノ地位如何ヲ以テシタルニ當リ、貴政府ノ之ニ答ヘタル所ノ要領ハ本大臣既ニ之ヲ知悉スルヲ得タリ。外國侵略若クハ内亂等ニ際シ兵ヲ派セシコトヲ主張セラル、ノ間ハ、本大臣ハ閣下ノ發議ヲ承諾スル能ハズ。抑モ内亂ノ文字何等ノ事ヲ指スカ、朝鮮ノ如キ國ニ於テハ其區域ヲ判定スルハ頗ル難事ニ屬スト雖モ、要スルニ兵ヲ派スルヲ要スルガ如キ重要ノ事件ニハ非ザルヤ必セリ。他國若シ朝鮮ノ疆土ヲ侵スガ如キハ關要甚ダ重大ナルヲ以テ、本大臣當ニ閣下ノ議ヲ容ルベシト雖モ、其他ニ涉リテハ斷然之ヲ拒否セザルヲ得ズ。

李 將來朝鮮ニ於テ何等ノ事變ヲ再出スル歟逆ソ料ルベカラザルモノアリ。故ニ今日無事ノ時ニ於テ我兵ヲ撤シ、將來事アルノ日ニ臨テ再ビ我兵ヲ派セバ則チ我ノ今日朝鮮ニ於ケルト他日更ニ異ナル事ナキヲ得ン。

大使 寰宇廣シト雖モ未ダ曾テ禍ヲ好ムノ國アルヲ聞カズ。異日若シ朝鮮ニ事アルノ日ニ當テハ兩國相互ニ知照シ、共ニ妥協ヲ遂グベシ。朝鮮ノ地ニ變ヲ生ズルトキハ其事ノ關スル所獨リ朝鮮ノミニ止ラズ、延テ貴我兩國共同ノ利益ニ影響スル輕シトセズ。是ヲ以テ本大臣敢テ獨リ朝鮮ノ爲ノミニ謀ルニ非ズ、乃チ貴我兩國ノ交渉ヲ重ジ、大局ヲ顧念スルニ於テ然ラザ

ルヲ得ザルナリ。然リト雖モ禍ノ未ダ起ラザルニ其事ノ如何ヲ豫定センコト到底爲シ難キ所ナルガ故ニ、條約中特ニ明條ヲ設ケテ相互ニ未定ノ事ヲ約束スルモ更ニ其効ナキ事ハ本大臣斷ジテ之ヲ疑ハズ。且ツ徒ラニ朝鮮ノ主權ニ涉リテ貴國ノ所見ヲ論駁シ、爲ニ今日ノ問難ヲ滋スガ如キハ本大臣ノ素ヨリ願ハザル所ナリ。希クハ閣下モ亦徒ラニ朝鮮ノ内政ニ干涉シテ漫リニ紛論ノ端ヲ啓クコトナカラシテ、本大臣ノ今次命ヲ奉ジテ此ニ來ルモノハ、朝鮮ノ獨立論ヲ議シ貴國ノ主權ヲ公認スル爲ニ非ズ。閣下宜シク我意ヲ諒察スベシ。閣下強テ朝鮮ノ主權論ニ涉リテ事ヲ議セラレントナラバ、抑モ本大臣ノ使命ヲ以テ閣下ハ貴國ノ朝鮮ニ於ケル交渉ノ事件ヲ商議センガ爲ナリト思惟セラル、歟ヲ問ハザルヲ得ズ。是レ本大臣ノ敢テ閣下ノ發議ニ承諾スル能ハザル所以ナリ。

李 貴意ノ存スル所深ク之ヲ諒ス。然レドモ本大臣敢テ我國ノ朝鮮ニ於ケル主權ニ關シテ閣下ノ公認ヲ煩ハサントスルニ非ズ。抑モ朝鮮ノ我屬國タルト否トハ全ク別事ニシテ、今本大臣ノ今回條約書中ニ増補セントスル約款ト毫モ相渉ルコトナシ。本大臣ノ増補セントスルモノハ唯ダ舊來兩國ノ朝鮮ニ於テ施行シタル權利ハ、前後ノ約款ト相渉ル事ナキ云々ノ意ヲ以テセントスルニ在リ。請フ之ヲ諒セヨ。

大使 今回ノ條約書中ニ載スル所ノ約款ハ、舊來兩國ノ施行シタル權利ト相渉ルナキコト果シ

テ閣下ノ説ノ如クンバ、特ニ明條ヲ設ケテ之ガ約ヲ立ルヲ要セズ、本大臣ノ視ル所ヲシテ大過ナカラシメバ、將來滋端ノ虞アルコトヲ免カレンニハ、寧ロ此ノ如キ明條ヲ設ケザルヲ善シトス。

李 閣下ノ高案第二項ニ彼ノ増補ヲ加ユル歟、又吳氏ノ草案第四項ヲ轉用スルカ、閣下幸ニ此兩途ニ就キ其一ヲ採擇スベシ。朝鮮ニ内亂事アルニ方テハ、我國兵ヲ派シテ國王ヲ保護スベキハ即チ我國ノ義務ナリ。朝鮮國王ノ其位ニ登ルハ、我皇帝陛下ノ封ズル所ニ依ルモノナリ。

大使 閣下ノ談論苟クモ其事ニ涉リ、殊ニ朝鮮政治上ノ地位ニ涉ル如キアラバ、本大臣ハ閣下ノ言ヲ以テ朝鮮ノ主權論ニ關シ本大臣ノ認諾ヲ請ハル、モノト見做スベシ。

李 如何セン其實蹟ハ既ニ衆人ノ能ク知ル所ナルヲ。

大使 此般ノ事ハ此席ニ於テ談論スベキノ要件ニ非ズ。

李 其事我國ノ朝鮮ニ於ケル主權ニ關ス、敢テ復タ貴國政府ノ認諾ヲ煩ハサントスルモノニ非ズ。

大使 前キニ閣下ハ朝鮮國トノ條約書ノ冒頭ニ、朝鮮ハ中國ノ屬邦タリ云々ノ文字ヲ掲ゲント謀リタル後チ、遂ニ合衆國ノ爲ニ其草案中彼ノ數字ヲ削除セラル、ニ至リ、閣下へ何故ニ其明文ヲ削除スルコトヲ認諾セラレタル歟、敢テ問フ。

李 朝鮮ハ中國ノ屬邦タリノ數字ハ之ヲ條約中ニ掲ゲズト雖モ、當時米國公使ト本大臣トノ間ニ互ニ照會文ヲ行ヒ以テ其事ヲ書シタリ。

大使 其事ヲ照會文ニ書ス、果シテ何等ノ効アル乎、照會文ハ約束ノ効ヲ有セズ、當ニ双方約束シテ後日ニ効驗アルベキモノハ特ニ條約アルノミ。

李 通常ノ照會文ニ非ズシテ當ニ條約ノ一班ニ屬スベキモノナリ。

大使 洵ニ善シ、苟モ兩國ノ間ニ此類ノ條約ヲ訂成スルニ當リテハ各其人民ノ上ニ効力ヲ有セシメンガ爲メ必ズ之ヲ其國事ニ布告スベキモノナルコトハ蓋シ閣下ノ熟知セラルル所ナラン然ルニ貴説ノ照會文ハ未ダ曾テ朝鮮ニ於テ、或ハ米國ニ於テ布告セラレタルコトヲ聞カズ。

李 請フ他事ヲ談ズルヲ休メ談判ノ要件ニ移ルベシ。本大臣ノ今提出シタル發議尙ホ閣下ノ異論ヲ挾サム所ナルニ於テハ、本大臣ハ閣下ノ草案僅ニ最後ノ二項ヲ遺シテ悉ク其餘ヲ削除スルノ外ナシ。

大使 此ノ如キ條約ハ本大臣ノ斷ジテ調印スルコト能ハザル所ナリ。

李 然ラバ條約ヲ以テセズシテ專條ヲ以テスベシ。今回ノ事ニ關シテ約ヲ立ル兩條ノ明文ヲ以テ其意ヲ盡スニ足レリ。復タ何ゾ徒ラニ條項ヲ噓列シテ文飾ヲ事トセシヤ。

大使 假令閣下ノ發議ニ隨ヒ專條ヲ以テ其事ヲ定約スベシト雖モ、苟モ兩國各其便宜ニ應ジ何

時モ兵ヲ派スルノ權ヲ保有スルニ於テハ、更ニ訂約スルノ用ナシ。數日來攷々辯論ヲ費シタルノ結果ハ一時兩國ノ駐兵ヲ撤回スルニ過ギズ、一時ノ撤兵ハ以テ遠ク朝鮮將來ノ靜謐ヲ謀リ、永ク貴我兩國ノ鄰誼ヲ保續スルノ良計ト爲スニ足ラズ、果シテ此ノ如クンバ則チ本大臣ハ使命ヲ奉ジ貴國ニ來ルノ結果ハ竟ニ善後ノ事宜ヲ要定スルコト能ハズ、徒ラニ兩月間ノ日子ヲ銷遣シタリト云フノ外アラズ。

李 是レ本大臣閣下ノ高案中最後ノ二項ヲ以テ今回ノ計ヲ訂スベシト云フ所以ナリ。

大使 其說毫モ本大臣ノ素懷ニ協ハズ。

李 兩國間常ニ和好ヲ存續スルニ於テ閣下ノ說ノ如ク必ズ詳密立約スルヲ要セズ。

大使 本大臣ノ草案ニ必ズ修正ヲ加ヘラレントナラバ左ノ文字ヲ改ムルニ止メバ本大臣當ニ肯諾スルコトヲ得ベキナリ。

(修正案) 朝鮮ニ變亂アリ朝鮮國王若シ兩國ノ内其一方ニ兵ヲ派シテ彈壓センコトヲ請フガ如キコトアラバ兩國各其一方ノ承諾ヲ得テ後該地ニ兵ヲ派スルコトヲ得ルノ權ヲ保有ス。

李 閣下ノ草案中最後ノ二款甚ダ簡約ニシテ其意ヲ盡クス。實ニ探ルベキナリ。我國ニ於テハ向來急變ニ因テ已ム事ヲ得ザルノ外更ニ該地ニ兵ヲ派スコトナカルベシ。

大使 外國ノ侵略ニ涉ルモノニ至テハ事態ノ關要甚ダ重キガ故ニ、之ヲ明條ニ載セントナラバ本大臣之ヲ承諾スベシト雖モ、其他ノ事項ニ涉ルモノニ至テハ斷然之ヲ拒否セザルヲ得ズ。

李 他國ノ朝鮮ヲ侵略セントスルガ如キ場合ニ於テハ素ヨリ兵ヲ派スルノ權ヲ有スレバナリ。是ヲ以テ前條ノ約款ヲ删除シ最後ノ二款ヲ存スルヲ善トス。

大使 今回兩國ノ兵ヲ撤シタル後貴國若シ兵ヲ派スルノ事アラバ今日ノ談論ノ効果シテ何クニ在ルヤ。

李 兩國其兵ヲ撤スルノ後ハ其後更ニ紛議アルベカラズ、而シテ朝鮮ハ常ニ靜謐ナルニ於テハ我國ヨリ再ビ兵ヲ派スルノ必要ナカルベシ。我國ヨリ兵ヲ朝鮮ニ派スルノ費用ハ當ニ此ヨリ節略スルコトヲ得ベキナリ。

大使 閣下更ニ朝鮮ニ兵ヲ派スルコトヲ主張スルニ於テハ、則チ更ニ此談論ヲ要スルコトナク且ツ初メヨリ之ヲ撤回セザルニ若カズ。

李 最後ノ二項ヲ相合シテ一項トナシ、以テ今回ノ約ニ充ツ充分ナリト云フベシ。
大使 双方意見ノ異ナル所甚ダ大ナリ、先ヅ本日ハ論談ヲ此ニ止メ願クハ諸君本大臣ト食ヲ共ニスルノ歡ヲ盡サレンコトヲ。

時ニ午後七時ナリ。

伊藤李天津會談筆記要略 第七回

一千八百八十五年四月十五日午後三時、天津水師營務所ニ於テ第七回會談ヲ開ク、日本側ノ出席者ハ伊藤大使、榎本公使、井上議官、伊東大書記官、鄭權大書記官ニシテ支那側ハ李鴻章、吳大澂、續昌、伍廷芳、羅豐祿ナリ、伊東大書記官英文並ニ和譯筆記ニ當ル

大使 前回ニ於テ不幸ニモ撤兵ノ事遂ニ一定ノ歸着ヲ得ズシテ止メリ。依テハ愈々妥協ヲ得ルノ目的ヲ以テ尙ホ論議ヲ盡サルヲ得ズ。爾後本大臣ハ此件ニ付靜思熟慮スル所アリ。惟フニ閣下モ亦同ジク潜心考案セラレタランヲ信ズ。

李 本大臣モ亦細心留意スル所アリ。而テ過日本大臣ノ提出シタル草案ハ共ニ双方ノ意ニ適スベキヲ益々感ズルニ至レリ。然ルニ閣下ハ何ノ故ニ此草案ヲ以テ意ニ適セズトセラレ、カ、

本大臣ノ了解ニ苦シム所ナリ。

大使 既ニ反覆討議シタル以來、本大臣モ亦注思再考セント雖モ、到底双方意見ノ異ナル點ハ閣下ノ主張セラル、所ニ由テ双方均一ノ主意完備セザル一事ニ在リ。要スルニ彼ノ二項ヲ増補スルコトナクンバ却テ本案ノ各款簡明ナルヲ得ン。閣下ノ說ニ據レバ本大臣ノ提出シタル草案中最後ノ二項ヲ除クノ外ハ悉ク之ヲ削除セントスルニ在リ。然レドモ最後ノ二項ノミヲ以テ未ダ全案ノ趣意ヲ盡スニ足ラズ。故ニ幾分歟之ニ増補ヲ加ヘザルベカラズ。頃日來談判筆記ヲ熟覽スルニ、貴政府ノ意此約書中ニ相互均一ノ明條ヲ設クルニ於テ異論ナキハ既ニ明瞭ニシテ、本大臣ノ復々疑ヲ容レザル所ナリ。故ニ若シ他日事變起リ兩國兵ヲ朝鮮ニ派スルノ必要アルニ於テハ、前以テ之ガ報知ヲナサシムルコトヲ定メザルベカラズ。抑モ我國ニ於テ兵ヲ派スルハ非常ノ場合ニ限り、兩國ノ商民或ハ一個人ノ間ニ爭端ヲ生ジタル等ノ故ヲ以テ辭柄ヲ設ケザラシムベシ。一旦已ムヲ得ザル必要在リテ兵ヲ派スルモ、其事ノ定ル後ハ直ニ之ヲ撤回セザルベカラズ。

李 閣下ハ更ニ草案ヲ作ラレタル歟。

大使 然リ望ラクハ此上多少ノ故障ナカランコトヲ。

(左ニ草案ノ寫ヲ載ス)

- 一、議定、兩國各撤駐紮朝鮮之兵、自畫押蓋印之日起、以四個月爲期、限內各行盡數撤回以免有兩國滋端之虞、大清國兵、由馬山浦撤去、大日本兵、由仁川港撤去、
- 一、兩國均允勸朝鮮國王、使其教練兵士、足自護治安、又由朝鮮國王、選他外國武辨一人或數人、委以教演之事、
- 一、將來於朝鮮國、若有紛難、兩國或一國要派兵應、先互行文知照、及其事定、仍即撤回、不再留防、

李(草案ヲ熟閱シテ)大體ニ於テハ異論ナシト雖モ、聊カ字句ヲ修正セントス。我ニ於テハ朝鮮ニ重大ナル變亂ノ起リタルトキ又兵ヲ派セザルヲ得ズ。故ニ第三項ヲ更メテ、
朝鮮國若有變亂重大事件中日兩國或一國要派兵

云々トノ明文ヲ掲ゲンコトヲ望ム。

大使 第三項ノ修正ハ別ニ本大臣ニ於テ異論ヲ挾ム所ナシト雖モ、抑モ此草案ノ趣意ハ兩國共ニ朝鮮ニ兵ヲ派スルヲ要スルコトハ最モ重大ノ場合ノミニ限り、鎖細ノ事件ヲ以テ出兵スベカラザルヲ兩國相互ニ約諾スルニ在リ、蓋シ此事ハ閣下ニ於テモ明ニ了解セラレザルベカラザルナリ。

李 實ニ然リトス、例ヘバ□國朝鮮ヲ侵略セントスルトキハ我國直ニ出兵セザルヲ得ズ。其他之ニ等シキ重大事件ノ起リタルトキモ亦兵ヲ派スベシ。尤モ此場合ニ於テハ直ニ貴政府ニ通報セン。

大使 可ナリ、今閣下ノ述ベラレタル事ハ永ク記憶シテ忘ル、コトナカルベシ。
李 今本大臣ノ述ベタル□國朝鮮ヲ窺フ事ハ、止タ貴我兩國全權大臣ノ密諾トシテ互ニ記憶セシコトヲ希望ス。

吳大徵 異日朝鮮ニ危急ノ變ヲ生ジタルトキハ、本大臣ハ職武官ニ在ルヲ以テ必ず貴國ノ將官ト便宜妥籌スルコトアルベシ。然レドモ將來此ノ如キ凶事ナカラン事ヲ冀フ。

大使 本大臣ニ於テモ亦其意ニ外ナラズ。
李 此草案ニ加筆シタル點ハ僅ニ字句ノ修正ニ止リ、別ニ辯ズルノ要ナキヲ信ズ。其他ノ事項ハ皆本大臣ニ於テ承諾スルコトヲ得。

大使 諾了、唯ダ文字ノ修正ニ止リ、意義ニ變動ナキ以上ハ本大臣モ亦異議ナシ、是ニ於テ本案ハ全ク協議整ヒタルナリ。
(字句ノ修正ハ第一大清國ヲ中國トシ大日本國ノ大ヲ削除シ、第二項教練ノ上使其ノ二字ヲ削リ足ノ下ニ以選ノ下ニ備ノ字ヲ加へ、第三項朝鮮國ノ上於ノ字ヲ削ル、皆意義ニ異同ナキヲ以テ英文筆記ニ載セズ)

李 此條約ノ手續ニ付閣下ト議スル所アラン、我國ノ例凡ソ外國ト訂約スルニ當リ、我先ヅ漢文ヲ作り其外國使臣自國文ヲ作ルナリ。故ニ今般ノ事モ亦我方ニ於テ漢文ヲ製シ貴方ニ於テ日本文ヲ製セラレンコトヲ望ム。又皇帝批准ノ事ハ互ニ正式ヲ守テ交換ノ手續ヲ經ルトキハ徒ニ煩ヲ滋シ時ヲ費スヲ以テ、兩皇帝批准ノ後互ニ通知スルニ止メバ大ニ簡便ヲ得ベシ。大使・洵ニ貴説ノ如シ、然レドモ漫然批准ノ後ト云ハンヨリ寧ロ互ニ期ヲ定メテ通知スル事ヲ約スベシ。

李 素ヨリ謂レナク遷延スルコトナシ、今日マデ討論審議シテ粗ボ閣下ノ意ニ適セン爲ニ、本大臣ハ非常ノ讓與ヲナセリ。此上ハ唯ダ批准ヲ待ツノミ。然レドモ我政府ノ認可スルヤ否ヤニ至テハ本大臣ノ甚ダ危懼スル所ナリ。

大使 閣下ノ所謂批准ハ一國ノ君主タル者常ニ享有シテ之ヲ實行スルニ信義ヲ以テスルノ批准タルヲ信ズ。又閣下ハ畫押蓋印ノ權ヲ有スルニ因リ、此ニ本大臣ト本案ヲ商辨立約スル所ノモノハ皆終局ノ決定タルヲ附言ス。

李 兎ニ角我皇帝ノ批准ハ必ズ之ヲ要ス、初メ吳氏ノ起稿シタル草案ニ依レバ、朝鮮ニ兵ヲ派スルノ權ハ獨リ我國ノミ之ヲ保有スベキノ意ナリ。即チ載セテ氏ノ草案第四條ニ在リ、抑モ氏ノ此意見アルモノハ誠ニ簡短ニシテ、明白ナル理由ノ存スルアリ。何ゾヤ曰ク我國ハ何時

タルヲ問ハズ便宜兵ヲ朝鮮ニ派スルノ權ヲ有ス、之ニ反シテ貴國ノ朝鮮ニ於ケルハ條約上ノ交渉アルノミニ據ルヲ以テ、復ビ兵ヲ派スルノ要用ナキ事則チ是レナリ。事理既ニ此ノ如クナレバ、本大臣ノ吳氏ヲ説テ此非常ナル讓與ニ同意セシムルニ付キ、本大臣ノ竊カニ苦心罄カシタルモノハ恐ラクハ閣下想像ノ外ニ在ルベシ。

大使 唯ダ此上ハ批准ニ付一定ノ期ヲ約スルヲ要ス。貴方ニ於テ凡ソ何日ノ後之ガ知照ヲ爲シ得ラルベキ歟。

李 此條約ニ蓋印シタル後四個月ヲ期シテ兩國ノ兵ヲ撤回セシム。

大使 其事ハ既ニ確定セリ、今本大臣ノ閣下ニ問フ所ノモノハ凡ソ何日ノ後批准ヲ報知スル事ヲ得ルト云フ一事ナリ。但シ批准ノ知照ハ兩國兵ノ撤回ヲ舉行スル前ニ於テ双方之ヲ爲サルベカラズ。

李 既ニ貴我兩全權大臣ノ間ニ論議シタル結果ヲ總理衙門ヲ經テ我皇帝陛下ニ上奏スル時、北京ニ於テハ顯職ニ在ル者ヲ召集シテ其事ヲ會議セシムルヲ例則トス。故ニ我國ヨリ批准ヲ知照スルニハ許多ノ日子ヲ要スベシ。

大使 貴政府ニ於テ會議ヲ盡サル、事ハ全ク貴政府ノ内事ニシテ、本大臣ノ與リ知ル所ニ非ズ是ヲ以テ本大臣ハ豫メ其期ヲ定メ以テ双方ノ知照ノ日ヲ約セザルベカラザルナリ。

李 然ラバ先ヅ二個月以内ト約スベシ。閣下ノ有スル所ノ委任狀ノ旨ニ遵ヘバ、凡ソ閣下ノ訂約スル所ノモノ向後批准ヲ要セズトアリ。而テ本大臣ノ訂約スル所必ズ批准ヲ經ザルベカラズ。是レ閣下帶ブル所ノ權遙ニ本大臣ノ權ニ超ユル所以ナリ。

大使 然レドモ既ニ貴方ニ於テ批准ヲ要セザルベカラズトセバ、双方均シク之ガ手續ヲ經シコトヲ欲シ、我ニ於テモ亦批准ヲ經ザルベカラズ。

李 貴國朝鮮ヲ併吞スルノ念毫モアルコトナシト保證セラル、モ、若シ他國ノ朝鮮疆土ヲ侵シタルトキハ貴我兩國相連衡シテ防護ノ法ヲ講ゼザルベカラズ。

大使 朝鮮今日ノ狀況ヲ以テ永ク維持センコト希望ニ堪ヘズ。

李 若シ貴我兩國ノ間密約ヲ結ブコトアラバ、□國ハ決シテカヲ朝鮮ニ試ムル如キコトナカルベシ。嘗テ□國公使ニ面會シタル時、其意見ヲ聞クハ、公使ハ答フルニ□國ハ毫モ朝鮮ニ對シテ望ヲ繋グ所ナシ。如何トナレバ□國政府ハ「シベリヤ」地方ニ施スベキ政績未ダ悉ク舉ゲザレバナリ、等ノ言ヲ以テセリ。然レドモ英佛獨三國ノ公使等ハ本大臣ニ告ゲテ□國朝鮮ヲ侵略スルノ意勃々タリト云ヘリ。二者其主旨ノアル所全ク反對ニ出ルモノナリ、閣下ハ果シテ孰レヲ信ジ孰レヲ疑ハル、歟。

大使 恐クハ英佛獨三國ノ公使等ハ公然タル使節ノ資格ヲ以テ述べタルニ非ザルベシ。

李 素ヨリ是レ閑談ニ過ギズ、決シテ公然タル資格ヲ以テ應答シタルモノニ非ズ。

大使 本大臣ハ此問題ニ答フルニ□國公使ノ言ヲ信ズルノ意ヲ以テセザルベカラズ。凡ソ國ト國トノ交際ニ於テ互ニ相疑フトキハ、之ガ爲メ竟ニ其間ニ齟齬ヲ啓キ容易ナラザル變動ヲ招クニ至ルコトアリ、故ニ其事ノ實跡ヲ顯ハサル間ハ斷ジテ□國ノ害心アルヲ明言スルコト能ハザルナリ。

李 朝鮮ハ我接壤ノ國ナリ、向來朝鮮戒備ノ事ニ至テハ我國深ク心ニ銘シテ忽諸ニ附スベカラズ。

大使 苟モ一國タルモノ其疆土ヲ防護スル爲ニ須ク戒備ナカルベカラズ。

李 聞ク□國ハ浦鹽斯德ニ海軍屯所ヲ設クト雖モ、此地氷結シテ四季尙ホ融解スルコトナシ。是ヲ以テ□國ノ東洋ニ良港ヲ得ントスルノ意頻リナリ、□國今日ノ急務ハ實ニ東洋ニ一良港ヲ占領スルニ在リ、勢ヒ此ノ如クナルヲ以テ或ハ疑フ□國ハ數年ヲ出ズシテ必ズ東洋ニ大事ヲ舉ゲンコトヲ、若シ一旦□國良港ヲ朝鮮海ニ得テ海軍屯所ヲ其所ニ設クルニ至ラバ、貴我兩國ニ影響スル決シテ輕キニ非ズ。閣下□國將來ノ舉動ニ就テ見ル所アラバ幸ニ垂教ヲ吝ム莫レ。

大使 其事ニ付テハ流傳ノ說頗ル多シト雖モ、本大臣ノ親シク見聞スル所ニ仍レバ孰レモ確然

タル憑據アルコトナシ。

李 浦鹽斯德ハ一年ノ内五個月ヲ除クノ外ハ常ニ氷結スルヤニ聞ケリ、元山津果シテ良港ナルヤ。

大使 良港ニ非ズト聞ケリ。

李 頃日米人英人ノ元山津ヲ經テ此地ニ來リタル者本大臣ニ告ルニ其良港タルヲ以テセリ。

大使 元山津ノ事ヲ云ハル、歟。

李 過日英國水師提督ハ二日間元山津ヲ測量シテ歸リ報ジテ良港ナリト云ヘリ、閣下必ズ此良港ヲ忘ルコト勿レ、然ラザレバ遂ニ他ノ手裏ニ落ルニ至ラン。

大使 元山津ハ如何ナル良港歟知ラズト雖モ、凡ソ港ノ良否ヲ判別スルハ其大小如何ヲ知ルニ若カズ、而シテ其大小ハ大船巨舶ヲ繫泊スルヤ否ヤニ在リ。

李 元山津ハ舳艫相接スルモ差支ナキ良港ニシテ且年中氷結ノ憂ナシト云フ。

大使 否、冬季ニ於テハ氷結ノ憂アリト聞ケリ。

李 本大臣ノ聞ク所ニ據レバ然ラザルナリ。

大使 其事ハ貴我ノ問件ニ非ザレバ請フ姑ク話スルヲ休メヨ、却テ説ク撤兵ノ事ハ既ニ條約草案ヲモ議決セリ、就テ我談判ヲ要スル三件ノ内既ニ之ハ妥協ヲ經タリト雖モ、他ノ二件ハ閣

下果シテ之ヲ處辨スベキ歟。

李 其二件ニ就テハ此上論議セザルヲ善シトス。然ラザレバ復タ辯争セザルヲ得ザルニ至ラン大使 撤兵ノ件ハ則チ我要求ノ一ニシテ他ノ二件トハ全ク性質ノ異ナルモノナリ、既ニ是等ノ

事ニ就テハ過日來閣下ニ詳述シタリ、故ニ他ノ二件ニ付貴方ヨリ斷然決答アラシト望ム。

本大臣ハ必ず我要求ニ付満足ヲ得ザルベカラズ。過日閣下ノ説ニ我將官ヲ罰セント欲セバ、

又宜シク竹添公使ヲモ罰スベシト云ハレタルコトヲ今尚ホ胸裏ニ記憶セリ。既ニ今日ニ至テ

ハ双方共ニ満足ヲ得ベク妥當ノ局ヲ結バンコトニ力ヲ戮ハザルベカラズ。

李 然ラバ則チ撤兵ノ事ニ關シ閣下ノ嘗テ主張セラレタル如ク、相互均一ヲ主トシテ其問件ヲ

商定セザルベカラザルナリ。蓋シ其均一ト云フハ答ヲ我將官及ビ竹添公使ニ均シク歸スルニ

在ルノミ。本大臣一己ノ見ヲ以テスルモ此件ヲ商定スルノ道之ヲ他ニ求ムルモ得ベカラズ。

大使 閣下一家言ヲ以テセバ本件ヲ商定スルニ此法ヲ以テセンコトヲ望マル、ナラント雖モ、

本大臣ノ反覆詳論シタルモノハ素ヨリ本大臣一己ノ見ニ非ズ、即チ我一國ノ所見ナルコトハ

閣下ノ已ニ諒知セラル、所ナラン。

李 然ラバ此件ニ付テ閣下ノ見ハ果シテ何處ニ在ル歟、幸ニ教ヲ乞フ。

大使 本大臣ノ卑見ニ據レバ答ノ歸スベキモノハ獨リ貴將官ナルヲ信ジテ疑ハズ。

李 閣下ノ高見果シテ今述ベラル、如クンバ全ク本大臣ノ所見ニ反對スルヲ以テ到底協議ヲ遂グルノ望ナキガ如シ。

大使 然リト雖モ兩國ノ和好ヲ重ンジ双方ノ意ニ適スベク協議ヲ遂グルノ外ナシ。

李 是ヲ以テ本大臣ハ閣下ニ懇請スルニ報酬トシテ我ニモ亦満足ヲ與ヘラレンコトヲ以テスベシ。竹添公使ハ嘗テ貴國領事トシテ此地ニ駐劄セラレ、本大臣等公使ト相識ルコト久シ。而テ閣下ハ今我將官ノ處罰ヲ要求セラル、モ本大臣ノ舊識タル竹添公使ノ罪ヲ鳴シテ其ノ處罰アラシコトヲ主張スルハ實ニ本心ニ於テ忍ビザル所ナリ。

大使 或ハ情實ニ於テ然ルコトアラント雖モ、今回ノ事苟モ私交ニ關セザルナリ。

李 然リ、故ニ閣下此一方ニ向テ主張セラル、トキハ、本大臣亦已ムヲ得ズ彼ノ一方ニ向テ主張スル所アラザルヲ得ズ。

大使 何等ノ情故アルモ決シテ此案件ヲ抛擲スルコト能ハズ。既ニ閣下ニ對シテ反覆詳論シタル如ク、貴政府ハ必ず貴將官ノ所爲ニ就テ所分スル所アラザルベカラザル旨ヲ主張スルノ外ナシ。

李 果シテ然ラバ竹添公使モ處罰セザルベカラズ。

大使 其事ニ就テハ既ニ説明ヲ盡シテ餘蘊アルナシ。柳モ何等理由ノ在リテ本大臣ノ此ノ要求

ヲ爲スカハ既ニ閣下ノ知悉セラル、處ナリ。竹添公使ノ所爲ハ專心一意其駐劄國々王ノ再三ノ需ニ應ズルニアリタルヲ以テ、何レノ點ヨリ之ヲ論ズルモ竹添公使ノ處爲ハ一トシテ正理ニ協ハザルモノナシ。之ニ反シテ貴國ノ將官ハ抑モ何等ノ理由在ルアリテ竹添公使ヲ銃撃シタルカ、將官ノ處爲一トシテ不法ノ砲撃ヲ加ヘタルニ非ズト認ムルコトヲ得ズ。其他貴國兵ノ京城居留ノ我臣民ニ兇暴ヲ行ヒタルコトニ付、現ニ其慘狀ヲ點撃シタル我臣民ノ口供ヲ徵シテ既ニ前曲ニ於テ貴國ニ供セリ、惟フニ閣下ハ深ク意ヲ留メテ其詳ヲ盡サレタルタラシ。之等ハ本案事體ノ關スル所極メテ重大ナルヲ諒察シ、猶ホ潛心再考セラレンコトヲ望ム。

李 本大臣ハ我將官ノ竹添公使ニ銃撃ヲ加ヘタルノコトハ更ニ事實ト認メ難シ、何トナレバ我將官モ亦國王ヲ保護スル爲ニ王宮ニ入りタルノ他意ナキヲ以テナリ。當日朝鮮ノ官民ハ共ニ我軍營ノ轅門ニ來リ、兵ヲ率テ王宮ニ入り以テ國王ヲ保護センコトヲ歎願セリ。是レニ於テ我將官ハ其所願ヲ聽容シ、國王一身ノ危險ヲ恐レ、已ムヲ得ズ兵ヲ率テ王宮ニ赴クニ至レリ。而テ王宮ニ入ラントスル時不意ニ城中ヨリ先ヅ槍ヲ發セラレタリ、素ヨリ我將官ハ貴國公使及ビ其護衛兵ヲ銃撃スルノ念ナシ。嘗テ閣下ノ述ベラレタル如ク城内韓兵ノ守衛アリ、而テ貴我ノ兵共ニ相隔絶ス、故ニ我兵先ヅ發槍セリトスルトキハ理當ニ韓兵ヲ攻撃セザルベカラズ。是ニ依テ觀レバ我兵ノ貴國兵ヲ攻撃スルヲ得ザルヤ瞭然タリ。

大使 我方ニ於テモ亦然リトス。

李 此故ニ双方咎ノ歸スベキナシト云ヘリ。

大使 然レドモ當時ノ事實歴々徴スベキアリ、其貴國兵ヨリ攻撃ヲ加ヘタルハ明白トス、故ニ本大臣ニ於テハ貴政府ヨリ相當ノ満足ヲ得ンコトヲ要求スルナリ。

李 我將官ノ貴國兵ヲ攻撃スルノ念慮ナキハ瞭然タル證據アリ、若シ我將官ニシテ初メヨリ惡意ヲ挾ムトキハ竹添公使ニ書ヲ送ルノ謂レナシ。而シテ我政府ハ將官ヲ罰スルニ躊躇スルコトナカルベシト雖モ、如何セン當日ノ朝書ヲ竹添公使ニ送テ豫メ告ル所アルハ其貴國兵ニ向テ害心ナキヲ見ルニ足ルモノアリ。

大使 本大臣ハ前三回ノ談判ニ於テ確證ヲ提ゲテ我要求ノ基ク所ヲ細大漏スナク詳ニ之ヲ閣下ニ述ベタリ。故ニ此上論議ヲ悉スモ双方其固持スル所ヲ反覆スルニ止マリ、徒ラニ日時ヲ費スノミ。依テ本日ハ單ニ將官銃撃ノ事、並ニ貴國兵兇暴ヲ我臣民ニ加ヘタル事ニ關シ相當ノ満足ヲ要スル事ニ付テ判然タル決答ヲ得ンコトヲ請求ス。

李 既ニ辯明シタル如ク貴國臣民ノ提出シタル證據ハ未ダ以テ事實ヲ確定スルニ足ラズ、該證據ヲ熟閱スルニ、我兵ノ現ニ兇暴ヲ行ヒタルヲ親シク目撃シタルノ證ニ非ズシテ、唯ダ其傳聞想像ニ係ルモノニ過ギズ。

大使 請フ失言スル勿レ、若シ其口供ヲ熟覽セバ即チ實況ヲ目撃シタル證人ノ供述シタルヲ發見スベシ。

李 京城變亂ノ時ニ當リテ上下周章雜沓ノ間殆ント清韓兩兵ヲ辨別セザルニ由ルコトアラシ

大使 我臣民ノ朝鮮ニ居留スル者ニシテ能ク貴國兵ト韓兵ト識別セザルモノアラシヤ。本大臣ハ其點ニ付テモ毫末モ疑ヲ容レズ、假ニ韓兵ノ兇害ヲ加ヘタリトスルモ、僞テ貴國兵ト云フニ於テ何ノ我ニ裨益スル所アラシヤ、此一事ヨリ察スルモ猶ホ我遭難民ノ供述ハ明白ナル事實トスルニ足ルベシ。

李 然レドモ貴國臣民或ハ我駐兵ト商民ノ識別ヲ誤リタリタルカモ亦未ダ知ルベカラザルナリ假令貴國臣民ハ兇害ヲ我兵ニ受ケタリト云フモ、其證據ヲ按ズルニ一モ我兵タルノ實證ヲ擧ゲズ。是レ其行兇者ハ我兵ナリト立證スルコトヲ得ザルニ由ル。

大使 變急遽ニ起リ、殘虐暴戾到ラザルナク、修羅ノ一場ニ臨ンデ如何シテ歎此供述ヨリモ更ニ綿密ナル證據ヲ得ベキカ、普通ノ感覺ヲ有スル人ヲシテ之ヲ判セシメバ、誰カ其證據ノ不備ヲ云フ者アラシヤ。

李 或ハ然ラン、假令閣下ハ何ト云ハル、モ我方ニ之ノ憑證ヲ有セザレバ、此案件ヲ決定スルニ由ナキヲ如何セン。唯ダ我官吏ヲシテ事實ヲ查明セシメ、而テ後憑證ヲ蒐集スル外途アル

コトナシ。

大使 假ニ閣下自ラ其事實ヲ查明シ、果シテ貴國兵ノ中ニ此大罪ヲ犯シタル者ヲ獲バ則チ閣下ハ應ニ如何ニ之ヲ處分スベキカ。閣下果シテ能ク貴國ノ軍律ニ從ヒ之ヲ處斷スベキ歟。

李 本大臣我兵ノ内果シテ犯罪人ヲ發見セバ必ズ處スルニ我陸軍々律ヲ以テスベシ。若シ其犯罪者常人ナレバ直チニ斬罪ニ處スベシト雖モ、先ヅ日人ニ兇暴ヲ行フヲ目撃シタル者ノ證ヲ據得ザルベカラズ。而テ一たび其證ニ據テ我法衙ノ鞫審ヲ經ルノ後、果シテ有罪ト判ゼラレタル者ハ決シテ其刑ヲ免ル、コト能ハズ。然レドモ此事ニ關シテ提供セラレタル事實ノ證據ニシテ他ニ確然タル證據アリテ他日萬一ニモ無効ニ歸スルコトアラバ、實ニ閣下ノ爲ニ惜マザルヲ得ザルナリ。其他ノ事ハ瑣細ニ屬スルノ件ナリ。

大使 閣下ハ今回ノ事件ヲ其關スル所重大ナラズト云フモ、我ニ在リテハ實ニ重大ノ事ト認めザルヲ得ズ。

李 本大臣ハ既ニ承諾シタル事項ノ外更ニ承諾スルコトヲ得ズ。然レドモ我兵ノ中果シテ有罪ト決セラレタル者アレバ、素ヨリ刑ニ處スベシ。是等ノ事ニ至テハ本大臣專ラ公平ヲ旨トシ更ニ假借スル所ナシ。

大使 貴意ヲ了セリ、而テ閣下ノ今陳述セラレタル事要ヲ書ニスルコトヲ得ル歟、猶ホ之ヲ詳

言スレバ閣下ハ貴國ノ官吏ヲシテ事實ヲ查明セシメ、果シテ兵營ノ中ニ我臣民ニ兇害ヲ加ヘタル者アルヤ否ヲ鞫審スルコトヲ書シ、其文ヲ以テ本大臣ニ致スコトヲ得ル歟。

李 素ヨリ妨ゲズ、則チ公文ヲ送テ閣下ニ告ルニ本大臣ハ尙ホ此件ノ查明ヲ遂ゲ、然ル後果シ

テ我兵ノ中ニ犯者ヲ獲バ必ズ陸軍々律ニ從ヒ處分スベシトノ意ヲ以テスベシ。

大使 將官處罰ノ件ニ至テハ既ニ互ニ論議ヲ悉シタルモ、閣下本大臣ノ請求ヲ容レザルニ於テハ意ニ協議ヲ遂ルコトヲ得ザルノ恐アリ。

李 雙方各固ク持スル理由アル時ハ到底協議ノ望ナシ、例ヘバ我將官ハ當日ノ朝八時ニ於テ書ヲ竹添公使ニ致セリト云ヒ、公使ハ午後三時ニ至ルマデ之ヲ接手セズト云フ、其齟齬スルノ甚シキ此ノ如シ。而テ此書翰ハ本件ヲ決定スルニ於テ最モ重大ノ證據トス。何トナレバ書中公使ニ告ルニ國王一身ノ安全ヲ保護スル爲ニ、且ハ其護衛兵ヲ輔ケン爲ニ來ル等ノ文字アルヲ以テナリ。又傍ラ貴國公使並ニ其護衛兵ニ對シテ毫モ害心ヲ含マザルヲ證明スルニ足ルモノナリ。

大使 貴將官ノ果シテ害心ナキハ今既ニ閣下ノ述べラル、ガ如クナラント雖モ、如何セン現ニ形迹ヲ遺シタル事實ヨリ考フルトキハ、貴將官ノ所爲ハ全ク其書翰ニ云フモノト相表裏ス。則チ既ニ該書翰ニ述ブル如ク、貴將官ノ意果シテ我公使及ビ其護衛兵ヲ輔クルニ在ラバ、必

ズ我公使ニ向テ既ニ陳述シタル如キ不正ノ銃撃ヲ加ユルニ至ラザリシナラン。之ヲ要スルニ貴將官ハ書ニ筆スルモノト、實ニ行フモノト全ク表裏反覆シタルモノト謂ハザルベカラズ。

李 若シ竹添公使ニシテ之ガ返書ヲ送り、以テ我將官ニ告グルニ兵ヲ率キテ王宮ニ入ルノ要アルヤ否ヤ、或ハ其他ニ涉テ協議スル所ヲ以テセバ、此ノ如キ兩國兵ノ軋轢ヲ免レタルヤ疑ヲ容レズ。竹添公使ハ人ヲ遣シテ我將官ト協議セシムル所アラシムル歟、或ハ自ラ我軍營ニ至テ事ヲ計ラバ可ナリト雖モ、同公使ハ一モ此ノ如キ注意ヲ取リタルコトナシ。殊ニ同公使ハ當時書記官ヲ伴ヒタルヲ以テ、自ラ我將官ト協議スル事ヲ得ルノミナラズ書記官ヲシテ之ヲ爲サシムルモ亦可ナリ。孰レモ今日ノ問難ヲ避クルノ便ニ乏シカラザリシモ、同公使ハ更ニ此等ノ事ヲ盡サバリキ。

大使 然レドモ一旦事ノ發シタル後ニ至テハ、今閣下ノ述ベラル、如キ手續ハ竹添公使ニ於テ之ヲ盡スノ餘裕アルノ理ナシ。況ンヤ同公使ハ貴國兵ノ王宮ニ入ル前ニ於テ之ヲ知ルニ由ナキニ於テヲヤ。又況ンヤ貴將官ノ當日午前ニ寄送シタリト云ハル、書翰ハ、午後時既ニ遷リタル後銃丸ニ相伴フテ竹添公使ノ手裏ニ落テタルノ事實アルニ於テヲヤ。

李 或ハ然ラン、然リト雖モ竹添公使ハ其翌朝ニ至ルモ猶ホ返翰ヲ送ラズ、是ヲ以テ我將官ハ更ニ書ヲ送テ問フニ何ノ故ニ復信スル所ナキヤヲ以テセリ。

大使 何ニ據テ以テ貴將官ノ書翰ハ當日朝竹添公使ノ確カニ接受シタルヲ證スル歟。

李 今述べタルモノハ則チ我將官ノ第二書ヲ指セルナリ。

大使 第二書ノ事ハ本大臣之ヲ知ラズ、然レドモ第一書ハ果シテ閣下ノ云ハル、時刻ニ竹添公使ノ手裏ニ達シタルヤ否ヤハ何ニ由テ之ヲ證スルコトヲ得ル歟。

李 前日朝第一書ヲ送リタル事ハ其第二書ヲ以テ之ヲ證スルニ足ルベシ。

大使 第二ノ書翰ハ其後ニ至テ送ラレタリト云フニ過ギザルノミ。閣下ハ其第一書ヲ以テ重要ノ憑證トスルモ、其書翰ハ果シテ時機ヲ失フナク竹添公使ノ手裏ニ達セザルニ於テハ何ノ効力カ之レアラシヤ。本大臣既ニ數回辯論シタル如ク、該書翰ハ當日書後其時機ニ後レ争鬭既ニ始マルノ後竹添公使ノ始メテ之ヲ接收シタルモノナルヲ以テ、之ガ返信ヲ致スニ由ナカリキ殊ニ該書翰ニハ將官ノ之ヲ發シタル當日ノ日附並ニ時刻ヲ記載セザルノミナラズ、何人ヲシテ何時ニ携ヘテ之ヲ竹添公使ニ致サシメタルカ、未ダ閣下ノ確證ヲ見ズ、幸ニ其證據アラバ請フ之ヲ示セ。

李 其事ニ至テハ我理事員ノ歸朝ヲ待テ查明スル所アラン。

大使 貴政府已ニ此等ノ事ヲ查明スル爲ニ特ニ二名ノ委員ヲ實地ニ派出シ業已ニ査覈ヲ遂ゲタルニ非ズヤ。

吳大徵 王宮ノ中ヨリ先キニ槍ヲ發シタリ、其時ニ當テ日韓兩兵ノ共ニ王宮ヲ守衛シタレバ、蓋シ日兵韓兵ヲ指揮シテ我清兵ヲ銃撃セシメタルナラン。

大使 我兵ノ指揮ニ依テ銃兵先ヅ發槍シテ貴國兵ヲ撃チタリト云フハ何ノ證據アリヤ。

吳大徵 初メ朝鮮國王ニ對シテ非謀ヲ企ツル者アルノ報ヲ我陣營ニ得タル時、竹添公使ハ早ク既ニ兵ヲ將テ王宮ニ在リキ。抑モ此報ヲ得タル以來十八、十九兩日(曆陰)間、我兵營中ニ在リテ嚴正ナル規律ノ下ニ立チ、寸歩モ自ラ動クヲ許サズ、故ニ竹添公使ニシテ十九日ノ朝ニ於テ王宮ヲ退カバズノ如キ不幸ノ鬭爭ヲ醸スニ至ラザルヤ必セリ。

大使 竹添公使ハ屢々王宮ヲ辭センコトヲ請ヒタレドモ、國王懇ロニ之ヲ留メテ其退宮ヲ許サザリキ。

李 朝鮮人ハ上下トナク竹添公使ノ王宮ヲ退クコトヲ希望シタリ。然ルニ竹添公使ハ此望ニ背キ敢テ王宮ヨリ退カザリキ。

大使 決シテ然ルニ非ズ、今閣下ノ述ベラル、所ハ悉ク誤聞ニ出ヅルナルベシ。聊カ閣下ノ參考ニ供セン爲メ當時ノ事實狀況ヲ述ベシ。閣下及吳氏ノ所述ニ聞クニ、論點分レテ二トナレリ、第一ハ韓兵我兵ノ指揮ニ依テ王城内ヨリ先ヅ槍ヲ發シタル事。第二竹添公使ハ宮中上下ノ希望ニ背キテ強テ王宮ニ留リタル事はナリ。先ヅ第一ノ點ニ就テ云ハンニ、韓兵ハ決シ

テ我方ノ指揮ノ下ニ居ラザルノ理由ヲ了解セラレザルベカラズ。我兵寡少ニシテ貴國ノ大兵ヲ攻撃スベキノ數ニアラズ。之ニ反シテ貴國兵ハ三方ヨリ軍隊ノ攻撃ヲ我兵ニ加ヘタリ。是等ノ事實ハ既ニ屢々閣下ニ證明シタル所ナリ。然ルニ貴方ニ於テハ我兵ノ先ヅ發槍シタルノ事實證據ヲ一モ提供スルコトナシ。想フニ唯ダ我兵ニ懸疑シテ更ニ事實ノ存スルナキニ由ルベシ。第二ハ全ク誤聞ニ係ル初メ竹添公使ハ國王再三ノ求ニ依リ、兵ヲ率テ王宮ニ入りタル時、國王ハ夜ニ入り朕ノ需ニ應ジ速カニ來衛スルハ朕ノ最モ満足シ且厚謝スル所ナリトノ勅語アリタリ。而テ其翌日米國公使以下各國使臣ニ謁見ヲ許サレタル時、竹添公使モ亦共ニ王宮ヲ辭センコトヲ請ヒタルモ、國王固ク留メテ許サズ、公使已ムヲ得ズシテ留リテ六日ノ朝ニ至リ公使復タ辭センコトヲ請ヒタルモ、國王尙ホ許サズ、今暫ク朕ノ側ニ侍センコトヲ望ムトノ勅語アリテ、公使モ亦辭別スルニ忍ビザリキ。是等ノ事實アルニモ拘ラズ、上下ノ意ニ背キ強テ王宮ヲ退クコトヲセズト云ハル、ハ抑モ亦何等ノ證據アル歟。

吳大徵 變亂ノ初ニ當テ朝鮮國王ハ外ニ何等ノ異狀アル歟ヲ知ラズ、偶々侍從ノ御衣ヲ脱シテ民服ニ更ヘ、庶民ニ裝フテ以テ難ヲ日本ニ避ケ玉フベシト奏スルニ及デ初テ事ノ逼レルヲ知リタリ。

大使 不可思議ノコトナリ、其日本國ニ避クルヲ奏聞シタル者ハ誰ゾ。

吳大徵 當時國王ノ側ニ侍シタルモノ數人アリ、即チ竹添公使及ビ書記官金玉均等ノ黨タリ。

其日本國ニ避ケラレンコトヲ奏聞シタルハ其何人タルカ國王モ亦詳ニセザリキ。

大使 苟モ一國ノ君主タルモノ、其國都ヲ去テ外國ニ遁ル、ニ至テハ實ニ容易ナラザル事ナリト推察ス。將又吳氏ハ事實查明ノ爲メ特ニ朝鮮ニ派出セラレタレバ素ヨリ其顛末ヲ評シ、且ツ總テ證據物等モ蒐集シテ歸國セラレシナラン。望ムラクハ是等ノ證據物ヲ一覽スルヲ許サシコトヲ。

吳大徵 朝鮮國王ヲ日本國ニ避クル事ニ付テハ恐ラク日本政府其事ヲ聞テ喜バレザルヲ信ズ。

大使 足下ハ國王ニ此事ヲ勸メタルハ我竹添公使ノ所爲ナリト云フ意歟。

吳大徵 該國王ハ其日本國ニ遁ル、コトヲ國王親ラ本大臣ニ語ラレタリ。

大使 抑モ國王ニ請フタル者ハ誰ト爲ス歟。

吳大徵 亂黨ナリ。

大使 足下亂黨ト云フ歟、夫レ亂黨ハ朝鮮ノ亂黨ニシテ事朝鮮ノ内事ニ關ス、我政府亂黨ト何等關與スルコトナシ。既ニ足下ハ韓兵日兵ノ指揮ニ依テ清兵ニ發槍シタリト云ヘリ。此事既ニ一タビ足下ノ口角ヨリ出タル以上ハ、我兵韓兵ト相結デ貴國兵ニ先タチ發槍セリト云フ確實ノ證據アルヤ、本大臣ハ是非トモ其證據ノ有無ヲ糺サザルヲ得ザルナリ。

吳大徵 十七日ノ夜郵政局ニ宴アリ、此日貴國ノ兵或ル場所ニ彈藥ヲ運搬セリト聞ク、其夜竹添公使ハ病ト稱シテ宴ニ赴カズ、而テ自ラ兵ヲ率テ王宮ニ入りタル等ヲ以テ見レバ、當日ハ竹添公使ハ全ク虛病タリシハ明ナリ。

大使 本大臣ハ郵政局ノ宴及彈藥運搬ノ事ニ付テ足下ニ聞カン事ヲ求メタルニ非ズ、今ノ足下ノ云フ所、本大臣ノ質問ニ應ズル答ナラズ。尙ホ復ビ足下ニ問フ、我兵ノ韓兵ヲ指揮シテ清兵ニ發槍セシメタリトノ的證アラバ請フ之ヲ本大臣ニ示セ。

吳大徵 韓兵ノ先キニ發槍セルハ果シテ日兵ノ指揮ニ依ラズトセバ、則チ竹添公使ハ必ズ之ヲ制止スルコトヲ得タルナラン。

大使 發槍ハ先ヅ王宮ノ外面ヨリ起リタリト云フコトニ付テハ本大臣屢々之ヲ陳述セリ。若シ果シテ此事ヲシテ誤ナカラシメバ、竹添公使ハ何ニ據テ發槍ヲ止ムルヲ得ンヤ。假ニ貴說ノ如ク韓兵先ヅ槍ヲ發シテ貴兵ヲ撃テタリト思考スルモ、猶ホ韓兵ハ竹添公使ノ命令ノ下ニアル者ニ非ズ。故ニ竹添公使之ヲ制スルノ權ナキヤ論ヲ待タザルナリ。然レドモ眞正ノ事實ハ則チ然ラズ、貴國ノ兵反テ韓兵ト相結デ我公使及其護衛兵ニ不正ノ攻撃ヲ加ヘタルコトニシテ、我ニ確然タル的證ノ存スルアリ。然ルニ足下ハ韓兵ハ我兵ノ指揮ニ依リテ貴國兵ヲ攻撃シタリト云ヒナガラ、未ダ韓兵先ヅ發槍シタルノ證據ヲ舉ゲザルハ何ゾヤ。

吳大徵 本大臣ハ其點ニ涉リ細カニ論ズルヲ欲セズ、蓋シ之ヲ論ズルニ當リテハ罪ヲ竹添公使ニ歸セザルヲ得ザルニ至ルヲ以テナリ。本大臣ハ唯ダ其實況ヲ述ベタルマデナリ。閣下幸ニ末節ニ涉リテ細論スルコト勿レ。

大使 足下既ニ自ラ韓兵ハ日兵ノ指揮ニ依リテ攻撃ヲ我レニ加ヘタリト明言シタル以上ハ、必ズ之ガ證據無ルベカラズ、然ラザレバ足下ノ一言ハ我國ニ對シテ失敬ノ過言ナリ。殊ニ當時朝鮮ニ在リタル我兵ヲ指揮シタル士官ニ對シテ過言ト認メザルヲ得ズ。

吳大徵 韓兵ハ總テ五大隊アリ、其内三大隊ハ清式ノ教練ヲ受ケ、二大隊ハ日式ノ教練ヲ受ケ當時王宮ニ在リタル韓兵ハ即チ日式ノ兵ナリ。故ニ貴我兩兵ノ間ニ鬪争ノ起ル時、現ニ韓兵ノ間ニ派ニ分レテ共ニ相戰フタルコトヲ聞ケリ。

大使 今足下ノ云ハレタル韓兵中二大隊ノ日式兵ハ我士官ノ教練シタルノミニシテ、未ダ曾テ我士官ハ之ヲ指揮シタルコトナシ。若シ果シテ我士官韓兵ヲ指揮シタルコトアリタランニハ足下ノ駁説モ亦其故アリト雖モ、我士官ハ曾テ韓兵ノ指揮ニ關係スルコトナシ。足下ハ教練ト指揮トノ相異ナル所以ヲ辨別セラル、ナラント雖モ、若シ此二者ヲ同一視スルガ如キアラバ謬見ノ甚シキモノト認メザルヲ得ザルナリ。

吳大徵 然ラバ貴國士官ノ教練シタル二大隊ノ韓兵ハ恐クハ當日金玉均等ノ豫メ召喚シタルモノナラン。

大使 其韓兵ハ何人ノ召喚シタル歟ハ本大臣之ヲ答辯スルノ義務アルナシ。畢竟是等ノ事ハ韓廷内部ノコトノミ、本大臣ハ素ヨリ朝鮮國ノ全權大使ニ非ズ、足下ハ已ニ韓兵日兵ノ指揮ニ依リ先ヅ發槍シタリト云フコトヲ以テ、本大臣ハ切ニ望ム、我兵果シテ韓兵ヲ指揮シタリト云フ確證ヲ示サレンコトヲ。

續昌 第一次會議ノ時、閣下ハ貴國ノ我國ニ對シ和好ヲ重ンジ、善後ノ事宜ヲ計畫スルノ意ヲ述ベラレ、閣下深ク將來ヲ慮ラル、ノ一段ニ至リテハ、本大臣席末ニ在テ閣下ノ高論ヲ聽キ景仰ノ念愈々切ナリ。但ダ事ノ苟モ既往ニ屬スルモノニ至テハ、閣下ノ幸ニ末節ニ拘泥スルコトナク専ラ大局ヲ顧念セラレベキハ本大臣等ノ希フ所ナリ。依テ既往ノ事ハ圓滑ニ付シ去リ、層々問難セザルヲ要ス。閣下若シ細微ニ涉リ論議セラル、トキハ、我方ニ於テモ亦末節ニ涉テ論議スルノ已ムヲ得ザルニ至ラン。依テ既往ノ事ヨリモ寧ロ將來ニ關シテ能ク李中堂ト商議セラレンコト、實ニ双方ノ爲ニ肝要トス。何トナレバ既往ノ事ヨリ更ニ將來ノ事ヲ重ンズレバナリ。曩ニ井上伯ノ朝鮮ニ於ケルモ亦將來ノ事ヲ重ンゼラレタレバ、閣下ノ井上伯ノ意見ト符節ヲ合シ同一轍ヲ踐マレンコトヲ信ズ。

大使 請フ説クヲ休メヨ、夫等ノコトハ閣下等ノ容喙スベキニ非ズ。李中堂ニシテ此言アラバ

心ヲ靜ニシテ聽ク可シ。閣下ト其事ヲ談ズベキ要ナシ。本大臣ハ更ニ吳氏ニ向ヒ尙ホ望マン
今論述セラレタル一件ニ付證據アラバ請フ之ヲ示セ。

李 吳、續兩氏ハ畢竟本大臣ニ代テ一言シタルコトナリ。兩氏ハ曩ニ朝鮮ニ派遣セラレ、實地
ニ就テ顛末ヲ查明シタルヲ以テ、事實ノ點ニ付其材料ヲ本大臣ニ與ヘン爲ニ特ニ政府ヨリ列
席ヲ命ゼラレタルナレバ、閣下幸ニ兩氏ノ言行ニ付テハ少シク寛容セラレタシ。過日ハ既ニ
今回ノ件ニ付テ瑣末ニ涉テ論談セラレザルベキヲ閣下ニ詳述シタリ。到底此事ハ既往ニ屬ス
ルヲ以テ、双方ノ爲ニ圖ラズ層々之ヲ問難センヨリハ寧ロ之ヲ棄却スルノ不可ナキニ如カズ
惟フニ閣下ノ權ハ本大臣ノ權ヨリ重シ、假令此問件ヲ棄却セラル、ガ爲ニ何等ノ責アルモ、
閣下ハ自ラ國家ノ重キヲ荷ヒテ廟堂ニ立ツノ人ナレバ容易ニ之ニ堪ヘンコトヲ信ズ。

大使 斯ノ如ク屢々論議ヲ盡シタル後、遂ニ双方満足ニスベキ結局ニ至ラザルハ本大臣ノ殘懷
ニ堪ヘザル所ナリ。然レドモ此案件ハ我國ニ取テハ重大事件ナルヲ以テ、比儘棄却スル事能ハ
ズ。如何ニモ雙方協議ヲ遂ゲカヲ盡シテ兩國ノ間ニ和好ヲ保續スルノ道ヲ講ゼザルベカラズ
貴方ニ於テハ見テ以テ瑣小ノ事件トセラル、モ、我ニ取テハ關要最モ重大ナリトス故ニ閣下
ト此事ヲ議シテ妥協局ヲ結ブ能ハザレバ本大臣已ムヲ得ズ之ヲ他ノ仲裁ニ托シテ双方其裁判
ニ服スベキノ外ナシト信ズ。其何國ヘ依頼スルカハ双方其熟議ヲ經テ後チ之ヲ定メンノミ。

若シ貴國我ニ與フルニ相當ノ満足ヲ以テスルヲ承諾セラレザルニ於テハ、唯ダ此事ヲ以テ仲
裁ニ任ズルノ外決定スルノ道ナシ。本案件ハ貴方ニ於テ輕小ナリト云フモ、我ニ於テハ重大
事件ニシテ決シテ拋擲スル能ハズ、故ニ平和ノ手段ニ依テ孰レニカ結局ノ方便ヲ求メザルベ
カラズ。

李 貴國ニハ貴國ノ公然タル證據アラン。我國ニハ我ノ證據アリテ相互ニ矛盾スルノ甚シキヲ
致ス。今之ヲ仲裁ニ任ズル時ハ其仲裁者再ビ事件ヲ查明シテ双方證據ノ矛盾スル點ニ就テ判
決ヲ下サザルヲ得ズ。本大臣ハ仲裁ハ決シテ満足スベキ方法ニ依テ事實ノ查明ヲ遂グルコト
能ハザルヲ恐ル。過日閣下ノ提出セラレタル遭難口供ノ小冊ヲ細閱スルニ、其ノ所述ハ我官
吏ノ報告トハ甚シキ異同アリ、夫レ斯ノ如ク矛盾ノ甚シキ双方ノ證據ヲ報ジテ事ヲ判決スル
ハ頗ル難事ニ屬スルガ如シ。

大使 仲裁ハ容易ノ業ニ非ズ、然レドモ今日ノ問題ヲ決スルニハ他ニ其道アルコトナシ。閣下
別ニ其道アルヲ知ラバ乞フ教ヲ吝ムコト莫シ。

李 仲裁ハ歐羅巴ノ一國ニ依頼スベキ歟。

大使 本案件ハ貴我兩國間ニ起リタル事ナレバ、其仲裁者モ亦一國ノ首領爲ラザルベカラズ。
而テ不幸ニシテ東洋諸國々君ノ内ニ此事件ヲ托シテ能ク双方ノ體面ヲ傷ケザルモノナシ。朝

鮮國王ノ如キハ素ト此事件ニ關繫スルヲ以テ仲裁ノ位置ニ居ルベカラズ。歐羅巴諸國ハ或ハ東洋ニ對シテ公平ヲ旨トセザルノ患ナキ能ハズ。依テ此事ヲ依頼スベキハ唯ダ北米合衆國ノ大統領其人アルノミ。

李 北米合衆國ノ大統領ハ自ラ朝鮮ニ航シテ事實ヲ查明スルコト能ハザルベシ。

大使 苟モ一國ノ首領ニシ躬ラ外國ニ往キテ事實ヲ查明スル事ヲ得ザルハ論ヲ俟タズ、仲裁人其實地ニ臨マズシテ事件ノ落着シタル例乏シカラズ。凡ソ一國ノ首領タルモノ其仲裁ノコトヲ承諾シタル上ハ、双方ヨリ提出スル證據ニ就テ審理ヲ經裁決ヲ下スベキノミ。

李 歐洲外交上ノ歴史ヲ讀ムニ、仲裁シテ満足ナル判決ヲ下シタル例甚ダ多カラズ、加フルニ此事件ノ如キハ之ヲ歐羅巴諸國又ハ米國ノ仲裁ニ任ズベキノ重要事件ニ非ズ。況ンヤ貴我兩國ハ輔車唇齒ノ關係アル友邦ナレバ、此ノ如キ甚ダ重大ナラザル案件ヲ歐米ニ提出シテ其仲裁ヲ仰グハ共ニ面目ヲ施スノ業ニ非ズ、然レドモ事甚ダ重要ナレバ直ニ貴意ニ同ズシト雖モ事體ノ關スル所ヲ審ニセバ未ダ大事ト云フベカラズ。然ラバ貴說ニ隨ヒ仲裁ヲ仰グハ聊カ自ラ慚愧スル所ナキ能ハザルナリ。畢竟スルニ今回ノ事ハ兩國間一時ノ行違タルニ過ギズ。

大使 閣下若シ此事件ヲ結局スル爲ニ尙ホ他ニ方法アラバ素ヨリ兩國ノ間ニ於テ自ラ安定スルヲ得ンコトハ本大臣ノ切ニ希フ所ナリ。事ノ輕重ハ姑ク論ゼズ、苟モ兩國ノ間件タル以上ハ何レニ歟歸着スル所アラザルヲ得ズ。

李 茲ニ一條ノ意見アリ、第一朝鮮ニ在リテ兩國兵ノ間ニ紛爭ヲ生ジタルハ全ク雙方ノ行違ニ起リタルナレバ、成ヘク其曲折ニ涉ラズシテ事ヲ決スルヲ善トス。第二閣下我兵ニ向テ提出セラレタル兇暴一件ハ、即チ其犯罪ヲ發見シタル上、本大臣之ヲ罰スベシ。此事ニ付テハ約東ヲ設ケ本大臣ノ肯諾スル所トスベシ。今兩國全權大臣ハ既ニ數度ノ會議ヲ開テ互ニ意衷ヲ盡シタレバ、双方意見ノ異ナル點ハ成ルベク縮小ニシテ、妥協ヲ得ルニ力ヲ盡サザルベカラズ。

大使 貴說ハ全ク本大臣ノ同意ヲ表スル所ナリ。第二點ハ貴國兵ノ我臣民ニ加ヘタル兇暴一件ニ付、更ニ事實ヲ查明シ、鞫審ノ上果シテ有罪ト決セラレタル者アレバ、之ヲ罰スト云ヘル閣下ノ説明ハ本大臣ノ既ニ肯諾スル所ナリ。第一ノ點則チ貴將官ヲ罰スルコトニ付テハ、確乎タル返答ヲ望ム。本大臣ハ此點ノ協議スルニ難キヲ察シ、則チ仲裁ヲ企テタル所以ナリ。而テ今閣下兩國ノ事ヲ以テ他國ノ仲裁ヲ乞フヲ屑シトセザルニ於テハ、何レニカ妥協ヲ經ルノ方法ヲ本大臣ニ示サルベキハ蓋シ閣下ノ義務ナリト信ズ。

李 閣下均シク竹添公使ヲ罰スルヲ約セバ、本大臣モ亦我將ヲ罰スルコトヲ約スベシ。何トナレバ獨リ罪ヲ我將官ノミニ歸スベカラザルモノアルヲ以テナリ。

大使 本大臣ハ決シテ嚴刑ヲ將官ニ加フベシト請求スルニ非ズ。則チ貴國ノ法律ニ照シテ相當トスル處罰ヲ行ハ、可ナリ。然ルニ是ヲモ斥ケラル、ニ於テハ、本案件ハ全ク未定スルヲ以テ、何レニ歎處分スル所ナカルベカラズ。

李 然ラバ則チ閣下ハ竹添公使ヲ如何ニ處分スベキ歟、閣下我將官ノ處罰ヲ主張セラル、ナラバ本大臣モ亦均シク竹添公使ノ處罰ヲ要求セザルヲ得ズ。是レ本大臣ハ寧ロ本案ヲ棄却シテ互ニ風波ナキニ如カズト云フ所以ナリ。

大使 閣下此案ヲ棄却スルコトヲ云ハル、モ、我ニ於テハ關要スル所重大ナルガ故ニ棄却スルコトヲ得ズ。是ヲ以テ豫メ協議ノ望ナキヲ察シ、已ムヲ得ズ仲裁ヲ提出セリ。素ヨリ仲裁者ノ決スル所其直タルト曲タルトヲ問ハズ、我ハ其審判スル所ヲ以テ満足スベシ。

李 此般ノ案件ハ我政府我委員及ビ本大臣ハ勿論、朝鮮國人皆我ヲ見テ以テ直者トセリ、故ニ曲直ノ點ニ至テハ敢テ他人ノ仲裁ヲ待タズ。

大使 我方ハ我方ヲ直ト思ヒ、其方ハ貴方ヲ直ト思フ。是レ則チ双方意見ノ相反スル所以ニシテ、互ニ相爭フトキハ竟ニ協議ヲ遂グルノ期ナシ。而シテ仲裁ニ非ザレバ曲直ヲ別ツノ術ナシトス我 皇帝陛下ハ此案件ヲ本大臣ニ托セラレ、本大臣ヲシテ仲裁者ノ坐前ニ進ミ、自ら道理ト認ムル所ヲ供述セシメラル、ニ於テ満足在セラル、ヤ必セリ。

李 本大臣ハ此件ヲ以テ他國ノ仲裁ヲ請フ權ヲ有セザルナリ。

大使 然ラバ閣下ハ如何ニシテ此事件ヲ商定セントスル歟。

李 閣下ハ我證據ヲ以テ悉ク取ルニ足ラズトス、例ハ朝鮮國王ノ親翰ノ如キ、共ニ閣下ハ之ヲ拒否セリ、又何ヲ以テ此件ヲ商定スルコトヲ得ンヤ。

大使 本大臣ハ貴我兩全權大臣ノ間ニ於テ此件ヲ協議スルノ望ナキヲ認ム。但ダ仲裁ノ一途アルノミ。

李 今此件ノ仲裁ヲ請ハントスル他國ノ首領ハ、其身千里ノ外ニ在レバ如何ニシテ其事實ヲ查明シ、之ガ裁斷ヲ下スコトヲ得ンヤ。

大使 本件ヨリ數層ノ錯雜ヲ加ヘタル困難ノ問件ト雖モ容易ニ適當ノ裁判ヲ下シタル例尠シトセズ。

榎本 先年橫濱港ニ於テ秘露國商船一隻來泊シタルニ、船中清國ノ奴隸在リテ、甚シキ虐使ニ逢ヒ狀ヲ我地方官ニ訴ヘテ救助ヲ乞ヒタルヲ以テ、直ニ羈縛ヲ免レタルコトアリ。後此事ニ關シ秘露國ト我國トノ間ニ一場ノ紛爭ヲ起シ、遂ニ歸着スルナキヲ察シ、之ヲ露國皇帝ニ請フテ仲裁ヲ仰ギタルニ、露帝へ双方ノ供述ヲ細ニ查考シテ公平ナル裁判ヲ下サレタルコトアリ。

吳大徵 此事件ヲ決定スルノ良法ハ更ニ此上互ニ議論ヲ盡サバニ如クハナシ。例令他國ノ仲裁ヲ仰グモ雙方ノ満足スルコトナカルベシ。

大使 一旦仲裁ヲ請フニ決シタル以上ハ、假令曲者ト認定セラル、モ我ハ甘受センノミ。普通詞訟ヲ見ルモ豈ニ原被均シク満足ヲ得ルノ道理アラシヤ。

吳大徵 然ルニ雙方トモ自ラ直者ト信ジ、仲裁ノ判決アルモ満足ヲ雙方ニ與ヘザルコトヲ知ラバ、之ガ仲裁ヲ依頼スルヲ要セズ。寧ロ雙方議論ヲ避ケテ止ムノ上策タルニ如カザルナリ。

大使 既ニ安定スルノ望ナケレバ此上議論スルモ亦詮ナシ、否、勢ヒ議論スルコトヲ得ザルナリ。然レドモ唯ダ一言スル所アラン、閣下ハ常ニ一己ノ所見ニ抱泥シテ變通スル所ナシ、希クハ此案件ヲ決定スルコトニ於テ互ニ全力ヲ盡シテ妥協ヲ經ンコトヲ。然ルニ今ヤ雙方其盡スベキヲ盡シタレバ餘蘊アルコトナシ。唯ダ僅ニ仲裁ノ一法アルノミ、凡ソ仲裁ナルモノハ終局ノ裁判ナレバ、雙方必ズ之ニ遵ハザルベカラザルモノナリ。

吳大徵 各國政府ノ日本國ト和好ヲ結ブハ尙ホ清國ト和好アルニ異ナラザレバ、雙方情誼ニ羈絆セラレ自ラ公平ノ裁判ヲ得ザルナラン。

大使 裁判ノ公不公ハ裁判ヲ經タル後ニ非ザレバ論ズルヲ得ズ、若シ雙方直者ト定メラレテ曲者ナクンバ双方ノ至幸ナラズヤ。

李 閣下朝鮮國王ノ親翰ヲ證據ト認メラレザル以上ハ到底結局ノ望ナシ。

大使 故ニ閣下ニモ其親翰ヲ提出シテ仲裁者ノ坐前ニ於テ其効力ノ有無ヲ論ゼンノミ。該親翰ノ如キ果シテ的證ト爲レバ則チ其裁判ニ於テ我ハ曲者タルベシ。若シ反對ニ於テ的證トスルニ足ラズト定メラレタルトキハ、即チ其裁判ニ於テ我レ直者ニ歸スベシ。

李 該親翰ニハ國王ノ玉璽ヲ鈴ス。

大使 今更此ノ如キ細微ノ點ヲ論ズル要セズ、今回ノ案件ニ付テハ我ハ原告ノ地位ヲ占メ、貴方ハ即チ被告ノ地位ニ在リ、故ニ被告原告ノ要求ニ應セザルトキハ原告ハ止ムヲ得ズ進ンデ一層高等ナル法衙ニ訴ヘ以テ終局ノ裁判ヲ請ハンノミ。

李 仲裁ヲ請フノ權ハ本大臣未ダ我皇帝陛下ニ之ヲ受ケズ、故ニ閣下ノ協議ニ應ズル能ハザルナリ。過般此地ニ於テバーテストル氏ト會合シテ佛國ト交渉スル事件ヲ議スルニ當リ、我ヨリ仲裁ヲ發議シタルニ、氏之ニ應ゼザリキ、蓋シ仲裁ノ事ハ必ズ双方ノ承諾ヲ要スレバナナリ。素ヨリ然リ、必ズ双方ノ承諾ヲ經ザルベカラズ、故ニ豫メ閣下ノ承諾ヲ求メタル所以ナリ。

李 本大臣ハ未ダ我皇帝陛下ヨリ仲裁ノ委任ヲ奉ゼズ。

大使 本大臣ハ其要求ノ點ヲ確固ナラシメン爲ニ其證據ヲ貴閣ニ供シタルヲ以テ、今日ニ至テ

ハ閣下ノ擇ブベキ途ニアルノミ、即チ貴方ハ我ノ要求ヲ容ル、歟、或ハ仲裁ヲ請フルニ同意スルカ是レナリ。

李 證據トハ果シテ何ヲ指ス歟。

大使 即チ本大臣ノ貴閣ニ供シタル證據書類並ニ本大臣ノ口述シタル事柄ヲ指スナリ。

李 我兵ノ貴國臣民ニ兇暴ヲ行ヒタル件ニ付テハ即チ口供ヲ證據トシテ其事實ヲ查明シ、果シテ有罪者ヲ發見セバ之ヲ處罰スルヲ約セリ、其他何等ノ證據アルヤ。

大使 朝鮮國王ノ竹添公使ニ送リタル親翰其一ナリ。

李 然ルニ閣下ハ本大臣ノ手裡ニ在ル朝鮮國王ノ親翰ハ證據トシテ取ルニ足ラズトセラル、ハ果シテ何等ノ理由アルカ。

大使 蓋シ双方ノ論點ハ此ニ存スベシ、是レ本大臣ノ仲裁者ノ裁判ニ任センコトヲ欲スル所以ナリ。

李 本大臣ハ仲裁ヲ請フノ權ヲ有セズ、故ニ此事ニ就テハ何等應答スルコトヲ得ズ。

大使 閣下仲裁ニ係ルノ全權ヲ有ゼズンバ宜シク貴國皇帝ノ旨ヲ候ヒ、而シテ本大臣ニ答フルコト可ナリ。刻下互ニ論辯ヲ盡スモ殆ンド底止スル所ナカルベシ。本大臣ハ本月二十日迄此ニ駐マルベシ、願クバ閣下此事ニ關シ貴政府ニ稟請セラレンコトヲ、其事タル閣下ノ自ラ採

擇スベキコトナレドモ茲ニ一言ヲ附ス。

李 我皇帝陛下ハ特ニ本大臣ニ諭ヲ下レ、必ズ罪ヲ我將官ニ歸スルコトナカラシム、是ヲ以テ

本大臣諭旨ニ達フコト能ハズ。

大使 然ラバ閣下ハ本大臣ノ要求スル所ヲ舉ゲテ悉ク承諾セザルノ意歟。

李 實ニ本大臣ノ地位ハ困難ナリ。

大使 地位ノ困難ナルハ本大臣モ異ナルコトナシ。

李 今回ノ事ハ素ヨリ兩國政府ノ意料ノ外ニ出ヅ、實ニ其不幸ヲ惋惜セズンバ非ズ。

大使 本大臣ニ於テモ洵ニ同感ナリ、然レドモ一旦事ノ起リタル以上ハ其局ヲ妥結スルコトニ力ヲ致サルベカラズ。

李 双方堅ク把テ相讓ル所ナクンバ如何ニシテ能ク其局ヲ結ブベキコトヲ得ベキ歟。

大使 仲裁ノ外別ニ考按アラバ直ニ閣下ノ取捨ヲ仰グベシト雖モ、不幸ニシテ僅ニ此一途ヲ遺スノミ。

李 本大臣ハ他國ノ仲裁ヲ願ハズ、何トナレバ我皇帝陛下ハ將官ヲ見テ直者トセラルレバナリ
大使 我 皇帝陛下ハ貴國將官ノ竹添公使ヲ銃撃シタルヲ以テ不正ノ所爲ナリト信ゼラル即チ兩國皇帝陛下ハ各自ラ直トセラル、ナリ。

李 實ニ協議ヲ遂グル難ナリ、而シテ既ニ協議ノ整ヒタル件ハ蓋印セバ可ナラン。

大使 勿論ノ事ナリ。

李 我將官處罰ノ件ノ外他ニ要求ノ點ナキ歟。

大使 他ノ件ハ既ニ妥結ヲ經タリ、刻下未定ノモノハ將官處罰ノ點ノミ。

李 將官ハ皆本大臣ノ隸屬タレバ、我皇帝陛下ノ勅命ヲ以テセズ、本大臣ヨリ其所爲ニ就テ譴責セバ如何。閣下未ダ以テ意ニ適セズトスル歟。

大使 將官ハ皆閣下ノ隸屬ナル故ヲ以テ、閣下ヨリ直ニ譴責スベシト云フ歟。若シ然ラバ閣下公然タル公文ヲ以テ本大臣ニ照會スルコトヲ得ル歟。

李 然リ閣下ニ公然タル照會ヲ送リ、約スルニ我將官譴責ノ事ヲ以テスベシ。抑モ今回ノ事件ヲ閣下ト商定スルガ爲メニ、我政府ハ本大臣ニ訓示スル所アリト雖モ、今本大臣ノ之ヲ肯諾スルモノハ實ハ閣下ニ對シテ友情ヲ盡シ尊敬ヲ表スルニ依ルナリ。

大使 然ラバ公然本大臣ニ照會ノ事ヲ爲ス歟。

李 然リ、貴命ニ應ゼン、抑モ本大臣ノ仲裁ヲ拒ムノ理由ハ決シテ我ノ曲者タランヲ憂慮スル等ノ事ニ非ズ、唯ダ之ヲ拒否スルモノハ貴國ト承力ニ事件ヲ妥結センコトヲ願フニ外ナズ。大使 貴將官ヲ譴責スルハ何等ノ方法ニ依ルカ、乞フ貴意ノ在ル所ヲ垂示セヨ。

李 將官ヲ譴責スルニハ公文ヲ行ヒ、小心事ヲ行ハザルノ故ヲ以テスベシ。

大使 閣下ハ朝鮮駐在兵ヲ悉ク撤回之前ニ於テ其將官ヲ召還スルコトヲ得ル歟。

李 將官ハ現ニ我駐兵ヲ指揮スル者ナルヲ以テ、必ズ兵ト共ニ召還セザルヲ得ズ。頃日歸朝シタル袁世凱モ其將官ノ一人ナリ、而テ本大臣ハ既ニ袁ヲ譴責スルニ革職ヲ以テセリ、閣下應ニ此事ヲ以テ貴政府ニ具申スベシ、惟フニ袁ハ竹添公使ニ政敵ナリシナルベシ、袁平素公使ト相怨ミ互ニ敵視セシモノナラン歟。

大使 本大臣未ダ曾テ竹添公使ヨリ其事ヲ聞キタルコトナシト雖モ恐ラクハ然ラン。

李 袁ノ稟性敏捷ニシテ才幹アリ、故ニ本大臣ハ平生遠ク韓地ニ駐マリテ事ヲ適タンコトヲ顧念シテ頃日召還セリ。

大使 閣下ノ本大臣ニ公然照會スルコトヲ約シタルモノ二件トス。第一公文ヲ以テ貴國將官ヲ譴責スルニ小心事ヲ行ハザルノ故ヲ以テスルコト、第二貴國兵兇暴ノ件ニ付速ニ事實ヲ查明シテ其犯罪者ヲ發見セバ之ヲ處刑スルコト、以上次回ノ會議ニ於テ照會文ノ草案ヲ一覽スルコトヲ得ル歟。

李 來ル十八日ヲ以テ次回ノ會日ト定メ、其會日ノ前ニ於テ本大臣ノ書記官伍芳又ハ羅豐祿ヲ以テ照會文ノ草案ヲ出シ閱ニ供スベシ。而テ次回會日ニ於テ畫押蓋印ヲ了セン、依テ貴方ニ

於テ日本文約書正副二通ヲ調製セラレ依テ貴方ニ於テモ亦漢文約書正副二通ヲ調製スベシ。

大使 他日ノ事端ヲ防ガン爲ニ照會文中過般ノ變亂ハ閣下ノ深ク惋惜スル所ニシテ貴將官小心事ヲ行ハザリシ故ヲ以テ之ヲ譴責スルノ文意ヲ加フベシ。

李 諾了ス、該照會文中過般ノ行違ヒハ全ク我將官ノ小心事ヲ行ハザルニ由ルノ文意ヲ記入スベシ。

大使 該公文中若シ貴國兵ノ内我臣民ニ兇害ヲ加ヘタル犯罪者ヲ發見シタルトキハ陸軍々法ニ從ヒ之ヲ處罰スルコトヲ加フベシ。

李 諾了ス、必ズ軍法ニ從テ處罰スルコトヲ加フベシ。

大使 此二件ノ照會文ハ二通ニスルカ、將々一通ニ併記スル歟。

李 一通ニシテ二件ヲ併記スベシ。何レ草案ヲ起シ閣下ノ貴閣ニ供スベシ。是ニ於テ今次ノ閣下ノ奉ゼラル、所ノ使事悉ク商辦妥定セリ、債ヲ思フニ貴國皇帝使命ヲ閣下ニ下サレズ、我皇帝陛下モ亦本大臣ヲシテ閣下ニ對セシメラル、ニ非ズンバ、今回ノ事件ノ如キハ尋常爲政治家ノ能ク速ニ妥定局ヲ結ブ所ニ非ザルナリ。蓋シ本大臣敢テ諛辭ヲ閣下ニ呈スルニ非ラズ。又自ラ誇言スルニアラズ、唯ダ眞實信ズル所ヲ吐露スルノミ、吳續兩大臣ノ如キ博識多聞多ク得難キノ材ナリト雖モ、其器量ニ至テハ閣下ト本大臣ニ及バザルコト遠シ。

大使 或ハ然ラン、重テ問フ、貴將官處罰ノ事及ビ貴國兵兇暴ノ件ニ關スル事實ノ查明ハ直ニ施行セラル、歟。

李 然リ、公文ハ簡約ニシテ其意ヲ盡サントス。

大使 公文ハ純然タル照會ナラザルベカラズ。

李 素ヨリ然リ、而シテ官印ヲ鈴スベシ。

是ニ於テ今回兩國交渉事件全ク畢ル。

照會文寫

伊藤大人臺啓

逕啓者本日

貴大使同

榎本大臣來署晤談深爲欣慰本爵大臣等

擬於明日三點鐘赴

貴館答拜屆時希

貴大使少候爲荷此佈順頌

時社

慶郡王

閻敬銘

錫珍

福 錕

許庚身

徐用儀

鄧承修

中堂 臺啓
王爺 人

逕復者本大使昨赴

貴署得與

貴王大臣晤叙殊爲欣悅旅接來信以本爵大臣等擬於明日三點鐘赴貴館答拜等因已悉當偕榎本大

臣在署拱候此復 順頌

時社

陽曆三月二十八日

伊藤博文

照會

大清欽命總理各國事務

內閣留士官兼禮部侍郎銜廖
軍機大臣刑部尚書錫
刑部尚書郡王錫
多羅副都統王錫
軍機大臣協辦大學士戶部尚書閣
工部尚書福
工部尚書除
鴻臚寺卿

爲

照會文寫

照會事此次

貴大使以全權大臣前來中國欲在京城商辦事件惟本國先經欽奉

諭旨派李中堂為全權大臣因海防任重不克到京即請

貴大使在天津商辦為便至承詢李中堂所奉全權之椽查李中堂既奉全權之

命實有畫押蓋印之權必能和衷定議相應照會

貴大使查照可也須至照會者

右 照 會

大日本特派全權大使

伯爵 伊

藤

參議兼官內卿勳一等

光緒拾壹年 貳月拾貳日

照 會

大日本特派全權大使參議兼官內卿勳一等伯爵伊藤

為照

覆事明治拾八年三月二十八日准

貴王大臣照會稱此次貴大使以全權前來中國欲在京城商辦事件惟本國先經欽奉

諭旨派李中堂為全權大臣因海防任重不克到京即請貴大使在天津商辦為便至承詢李中堂所奉全

權之據查李中堂既奉全權之

命實有畫押蓋印之權必能和衷定議等因准

此閱悉為此照覆須至照會者

右 照 會

大清欽命總理各國事務王大臣

明治十捌年三月二十捌日

李中堂臺啓

逕啓者本大臣普京之後准

貴政府照會得悉

貴大臣奉全權之

命與本大臣商辦事件等因本大臣以前日出都今晨到津應速與

貴大臣會同議定茲擬於明日一點鐘赴貴署晤叙希即屆時少候可也此佈 順頌

照會文寫

六七五

日社

陽曆 四月二日

名別具

伊藤博文

伊藤夫人臺啓

逕復者頃奉

惠槭敬悉

臺從已於今晨到津擬將商辦事件會同議定即於明日一點鐘

惠顧等因本大臣頃與原敬領事晤商請於明日三點鐘枉過會商即留便酌以便暢談是所切盼此復

順頌

日社

名別具

二月十七日

李鴻章

李中堂臺啓

逕啓者午前遣原領事請以本日叩商公事云云歸言承

貴大臣准於後日三點鐘接談等本大臣擬于是日兩點鐘前往

行轅即希屆時少候可也此佈順頌

日社

名別具

四月十三日

伊藤博文

大清國特派全權大臣

太子太傅文華殿大學士北洋通商大臣
兵部尚書直隸總督一等肅毅伯爵 李

各遵所奉

大日本國特派全權大使參議兼宮內卿

勳一等

伯爵

伊藤

諭旨公同會議訂立專條以敦和誼所有約款臚列於左

一 議定中國撤駐紮朝鮮之兵日本國撤在朝鮮護衛使館之兵辨自畫押蓋印之日起以四箇月

照會文寫

六七七

爲期限内各行盡數撤回以免兩國有滋端之虞中國兵由馬山浦撤去日本國兵由仁川港撤去

一 兩國均允勸朝鮮國王教練兵士足以自護治安又由朝鮮國王選僱他外國武辨一人或數人

委以教演之事嗣後中日兩國均勿派員在朝鮮教練

一 將來朝鮮國若有變亂重大事件中兩國或一國要派兵應先互行文知照及其事定仍即撤回不再留防

大清國光緒十一年 三月 日

特派全權大臣文華殿大學士直隸總督一等肅毅 伯爵 李 鴻 章

大日本國明治十八年 四月 日

特派全權大使參議兼宮内卿勳一等 伯爵 伊 藤 博文

十八年日清條約ニ就テ

(七月二十七日 倫動タイムス新聞抜抄)

客年十二月六日七日ノ兩日朝鮮京城ニ於テ演ジタル殘虐亡狀ノ慘憺タル活劇ハ延テ日清兩國ニ交渉シ、尋テ天津ニ於テ談判ヲ開キ、竟ニ能ク妥協收局スルニ至リタルモノハ、東洋ニ在テ輿論ノ驚歎贊稱シテ止マザル所ナリ。是ヨリ先キ兩國將ニ釁端ヲ啓カントシ、勢既ニ危急ニ迫リタルニ及ンデ、嘗ニ能ク兩國間ノ潰烈ヲ防範シタルノミナラズ、更ニ積年ノ嫌隙ヲ銷遣シ、益々隣誼ヲ敦フシテ以テ兩國間ニ將來ノ長計ヲ籌畫スルノ好果ヲ得タルハ、誰レカ之ヲ視テ其豫望ノ外ニ出ズト云フヲ得ンヤ。抑モ此案件ノ蘊末考究セバ、則チ其事ニ任ジタル兩國大臣ノ賢能ヲ判スルニ足ルベク、此案件ニシテ此結局アリ、大臣ノ務メテ寛容ヲ旨トシ、措辨其宜シキヲ得タルニ職由セズンバアラザルナリ。成跡ニ就テ之ヲ評センニ、兩國大臣相互ノ間ニ施シタル外交上ノ策略ハ至微不至ニシテ殆ド窺知スベカラザルモノアリ。其局ヲ結ブニ及ンデヤ、

日本ハ何等棄捐スルコトナク、全ク要求ノ實ヲ收メテ其素懷ヲ遂ゲタル事ヲ喜ビ、清國モ亦大ニ自國ヲ利スベキ許讓ヲ爲シタリト信ジテ疑フトコロナク、各勝利ヲ占メタルヲ賀シ、相互ニ歡心ヲ傷ハズシテ妥協定議シタルヲ以テ、之ヲ知ルニ足ルベシ。退テ心ヲ潜ニシ、詳ニ其玄妙ノ存スル所ヲ分析スレバ、則チ清國大臣ノ方寸大局ニ關スルノ遠猷ヲ懷キ、冥々ノ間ニ其功ヲ奏セント謀リ、「刻下英國ニ採リテハ大ニ其感慨ヲ醒起セザルヲ得ザルモノアリ」既ニ此案件ノ龔末ニ就テ此ノ如キ成跡ノ存スルアルヲ察シ、大ニ視聽ヲ益シ且ツ快活ナル觀瞻ヲ得ベキヲ以テ茲ニ更ニ詳述スル所アラントス。

曩キニ日本ノ要求ニ關シテハ中外ノ新誌中甲乙傳唱シテ訛說恟々、物議恟々、其要求ヲ以テ頗ル過大ナリト臆測シタルニ拘ハラズ、日本ノ要求ハ其實甚ダ穩當ノ點ニ出デタリキ、之ヲ要スルニ朝鮮ニ駐留スル清兵ノ舉動ハ日本商民三十六名殘殺ヲ蒙リ、其他暴行ヲ加ヘラレタルノ結果ヲ生ジタルガ故ニ、日本ハ之ヲ以テ清國邦交ノ情誼ヲ破リタリト確認シ、斷ジテ其點ヲ主張スルニ在リ「然レドモ此ノ如キ殘虐ノ所爲ニ付テ補伸ヲ求ムルノ一事ノ如キハ、東京外務省ニ於テ當時熱心計畫シタル事項ニ在テ之ヲ認テ案件中ノ瑣末ト爲セリ」京城ノ變報ハ一時日本ノ激憤ヲ來シタリト雖モ、日本素ヨリ和好ヲ重ンジ、隣誼ヲ敦フセント思量シタルヲ以テ、清國ニ對シ謝罪狀ヲ促シ或ハ償金ヲ求メタルニ非ズ。況ヤ亂民ノ爲メニ殺掠ヲ被リタル遭難人民

ハ既ニ朝鮮政府ノ補償ヲ受ケタルニ於テヤ、當時大使ノ親シク說話シタル言語ニ、日本ハ清國ト今回ノ案件ヲ談判セントスルニ當リ、初メヨリ其眼中ニ金錢ノ汚穢ヲ見タルコトナシト云ヒタルヲ以テ亦之ヲ證スルニ足ルベシ。是ニ由テ之ヲ觀レバ、伊藤伯ノ大使ノ印綬ヲ帶ビテ清國ニ渡航セラレタルハ、清國ヲシテ其朝鮮駐兵ノ所爲ヲ詰責シ、過失ヲ犯シタル士官ヲ懲罰シ且日本ノ兵ヲ撤回スルニ於テハ清國ニ於テモ亦必ズ其駐兵撤回スベキノ要求ニ止マリタルコト明ナリ。之ヲ細別スレバ其要求ノ點ハ三條ニ分ル、而シテ撤兵ノ事最モ重大ニシテ、朝鮮善後ノ策ヲ講ズルニ當リテ須要措クベカラザルモノナリ。蓋シ朝鮮ヲ維持シ永ク其地ヲシテ外國ノ爲メニ侵略セシメザランコトヲ謀ルニ至ラバ、日清兩國共ニ唇齒ノ勢アルハ兩國ノ能ク熟知スル所ナリ。況ヤ朝鮮ニ關シテ兩國ノ間ニ紛爭ヲ來スガ如キコトアラバ、却テ外國ヲシテ其機ニ乘ゼシムルノ患ナシトセザルニ於テヤ。夫レ然リ、而シテ既ニ前日ノ事アルモ猶ホ依然トシテ兩國ノ兵ヲ朝鮮ニ駐留セシムルハ、勢ヒ自ラ紛爭ノ端ヲ啓クノ媒タルヲ免レズ。是ヲ以テ兩國各其兵ヲ撤回スルノ議ヲ定ムルハ、獨リ朝鮮ノ一國ニ於ケルニ止マラズ、猶ホ將來日清兩國ノ和好ヲ修補スルニ於テ關要最モ重シトセリ。然レドモ撤兵ノ事タル頗ル錯綜ノ困難タリ、之ヲ議スル最モ細心注意ヲ要ス。素ト清國ノ兵ヲ朝鮮ニ駐ムルハ其屬邦ノ君主ヲ保護スルノ名義ニ出ヅト雖モ、其實清國ハ日本ノ或ハ朝鮮ヲ侵略スルノ異圖ヲ懷クナカランカヲ恐ル、ノ猜疑

ニ出デ、而テ其事素ヨリ一朝夕ノ故ニ非ザルヲ以テ、撤兵ノ議ハ復タ皮相ヲ革ムルニ止マラズ乃チ清國日來ノ疑心ヲ永ク氷釋セシムルニ在リ。是ヲ以テ日本ヨリ撤兵ノ議ヲ提出シ、其事ヲ遂ゲントスルニ當テハ、清國ニ證明シテ其猜疑ヲ解クニ日本曾テ異心ヲ懷カズ、朝鮮ニ駐留セシムルノ兵ハ素ト其臣民財産ヲ保護スルノ意ニ出テ、僅々タル小兵果シテ事ヲ謀ルニ足ラズ、日廷ヨリ此議ヲ提出スル所以ノモノハ、清廷ト和衷妥協シテ將來ノ長計ヲ定メントスル等ノ辨明ヲ要シタリ。是レ其使命ノ綱領ニシテ其危險ト困難トハ實ニ名狀スベカラザルモノアリ。故ニ伊藤伯ノ其使命ニ於ケル毀譽評難並ビ至ルノ役割ヲ擔任シテ舞臺ニ登リ、活劇ヲ演ズルノ困難ナル地步ニ立タルモノト云ハザルヲ得ズ。

斯ノ如ク重大錯綜ナル事件ヲ商議スルノ任ヲ伊藤伯李鴻章ノ二傑ニ委ネタルモノハ、當時窃カニ兩國ノ爲メニ慶賀シテ止マザル所ナリキ。蓋シ伊藤伯ノ人ト爲リ博識強記ニシテ剛毅敬スベク、快豁愛スベシ。凡ソ事ヲ處スル忠實明敏ニシテ外交上ノ才略ニ富ミ、見遠ク慮深ク、日本有名ノ政治家中其第一流ヲ占ムルモノハ獨リ伯ヲ措テ他ニ求ムルナシ。又双方ノ大臣李鴻章ハ官直隸總督タリ、鴻章居常公義公直ヲ旨トシ、且最モ文明ノ思想ニ富ミ、清國政治家中卓識有爲ノ士タルコトハ共ニ天下ノ評スル所ナリ。今伊藤伯ノ對手トシテ清廷論ヲ李鴻章ニ下シ、鴻章ヲシテ平生ノ才識伎倆ヲ施サシムルニ至リタルモノハ、洵ニ日本國ノ爲メニ賀セザル可ラズ。

然レドモ李鴻章ノ威力ヲ以テスルモ猶ホ異日事終リ局結ブニ至テ、北京政府反對黨ヨリ其舉指ヲ非斥セラレ、爲メニ約件ヲ渝フコト莫カラサランヲ慮リ、豫メ之ヲ注意セラル、ヲ免カレザリキ。當時「フルニエー」條約タルヤ、不容易ノ結果ヲ現ハシ、李鴻章ノ意底更ニ一ノ新感覺ヲ生ジタル際ナレバ、談判上多少勝利ノ跡ヲ占ムルコトヲ得バ成ルベク平穩ヲ旨トシ、伊藤大使ノ提案ヲ許諾スルノ計畫タリシハ復タ疑ヲ容レザル所ナリ。而テ李鴻章ノ自ラ好デ談判ノ重任ヲ負フタルカ、又京城前日ノ變ハ日本ノ朝鮮ヲ睥睨スルノ企圖ナリト疑ハザリシカ、未ダ卒カニ斷言スル能ハザルモノアリ。然リ而シテ李鴻章ヲシテ此事件ヲ擔當セシムルニハ、先ヅ大體ノ計畫ヲ定メ、李鴻章能ク困難ヲ排除シテ政府ヲ裨補シ、且伊藤伯ニ向テハ其請求ヲ輕減スル事ヲ得タリトノ信ヲ朝野ノ間ニ博セシメザルベカラズ。果シテ斯ノ如クナレバ幸ニ妥協ヲ得、和結ヲ全フスルニ於テ便宜ヲ増ス決シテ小少ニ非ザルベシト思惟セラレタリキ。本件開談ノ場所ハ既ニ天津ニ定メラレ、伊藤伯大使トシテ到着セラルニ當テハ李鴻章豫メ設ケテ爲シテ之ヲ迎ヘタリ。伊藤伯天津ニ着スルヤ、直ニ北進京ニ入り、先ヅ國書ヲ捧呈スルノ決意ヲ告ゲ毫モ退讓スルノ色ナシ。李鴻章モ此決意ニ對シテ強辯スルヲ得ザリシモノハ、其形勢ヨリ推スモ怪ムベキノ事相ニ非ザルナリ。伊藤伯北京ニ入りタル後ハ、其儀式ノ爲メニ殆ンド十日ヲ費ヤシ、復ヒ天津ニ還リ、將ニ李鴻章ト兩國交渉ノ事件ノ談判ヲ開カントセラル、ニ至テハ、

中外構説ヲ逞フシテ底止スル所ヲ知ラズ。或ハ談判成ラズシテ北京政府ハ復ビ援ヲ李鴻章ニ請ヘリト云ヒ、又日本要求ノ性質ヲ換ヘ、或ハ其區域ヲ擴メ、訛聞喧傳朝野ノ間ニ囂々タリシト雖モ其唱道スルニ委シ敢テ是非當否ヲ説明スルノ要ナカリシト云フ。惟フニ斯ノ如ク李鴻章ノ地位ヲ安全ナラシムルノ策ヲ講ズルヲ努メタルモノハ、又日本請求ノ實行セラル、ノ道ヲ計畫シタル深慮ニ出ヅルノミ。

折撃場ヲ開クニ當リ、伊藤伯ハ先ヅ其訓條ノ要點ヲ提出セラレタルハ頗ル機敏ヲ見ルニ足ルベシ。對手タル李鴻章モ亦誠意ヲ示シテ之ヲ聽了セリ。而テ世人ノ最モ矚目セル朝鮮駐兵ヲ撤回スル事ハ、大序ニ於テ清國ノ許諾ヲ得タルガ如シ。其他ノ問題ニ關シテハ清國ハ確證ヲ示サズト雖モ、終始京城ニ起リタル慘害暴狀ハ其罪日本人ニ在リトシテ責ヲ清國ノ將兵ニ歸スルノ理ナキヲ抗論シテ談判稍々稽滯シ、紛亂漸ク加フルニ至レリ。先是北京政府ハ二名ノ大臣ヲ選テ李鴻章ヲ補佐タラシム。此大臣ハ直接ニ伊藤伯ノ問件ニ容喙スルモノニ非ズト雖モ、然カモ其一人ハ罪ヲ清將兵ニ歸スルヲ拒否スベキノ命ヲ帶ビタルモノナルコト、其前日自ラ廟堂ニ上稟セル報告書ヲ以テ之ヲ知ルニ足ルベシ。此時ニ當テ佛清ノ葛藤モ一朝清國ノ爲メニ利益トナル約款ヲ以テ全ク媾和ノ豫約ヲ結ビタリトノ報ヲ得ルヤ、傲然日本ノ請求ヲ藐視シ、因循日ヲ遷シテ容易ニ讓歩セザルモノニ似タリ。此ノ如ク清國ハ強佛ト和睦シテ自己ノ利益ヲ失ハザ

ルニ於テ、其日本ニ對シテ托ゲテ之ニ屈從セザルヤ明ケシ。是ニ於テ伊藤伯ハ愈々智力才幹ヲ彈シテ李鴻章ノ心情ヲ衝キ、以テ平和ニ其請求ノ容ラレンコトヲ努ムルノ外ナカリキ。此等ノ困難ニ遭遇シタル後、李鴻章モ竟ニ誠ヲ開テ之ヲ許諾シ、他ヲシテ其終局ノ期亦甚ダ遠遠ナラザルヲ想察セシメタリキ。然ルニ僅ニ十一時間ヲ經タル後、清國ハ一旦駐兵ヲ撤回スベシト雖モ、其必要アリト思認スルトキハ何時ヲ問ハズ復ビ兵ヲ朝鮮ニ派遣スルノ權アリト云フノ明條ヲ掲ゲント主張シ、兩大臣ノ間爲メニ再ビ風起リ波颺ルニ至レリ。蓋シ清國ヲシテ此ノ如キ特殊ノ權利ヲ有セシムルモノハ、一方ニ偏シ中正ヲ失スルモノニシテ、當ニ世人ヲシテ日本ノ地位ヲ誤認セシムルニ止マルノミナラズ、實ニ此等ノ條約權ニ依テ清國ハ朝鮮ニ於ケル日本ヨリモ一層重大ノ權力ヲ獨占スルヲ公認セシムルモノト云フベシ。故ニ伊藤伯ハ反覆論辯シテ若シ急變ノ時ニ於テハ、此等ノ權ハ兩國均シク有スルノ明條ヲ設ケテ此困難ヲ排キ、却テ朝鮮ニ關シテ日本ヲシテ清國ト均等ノ地位ヲ占有セシムベキ證據ヲ茲ニ始メテ確立シタルモノハ、日本ノ爲メニ清國ノ著大ナル讓與ナリト云フベシ。蓋シ伊藤伯ヨリ提出セラレタル請求ハ獨リ此一點ニ於ケルノミナラズ、他ノ要點ニ於テモ亦容易ニ妥結シタリト臆測スベカラズ。要求ノ點ハ咸ナ日時辯論ヲ費ヤシ、非常ノ困難ヲ經テ始メテ定議スルコトヲ得タルモノニシテ、此活劇中俄然變相ヲ顯ハシタルハ第七回目ノ談判即チ最終ノ會日ニシテ、一月一日日本大使モ平和ノ望ヲ

斷念シタル時トス。此時ニ當テヤ伊藤伯ハ終始誠ヲ開キ和好ヲ重ジ、勉メテ溫客ヲ失ハザランコトヲ期スルモ、今其請求スル所ヲ容レラレザルニ於テハ寧ロ玉帛ニ代フルニ劍戟ヲ以テスルモ爲ゾ扞屈シテ止マンヤトノ決意ヲ示スニ因リ、遂ニ其請求ヲ擧ゲテ悉ク許諾セシムルニ至レリ。夫ノ撤兵ノ事ハ既ニ前ニ叙述シタル伊藤伯ノ意見ニ從ヒ、締約以往四箇月内ニ撤回スルニ決シ、又京城事變ニ關係セル清國ノ將兵ニ加罰スルヲ約セリ。其他日清兩國ヨリ朝鮮國王ニ勸告シテ同國ノ安寧ノ秩序ヲ保護スルニ充分ナル武備ヲ設ケ、他國士官ヲシテ之ヲ訓練セシムルコトヲ約セリ。日本ニ於テハ特ニ此事ヲ約スル最モ剴切ナル理由アリ、指ヲ俣フレバ三年ニ二タビ使館ヲ焚カレ、公使ハ纒ニ其身ヲ遁レテ京城ニ退キ、居留人民ハ慘殺ニ逢ヒ、其財産ハ奪掠セラレタルコト實ニ一回ニシテ止マザレバナリ。

夫レ此ノ如キ情實ヲ思考シテ遂ニ好結果ヲ得タルモノハ、主トシテ李鴻章ノ卓見深識、日清兩國間ニ存スル交誼親睦ノ重キヲ悉知シ、誠心實意能ク讓歩シタルト、伊藤伯ノ智辯ヲ罄シテ日本要求ノ已ムヲ得ザルニ出ヅルヲ説キ、懇到周密遺ス所ナカリシトニ因ル「且伊藤伯ノ人トナリ天資才貌能ク人ニ敬愛セラル、ノ風アリ、李鴻章一タビ伊藤伯ニ接シテ既ニ伯ヲ外ニスル事ヲ得ザルモノ」亦此案件ノ妥協ヲ促シ、兩國間ノ和好ヲ重ニスルノ精神ヲ鞏固ニシタルモノト評セザルベカラズ。而テ清國ニ於テハ李鴻章能ク其任ヲ盡シテ日本ノ要求ヲ減殺セリトシ、

朝野ノ間満足ヲ表セザルモノナシ。又日本ニ於テモ苟モ事理ヲ辨ズルノ人ハ最モ妥局ヲ贊稱セリ、日本ニ於テ此ノ如ク大ニ満足ヲ表スルモノハ蓋シ故ナキニ非ラズ、抑モ日本ハ伊藤伯ノ如キ廟堂ノ柱石ヲ使節トシ、加フルニ内閣大臣ノ一ル西郷伯ヲ副ヘ、一タビ談判破裂スルニ至ラバ何等事情ノ存スルモ正確ニ宣戰ノ理由トスルニ足ラザル問難ヲ提出セシムルガ如キ最モ危険ヲ冒サシメタル後、妖雲掃排シテ瀝々皞々ノ天ニ復シタルモノハ日本人ニ於テ殊更ニ満足ニ堪ヘザルモノ、勢ノ自ラ然ラシムル所ナリ。畢竟スルニ京城ノ變報一タビ日本ニ到達スルヤ、國中上下咸ナ憤懣激動シテ其勢益々事體ノ重キヲ加ヘタルヲ以テ、日廷ハ遂ニ大使ヲ特派シテ其事局ヲ談判スルノ已ムヲ得ザルニ至レリ。當時ヲ回顧スレバ其談判ノ功ヲ奏スルト否トハ實ニ兩國和戰ノ分カル、所トス。況ヤ其事實ヲ遡考スルモ奏功ノ望頗ル危弱ナリシニ於テヤ。故ニ談判不幸ナル結局ヲ告グルカ、李鴻章ノ如キ平穩ヲ旨トスル達見ノ士ヲシテ全權ノ委任ヲ受ケザラシムルトキハ、日本政府ヲシテ困難云フベカラザルノ地位ニ立タシムカ、其甚シキニ至テハ兩國兵馬ノ間ニ相見ルノ不幸ニ陥キリシヤ必セリ。要スルニ伊藤伯使命ノ性質ハ危險ト投機ヲ以テ組成セラレタリト云フモ敢テ誣言ニ非ザルベシ。凡ソ斯ノ如キ微妙ノ働ヲ要スル使事ニ於テハ、苟モ全ク失敗セザル限りハ是ヲ以テ完全ナル奏功ト認ムルモ亦不可ナルナシ。然ルニ伊藤伯ハ充分ニモ過去ニ於ケル隣誼ノ在ル所ニ隨テ前日ノ罅隙ヲ銷遣シ、將來ニ於テハ永

ク軋轢ノ趾ヲ防ギ、日本有識者ノ曾テ屬シタル望ヲ全ク成就セシメタルヲ以テ、歡呼シテ此好結局ヲ稱賛シタルモノハ洵ニ其所ニシテ、更ニ驚訝スルニ足ラザルベシ。

然リト雖モ本案件中殊ニ注目ヲ懈ルベカラザル要事ハ李鴻章ノ日本ニ對シテ此ノ如キ讓歩ヲ爲シタルモノハ、抑モ何等深遠ノ理由ノ存スルニ由ルカヲ推究スルニ在リトス。蓋シ李鴻章ノ識高ク見遠ク、其量ノ宏ナルハ中外ノ共ニ許ス所ナルヲ以テ、李鴻章ノ意底ヲ解スルニ難カラザルベシ。今日將ニ日英清ノ三國ノ間ニ攻守連衡ノ策ヲ立テントスルハ李鴻章畢世ノ大望中ノ一ニ居ルハ掩フベカラザルナリ。若シ此大計ニシテ一朝成ルヲ得バ、李鴻章一身ノ顯榮ハ言ヲ待タズ、北京ニ於テ至大ノ權勢ヲ占ムベキハ數ノ觀易キモノニシテ、清國八百餘州ノ黎民ヲ牧スルモノハ夫レ李鴻章其人ナランノミ。而テ猶ホ更ニ偉功ノ相伴フモノアリ、何ゾヤ清國自然ノ讎敵タル露國ニ對シテ強大ノ連衡ヲ組成スルコトヲ得即チ是ナリ。今日ノ如ク英露ノ間ニ事アルノ時ニ於テ、清國其機ニ投ジテ連衡ヲ企圖スルコトナキヤト云フニ至テハ、實ニ俄カニ測定スベカラザルモノアリ。試ニ連衡ヲ成就スルモノトセバ、李鴻章ハ今其手ニ隸屬スル八萬ノ精兵ヲ解役スルノ困難ヲ排除スルコトヲ得ン。況ヤ清帝ノ夢想セル帝ノ故山ナル黑龍江回復ノ如キモ、亦將ニ前途ノ計畫中ニ加算セラルベシ。想フニ現時清廷有力ナル政治家ノ思想ハ概ネ此ノ如キナランノミ。而テ是等ノ遠謀ニ因リ日本トハ滋々隣誼ヲ敦フセンコトヲ望ミ、此ニ和

局ヲ結ンデ交誼ヲ傷ケザリシナラン。故ニ天津ノ條約ハ寧ロ李鴻章將來ノ大計ノ第一着手トシテ觀ルベキモノナリ。又朝鮮一國ヲ維持スル爲メニ日清兩國ノ平和ヲ重ンジタルモ亦太ダ其理ナキニアラズ。然リト雖モ日本ハ苟モ泰西各國ト共同シテ清國ト連衡スルニ非ザルヨリハ、決シテ密カニ獨リ清國トノミ連衡スル如キ策ヲ取ラザルハ炳爲タルベシ。試ニ看ヨ、日清兩國ノ針路ハ全ク其方位ヲ異ニシ、清國ハ頑然舊套ヲ株守シ、日本ハ日進開明ノ域ニ入レリ。若シ此ノ如ク情勢ヲ異ニセル兩國ヲシテ合同一致ヲ企ツルトキハ、徒ラニ其志望ヲ果サザルノミナラズ、却テ双方軋轢ノ種子ヲ播キ、過般僅ニ免レタル紛擾ヲニタビ東洋ニ演出スルヤ疑ヲ容ルベカザルナリ。故ニ曰ク、清國ハ其襲用スル頑陋ノ舊套ヲ脱スルニ非レバ、日本トノ合同一致ハ言フベク行ハルベカラザルモノナリト。

天津條約論

フオン、スタイン

(千八百八十五年六月三十一日七月二日七月十日
九日獨逸アルゲマイネ・ツァイツング紙掲載)

清佛間將ニ和揖ノ約ヲ結び、俱ニ劍戟ヲ收メントスルニ當リテ更ニ一事實ヲ生起セリ。蓋其事實トハ太平洋將來ノ關係ニ於テ重大ナル影響ヲ有ス。而シテ佛國前キニ于戈ヲ後印度ニ動カシ爲メニ大ニ國民ノ負擔ヲシテ重カラシメタルト稍其形勢ヲ同クシ、竟ニ東洋兩大國ノ間ニ條約ヲ締結スルニ至レリ。今其文ヲ翻譯シテ讀者ニ報スルハ全ク獨逸國ニ取リテ關要ナキニ非ザルヲ信ズルヲ以テナリ。

前キニ本年四月是西班牙ノ所誌「エルインバルシヤル」ニ報導スル所ニ依レバ、是國ハ竊ニ「コシゴウ」ニ關シテ和蘭、葡萄牙、英吉利、佛蘭西、獨逸、合衆國ト會議ヲ開キ、以テ太平洋諸島ニ關スル各國ノ權利ヲ定メ、同時ニ大洋中ノ孤立セル無主ノ諸島ヲ占領スルノ主義ヲ定メンコトヲ謀レリ。而シテ露西亞ハ「亞羅斯加」浦鹽斯德ノ關係アルニ拘ハラズ、露國ノ名ハ列國ノ内ニ掲ゲザリキ。而シテ此新誌ノ云フ所ニ依レバ、是國ハ「ラドロレン島アルヒベルヒルバインカロリネンパラヲ」及其他ノ諸島ヲ以テ自國ノ所屬ナリト認メ、且是國ノ感慨ヲ提起シテ曰ク、抑モフキリツプ二世以來占有ニ係ルモノト信ズル所ノ版圖ニ付テハ、力ヲ極メテ其權ヲ主持スベキヲ以テセリ。抑モ彼新誌ニ於テ此ノ如キ言ヲ爲シタルモノ蓋其理ナキニシモアラズ、如何トナレバ近來獨國ニ於テ開版シタル世界新地圖ニ依レバ「カロリネンアルヒベル」及「マリネンアルヒベル」島ハ嘗ニ是西班牙ニ屬セザルコトヲ明ニスルノミナラズ、之ヲ事實ニ徵スルモ亦一千八百七十四年以還獨國旗章ノ「マリーネンアルヒベル」諸島ニ翻々タルヲ見ルヲ以テナリ。而シテ是西班牙諸新聞紙ニ於テモ亦之ヲ噴々スルニ至レリ。然ルニ予ハ彼ノ「アルヒベル」島ナルモノハ果シテ萬國公法上一定ノ疆界ヲ有スルモノナルヤ、又此諸島中ノ一島嶼ニ殖民地ヲ置クトキハ之ヲ全諸島ニ對シテ攻撃ヲ加ヘタルモノト認ムベキヤ、未ダ遽ニ之ヲ判定スルコト能ハザルナリ。夫レ此諸島ヲ「アルヒベル」島ト總稱シタルハ是西班牙地理學協會ノ議定ニ係ルニ過ギズシテ、然カモ是西班牙政府ハ未ダ嘗テ一事ヲ此諸島ニ實施セザルヲ以テ、倨然萬國ニ對シテ其所有版圖タルコトヲ證明スルヲ得ザルヤ灼焉タリ。故ニ姑ク議論ヲ他日ニ措キ、専ラ實際ニ就テ之ヲ觀レバ、獨國ノ政略ハ直ニ赤道直下ヲ飛廻シテ北部ニ侵入シ、以テ

「ウイルヘルム」島及「ビスマルク」ヲ占領シタルコト確實ナリトス。是ヲ以テ北部太平洋ニ關スル一大問題ノ獨國ノ利害得喪ニ關繫ヲ致スヤ惟フニ必ズ十年ヲ出ザルナラン乎。若シ此事ニ關シテ歐洲諸國ヨリ何等提起スル無クシバ、必ズ卓越ナル東亞細亞ノ經世家ハ今日既ニ前途百年ヲ籌畫スルモノアラン。是ニ由テ之ヲ觀レバ今日獨國ノ商業及殖民上ノ關係ハ遠ク日清兩國ニ屬スル大洋中邊ニ及ブト謂フモ亦不可ナキニ似タリ。苟モ此ノ如キ重要ノ關係ヲ有スルノ日ニ於テ、予ノ日清兩國ノ關係ヲ說ク亦敢テ徒勞贅辭ニアラザルベシ。

往古ニ遡テ日清兩國ノ關係如何ヲ究察スルニ、昔時ヨリ兩國互ニ政治上ノ關係ニ於テ氣脈ヲ通ジタルコトナキガ如シ。唯其佛教、文學及文字上ニ於テノミ清國ハ日本ニ對シテ先覺ノ地歩ヲ占タリト云フノ外ナカリキ。然リ而シテ兩國共ニ航海ノ業ニ長ゼズ是ヲ以テ千里異域ノ看ヲ爲シタルノミナラズ、兩國絶テ交戦シタルコトナシ。故ニ日本ハ文化ヲ清國ニ享受シタルニモ拘ハラズ、自ラ一種ノ國風ヲ存スルモノト謂フベシ。宜ナリ歐洲人ノ東亞細亞ニ峙立セル此二大國及其人民ト交際スルニ當リ、全ク殊別ナル方針ヲ取りタルヲ、今矣ニ歐洲ヨリ輸入シタル原素ハ此兩國ニ於テ何等發達ヲ視ルニ至リシヤ、其詳細ヲ論ズルニ違アラズト雖モ、之ヲ概言セバ歐洲諸國ノ此兩國ノ關係ハ稍相似タルモノアリト云フベシ。是レ蓋兩國ニ著大ナル變動ヲ生ゼシ所以ナリトス。

夫レ歐洲諸國ト日清兩國トノ關係ヲ論ズルニ當テハ宜シク之ヲ二大時期ニ區別セザルベカラズ。第一期ハ即チ歐洲人ノ兩國ト交通ヲ開キシヨリ第十九世紀ノ中世ニ至ルマデトス。第二期ハ即チ一千八百五十年ノ交ヨリ現時マデヲ指スモノトス。第一期ニ於テハ歐洲諸國中航海通商ニ名アル某國ノ商會在リテ他ノ兩國ト貿易ヲ開キタルニ過ギザリキ。蓋シ此兩國ハ百有餘年間歐洲人ヲ視テ蠻夷ト爲シタルモノナレバ、其通商貿易ニ踵テ國際條約ノ生ズルヲ豫想セザリシナラン。然ルニ第十九世紀ノ中世以降、佛人ハ清國北京ヲ侵撃シ、英、佛、蘭及合衆國ノ艦隊ハ日本ニ迫テ補仲ヲ要ムルニ至リ、忽焉歐洲諸國ト東洋諸國トノ間ニ政治上ノ關係ヲ開キ、漸ク萬國公法及國際交通上ノ慣例ヲ行フニ至リタリト雖モ、今之ヲ詳述スルノ要莫ルベシ。夫レ此ノ如ク歐洲諸國ト東洋諸國トノ交際日ニ頻繁ヲ致シタルニモ拘ハラズ、日清兩國間ノ關係ハ依然トシテ昔日ニ異ナルナク、其一國ト歐洲各國トノ間ニ事アルモ更ニ之ヲ意ニ介スルナク、又其安危痛痒ヲ顧念セザルガ如シ。故ヲ以テ歐洲人ノ東亞細亞ニ於テ兵事上ニ商業上ニ學問上ニ益勢力ヲ得ルニ至ルモ、恬然トシテ之ヲ顧ミザル恰モ秦人ノ越人ニ於ケルノ狀アリ、夫ノ歐洲人貿易ヲ廣東、東京ニ開キ居留地ヲ橫濱ニ劃定シ、又上海ヲ占領シテ太平洋ニ閃々タル旗章ヲ翻スモ、東亞細亞ニ於テハ唯二大國巍然獨立スルアルノミニシテ、歐洲ニ對スル東亞細亞全體ニ存立アルヲ見ザルナリ。今其由來スル所ヲ釋スルニ、蓋二個ノ原因

存スルモノアリ、就中第一ノ原因ハ歐洲ニ在リテ、第二ノ原因ハ東洋ニ在リトス。夫レ第一ノ原因トハ歐東洋洲ヲ距ルコト數萬里、容易ニ事ノ成遂ヲ望ムベカラザルモノアルト、一千八百三十年ニ至ル間歐洲ノ内事多端ニシテ深ク意ヲ東洋ニ注グ能ハザルトノ事實ニ依テ、政策ヲ東洋ニ施サザリシヲ以テ、日清ノ兩國モ亦之ニ對シテ聯合スルノ必要ヲ見ザリシナラン。第二ノ原因トハ日清兩國人民ノ間大ニ精神上ノ發達ヲ異ニシ、實ニ互ニ相聯合セザルノミナラズ、却テ相隔絶セントスルノ狀アル是ナリ。予今日清兩國人ノ情性ヲ論ズルニ違アラズト雖モ、其大體ヲ摘擧スレバ、清國ハ精神ノ發達ヲ嫌忌シ、日本ハ之ニ反シテ不屈不撓世界ノ開明ヲ容ル、ニ汲々タリ。之ニ加フルニ清國ハ傲然トシテ外國ヲ蔑如シ、殊ニ日本ヲ附屬視スルガ如シト雖モ、日本ハ銳意泰西ノ開明主義ヲ採リシヨリ以來、駸々乎トシテ進歩シ日ハ一日ヨリ長足スルニ似タリ。此故ニ兩國均シク歐州諸國ト交通ヲ開クモノナリト雖モ、共同一致シテ東洋ノ政略ヲ主張セザルノミナラズ、將來何ノ時ヲ待テ其機ニ至ルヤヲ測知スル能ハザリキ。畢竟兩國ハ陰ニ軋轢シテ相仇敵視スルノ狀ナキニアラズト雖モ、歐洲諸國ノ益東洋ニ勢力ヲ擅ニスルニ及ビ、遂ニ合同シテ之ニ對峙スルノ重要ヲ感ズルニ至レリ。

此時ニ際シテ一ノ新事相ヲ呈露スルニ會シ、兩國ノ軋轢仇怨ノ跡ヲシテ一時ニ止マシムベキカ、將タ永遠融解スベカラザルニ至ルカヲ判斷スルノ機會ヲ與ヘタルモノハ之ヲ朝鮮ノ事ナリトス。

夫レ日清兩國間ニ屹立スル半島國ヲ朝鮮ト稱ス、此國ハ貧弱ニシテ軍事、商事及開明ノ三者ヲ缺キ、殆ント歐洲人ノ度外視スル所タリシト雖モ、清國ハ朝鮮ヲ以テ中國ノ屬邦ナリト唱導シ、日本ハ近時之ヲ認メテ獨立國タルコトヲ主張セリ。抑モ朝鮮ハ貧弱ナル小國タルヲ以テ、固ヨリ歐洲ノ學術ニ通ゼズ、唯支那主義ト日本主義トヲ取用スルノ二方向ニ分レ、遂ニ日本黨ト支黨トノ二黨派ヲ生ズルニ至レリ。其後歐洲各國ノ使節朝鮮ニ到リ、之ト國際條約ヲ締結シ、自ラ其獨立國ナルコトヲ認メタルモ、一朝朝鮮ニ事アリテヨリ日清兩國各其兵ヲ京城ニ駐ムル事トナリ、彼ノ兩黨派ハ益軋轢ヲ生ジ、一ハ支那ノ風土ヲ慕ヒ、一ハ日本ノ開明ヲ羨ミ、各其主義ヲ主張シテ氷炭相容レザルノ勢ヲ成セリ。凡ソ有識ノ士ハ皆朝鮮ニ於テ早晚日清兩國間ニ葛藤ヲ生ズルハ數ノ免レザル所ナルヲ豫想スルニ至レリ。

幾許モナク朝鮮郵政局ノ開業式アリ、各國公使領事其他朝鮮ノ貴顯等會宴スルノ際、突然暴徒襲來シテ朝鮮ノ貴顯ヲ殺害シ、頗ル不穩ノ狀アリ。故ニ朝鮮國王ハ救援ヲ日本公使ニ請ヒ、日本公使ハ其依頼ニ應ジ直ニ兵ヲ率キテ城中ニ入り、國王ヲ護衛セリ。然ルニ亂民蜂起清兵ト相投合シテ日本兵ヲ襲撃シ、日本士民ヲ殺傷シ、又之ヲ凌辱シ、亂暴至ラザル所ナカリキ。事

爰ニ至リタルヲ以テ日本公使ハ斷然自國ノ公使館ヲ警衛スルノ必要ナルヲ主張シ、王城ヲ出テ公使館ニ歸リ、務メテ防禦ニ盡力セリ。然レドモ亂民ノ勢益猖獗ニシテ當ルベカラザルヲ察シ遂ニ火ヲ公使館ニ縱チ、兵ヲ整ヘ避ケテ仁川港ニ至レリ。是レ實ニ一千八百八十四年十二月ノ事變ナリトス。是レ豈萬國公法ヲ破リタル野蠻ノ所爲ト謂ハザルベケンヤ。此變報ノ一タビ日本ニ達スルヤ、日本人民ハ憤懣激動シ、切齒扼腕罪ヲ朝鮮ニ問ヒ、又師ヲ清國ニ出スベシト主戰論旺盛ニシテ、或ハ軍資ヲ獻ジ或ハ先鋒タランコトヲ願ヒ士氣大ニ振ヘリ。當時日本政府ニシテ若シ戰ニ意アラバ日清兩國ノ開戰ハ到底免ルベカラザルニ至リシナラン。而シテ不幸兵馬ノ間ニ相見ルニ至ラバ、恰モ佛國ハ臺灣ヲ占領シテ將ニ北上セントスルノ時ナレバ、清國ノ興廢モ亦逆メ知ルベカラザルナリ。

然リト雖モ日本政府ノ敢テ之ヲ好機會トシテ輕舉兵ヲ動かサザル所以ノモノハ他ナシ、英露兩國此讐ニ乗ジテ清國ニ與ミシ、以テ朝鮮ヲ奪フアランヲ顧慮スレバナリ。蓋露國ハ浦潮斯德港ヲ有スルト雖モ、氣候寒冽ニシテ毎年四ヶ月間堅氷凍結ノ憂アリ、是ヲ以テ常ニ朝鮮國ニ一良港ヲ占得センコトヲ望メリ。又英國ハ日本ノ全ク佛國ノ手ニ歸センコトヲ恐レテ、日本海ノ關門タル巨文島ヲ占領シ、以テ威ヲ東洋ニ振ハンコトヲ企圖セリ。故ニ一旦日清兵ヲ交フルコトアランニハ、獨リ東洋ノ大事タルノミナラズ、歐洲諸國ノ爭亂ヲ太平洋中ニ畫出シ、更ニ火

雨血浪ノ一大活劇ヲ演ズルニ至ルモ亦未ダ測ルベカラズ。惟フニ日本政府ハ夙ニ茲ニ見ルアリテ日清兩國ノ常ニ隣誼ヲ敦フシテ以テ東洋ノ安寧ヲ維持スルノ得策ナルヲ認メ、其國民ノ時論如何ヲ問ハズ、斷然和局ヲ結ブニ決心セリ。是レ一ニ日本經世家其人アリテ敢テ時論ノ銳鋒ヲ折ケズ、又目下ノ小利ニ迷ハズ、深謀遠慮能ク將來ノ利害ヲ洞察スルノ明アルニ由ラズンバアラザルナリ。而テ又衆口燦金ノ重キヲ察シ、遂ニ清國ニ向テ京城ニ駐在スル兵士ノ暴舉ヲ問難シ又朝鮮ニ對シテ清國ト同一ノ權利アル所以ヲ認メシメ、且ツ將來日清兩國ノ好誼ヲシテ益鞏固ナラシメンコトヲ計畫セリ。

凡ソ此ノ如キ計畫ハ必ズ高識大度アリテ政務ニ練磨シ、外ハ國際ニ熟達シ、内ハ民情ヲ體察シ、深ク慮リ遠ク圖リ、能ク大事ニ任ジ容易ニ盤根錯節ヲ剖析シ得ルノ人ニ非レバ決シテ爲シ能ハザル所ナリトス。今日日本ニ於テハ其人ヲ得、能ク此ノ如キ大事ノ成功ヲ看ルニ至リタルモノハ實ニ日本國ノ至幸ト謂フベシ。而シテ其事實タル、永ク東洋ノ竹帛ニ垂レテ美名ヲ千萬歳ニ傳ヘ以テ天壤ト與ニ窮リナカルベシ。

今朝鮮及清國ノ事件ニ關シ新聞紙ニ記載シタルモノヲ摘舉スレバ左ノ如シ。
夫レ朝鮮事變ニ關シテハ先ヅ朝鮮ニ向テ相當ノ要求ヲ爲サザルベカラズ。故ニ日本政府ハ著名ナル井上伯ヲ以テ大使ト爲シ、京城ニ派遣シテ能ク其目的ヲ達セリ。即チ朝鮮國王ハ直ニ日

本政府ノ要求ニ應ジ、罪人ノ搜索其處罰償金及日本兵ノ駐割ヲ肯諾シタリ。蓋此事件ハ當時日本新聞紙上ニ論載スルガ如ク甚ダ速ニ完結セリト雖モ、固ヨリ困難ナル問件ニハアラザリキ。

然ルニ日本政府ハ尙進ンデ清國ニ對シ談判ヲ爲サルベカラザルニ際會シテ其間大ニ困難ヲ生ジタリ。蓋シ日本人民ノ激動甚シク、爲ニ朝鮮ニ航シタル井上大使ノ歸朝セラル、ヤ、歡呼シテ迎ヘタリト雖モ、尙心衷之ニ満足セズ、早ク清國ニ對シテ嚴肅ナル談判ヲ爲スノ必要ヲ主張シタリ。是ニ於テ乎日本政府ハ其清國ニ對スル計畫ヲ斷定シ、又北京政府ニ於テモ日本ノ要求ヲ容レザルトキハ其結果果シテ何ノ點ニ至ルヤヲ知ルベカラザルヲ推知セリ、清國艦隊ハ大半佛軍ノ爲メニ破碎セラレタルヲ以テ、到底日本海軍ニ匹敵シ能ハザルヲ察シ、其日清條約ノ締結上ニ影響スル所寡カラザルベシ。然ルニ又他ノ一方ヨリ觀ルトキハ、清佛間ノ和局將ニ近キニ在ラントスルノ傾向アリシヲ以テ、清國ノ兵勢ニ多少ノ餘裕ヲ與ヘ、爲ニ自恃ノ心ヲ生ゼシメタリキ。然リト雖モ清國ノ兵力ハ固ヨリ強盛ト稱スベカラズ。其組織タル羸兵弱卒ヲ以テシ、徵募兵ナルモノハ單ニ兵隊中ノ一小部分ニ過ギズ。清國兵制ニ關シテハ既ニ之ヲ論述シタルモノアルヲ以テ今茲ニ其評ヲ示サズ宜シク就テ參觀スベシ（一千八百八十四年出版現時論）然レドモ清兵ハ克ク敵軍ノ上陸セントスルヲ防ギ、又陸戰ニ熟練セリ。故ニ若シ日清ノ兩國開戰スルニ至ラバ其勝敗孰レニアルカ固ヨリ之ヲ豫言スルヲ得ザルナリ。若シ夫レ清國ニシテ日本ノ要求ヲ拒絕シ

毫モ之ヲ容レザルニ於テハ日本ハ終ニ最後ノ手段ニ出ザルヲ得ザルニ至リシナラント雖モ、日本ノ要求ハ極メテ公平ニシテ清國ノ拒絕ヲ受クルガ如キ過當ノモノニアラザリシヲ以テ、能ク危ヲ避ケテ平和ノ結了ヲ得タリ。此日清兩國ノ事件タルヤ、夫レ斯ノ如ク重大ナリ。若シ不幸ニシテ一朝事ノ破ル、ニ至ラバ、其結果ハ延テ歐洲ニ波及セシナラン。是ヲ以テ日本國ハ其目的ニ依テ其執ル所ノ方法ヲ確定スルハ實ニ重大要事ナリキ。日本政府ハ其清國ヲ制服スルヲ以テ目的トセズ、唯日清兩國ノ權利ヲ均フシ、且後來ニ於テ兩國政略ノ同一ヲ期スルヲ以テ旨トセリ。是レ實ニ大日本國 天皇陛下ノ其談判ノ全權ヲ伊藤伯ニ委任セラレタル所以ニシテ、撰任タル實ニ其宜シキヲ得タルモノナリト謂フベシ。

夫レ伊藤伯ハ前ニ叙セシ如ク確定シタル訓令ヲ帶ビテ清國ニ航セラレタリ。同伯ハ當初ヨリ清國ヲシテ屈服セシメ、且之ニ因テ償金ヲ出サシムルガ如キ要求ヲ爲スヲ欲セズ、惟ダ日本國民ノ資性ニ協フ名譽ヲ主トシテ、確乎タル論法ニ據リ、日清兩國ハ朝鮮ニ於テ同數ノ兵ヲ駐割セシムルノ權利アルコトヲ確定シ、以テ清國ノ朝鮮ニ對シテ獨リ自ラ主權ヲ有セザルコトヲ明ニスルニ在リ。是吾人ノ既ニ明知スル所ニシテ、其他ノ點ニ至テハ今日尙未ダ之ヲ公布セラレザルモノナリ、要スルニ歐洲ノ諸大國ニ關係ヲ有スルガ爲メ、永ク秘密ニ付スベキモノモアラシ。夫レ今次ノ事タル、清國外交政略ノ常ニ優柔不斷ナルニモ拘ハラズ、須臾モ遷延スルコ

トヲ許サレズ、又且ツ得手ノ遁辭ヲ弄スルコトヲ得セシメズ、速ニ其和局ヲ得テ歸國セラレタルハ實ニ伊藤伯ノ偉功ナリト云フベシ。而シテ談判中議論往々激昂シテ事ノ將ニ破レントスルノ勢ニ至リシコト實ニ一次ニシテ止ラズト雖モ、伊藤伯ハ終始至誠ヲ開キ堅ク執テ動クコトナク、遂ニ能ク清國政府ヲシテ要求ノ點ヲ許容セシメ、僅々數日ニシテ此ノ如キ重大ノ條約ヲ完結スルヲ得タリ。抑モ斯ノ如ク迅速ニ妥協ヲ得タルモノハ、蓋清佛事件ノ影響モアラン、又日本使節ノ談判其當ヲ得タルニモ由ラント雖モ、若シ清國政府中大識者ノ此事件ヲ商辦妥協スル微ツセバ、何ニ由テ以テ此ノ如ク速ニ其終結ヲ見ルニ至ルベケンヤ。其支那ノ大識者トハ夫ノ有名ナル直隸總督李鴻章氏ニシテ、伊藤伯ノ對手爲ルノ智能ヲ有スル者氏ヲ措テ他ニ其人アルヲ見ザルナリ。李氏ハ清國北部ノ兵ヲ統率スルノ任アルヲ以テ、北京政府ニ對シテ他邦ト結約專行シ、又清兵舉動ノ不正ヲ認メテ之ニ加罰スルノ權ヲ有セリ「ジャパン、ウイクリー、メル」新聞ハ其紙上ニ於テ左ノ言ヲ爲セリ、曰ク清國ニシテ若シ尙ホ一二ノ李鴻章ヲ有センニハ今一層活潑ナル處置ヲ見シナラント、是レ眞ニ智言ト謂フベシ。夫レ伊藤伯ハ第一朝鮮ノ關係ニ於テ日清均一ノ權利ナルヲ承認セシメ、第二日清兩國後來ノ情誼隣交ヲ鞏固ニセントスルノ正鵠ヲ得、終ニ本年四月十九日ヲ以テ天津條約ヲ交換シテ同月二十八日東京ニ復命セラレタリキ。同伯ノ東京ニ着クヤ、朝野咸喜迎シ歡聲街衢ニ轟々タリ。其意今回ノ好結果ヲ祝スルノミナ

ラズ、永ク日清間通商ノ利益ヲ享受スルニ至リタルヲ賀スルニ在リトス。故ニ天津條約タル實ニ東洋ノ二大國タル日清兩國將來ノ和好敦睦ニ於テ其第一關門ト爲リ、是ヨリ將ニ一新世紀ノ端緒ヲ兩國間ニ啓ントス。然カモ此條約ナルモノハ他國ノ干涉補贊ヲ受ケズ、日本國ノ自力ニ依テ以テ得タルモノナレバ、日本ノ外交政略及其位置ハ此時ヨリ方ニ大ニ其面目ヲ改メ、又之ニ因リテ其最大目的ヲ達シタリト謂ハン乎、而シテ此條約ハ從來獨リ朝鮮ニ關スルノミナラズ他ノ事件ニ關シテ日清兩國ハ互ニ相猜疑スルナク熟按協議其處置スベキヲ認定シタルモノナリ。日清兩國後來共ニ此新主義ヲ執ルガ爲メニ、何等結果ヲ東洋ニ觀ルニ至ルベキカ、之ヲ論究スルハ本論ノ主旨ニアラズ、矧ンヤ目下露國ハ朝鮮ニ於テ一ノ海港ヲ得ント欲シ、英國ハ巨文島ヲ占領セントスルノ企圖アルヲ以テ、其結果如何ヲ見ルノ日ハ蓋甚ダ遠カラザルモノアルニ於テヲヤ、故ニ將來日清兩國ハ北部太平洋ニ於テ合同一致以テ其利害ヲ共ニシ、又赤道以北ニ於テ地ヲ占領セント欲スル獨逸國（日清兩國自然ノ同盟國）ト相親愛スルニ至ラバ、此天津條約ヲシテ東洋歷史上ノ一新世紀タラシムルニ至ルヤ必矣。

余ハ已ニ朝鮮固有ノ地位及其運動如何ニ因テ日清兩國間ノ戰鬥ト爲リ、好和ト爲ルノ起因タル所以ヲ述ベ、併セテ名聲赫々タル政治家伊藤伯及李鴻章ノ二氏天津ニ相會シ、日清兩國ノ朝鮮ニ對スル地位及其利害ニ關スル談判ヲ遂ゲラレタル美譽ヲ稱揚セリ。然リ而シテ日清談判未

ダ全ク其極ヲ終ラザルニ際シ、又一ノ新事相ヲ東亞細亞ニ生起セリ、讀者請フ刮目靜思予ノ茲ニ叙述スルヲ輕々看過スルコトナキヲ。

世人苟モ東亞北部ノ地圖ヲ熟閱セバ、日本全島ト東部亞細亞ノ沿岸ノ間ニ二大海アルヲ看シ、其一ヲ日本海ト稱シ一ヲ支那海ト云フ。日本海ノ東ハ日本ヲ以テ界ト爲シ、西ハ朝鮮及露國ノ北部ニ接ス。故ニ日本ハ路ヲ東方ニ取レバ一太平洋ヲ經テ支那ニ達スルコトヲ得ルモ、若シ西岸ヨリスルトキハ支那ニ向フモ亦朝鮮ニ赴クモ皆日本海ニ由ラザルヲ得ズ。然リ而シテ日本海ノ南端即チ北緯三十五度ノ位置ニ於テ一海峽アリ、其東岸ハ日本ニ接シ西岸ハ朝鮮ニ界ス、而テ峽ノ中央ニ三島アリ、是レ實ニ日本海ノ咽喉ヲ扼セリ。

此諸島中ノ第一ハ「クエルバルト」島ト稱シ、最南部ニ位シテ大地ト隔絶スルガ故ニ、日本海及朝鮮ニ直接ノ影響ヲ及ボスコト鮮少ナラン。其第二ヲ「シモア」島トス、是レ最北部ニ位シ往古ヨリ日本國ニ屬セリ。然レドモ此島ハ日本海ノ幅員較々廣大ノ處ニ位スルヲ以テ、更ニ日本海ニ侵入スルノ敵艦ヲ防グニ足ラズ（此二島ハ「アンドレ」氏ノ地圖ニ於テ明瞭ナリ）第三ハ前二島ノ中間ニ位スル三箇ノ島嶼ニシテ、朝鮮ノ海岸及日本海ノ關門ニ近接スルガ故ニ、假ニ朝鮮ヲ以テ是班牙國ニ比セバ、此諸島ヲ占有スルハ恰モ地中海「ジブラルタル」ヲ領スルガ如シ。此三島ヲ總稱シテ「ポルトハミルトン」(巨文島)ト云フ。朝鮮國ノ濟州ヲ距ルコト三

十八英里ナリ。此三島中二島ハ其形狀細長ニシテ「ゴドー」「サンホドー」ト名ク、而シテ他ノ一島ハ之ニ比スレバ較々小ニシテ「オブセル」「ファトリ」「イスランド」ト稱シテ前二島ノ西南ニ在リ。此等ノ三島ハ皆良港ヲ開クニ適スベシ。是レ殊ニ英人ヲシテ或ハ自國或ハ「ジブラルタル」ニ於ケルノ感覺ヲ起サシムルニ足ル所以ナラン。蓋「ゴドー」島ハ海面ヨリ直立スルコト大凡六百五十尺ニシテ「ザンホドー」島ハ七百八十三尺ナリ。而シテ此三島ヲ一望スルトキハ恰モ一大島ヲ見ルガ如シ。是レ其名稱ヲ共ニスル由縁乎。此三島中殊ニ「オブセル」「ファトリ」「イスランド」ニ於テハ船舶修繕場及軍艦碇泊ニ適スル一佳港アリ、他日必ズ東洋ニ於テ一大熱鬧ノ地タルニ至ルベシ。抑此三島ハ世人ノ熟知スル如ク、一千八百八十二年「ウキルレス」氏ノ發見ニ係リ、當時人民ノ住居セルハ僅ニ其南岸ニ止マリ、鬮島絶ヘテ家畜ノ類ヲ見ズ、加フルニ住民常ニ飢餓ニ逼ルモノ、如シ。然ルニ其翌年即チ一千八百八十三年ニ至テ頓ニ面目ヲ改メ、住民大凡二千人ノ多キニ達シ、常ニ田圃ニ稼穡シテ島中耕作ニ適スルノ地ハ既ニ此住民ノ有スル所トナレリ、今此諸島ヲ領有スルト否ニ因テ生起スル所ノ結果ニ至テハ、眞ニ之ヲ重大ナリト謂ハザルベカラズ。誠ニ軍略上ヨリ論ズルトキハ一ハ朝鮮ノ諸外國ニ對スル海上防禦ニ關シ、一ハ日本海峽安危ノ決スル所ナリトス。故ニ其安危ハ獨リ日本海ニ止マラズ露國東部及浦潮斯德港ニ於ケルモ亦同一ノ關係ヲ有スルモノト云フベシ。予ハ將ニ地理ニ就テ暫ク左ノ

判斷ヲ下サントス。

夫レ清國ノ佛國ト和戰ノ決ニ遲々シ、佛國ノ「ハンキマン」或ハ臺灣ノ中孰レヲ占有スルノ利ナルカヲ熟考スルノ時ニ際シ、他ノ權理及利益ノ如何ヲ顧ミズ、且自ラ任ジテ海上ノ統御者ト誇稱スル英國人ハ佛國東洋ノ一地ヲ占有セントスルノ專横ヲ怒リ、自己ノ國ニ於テモ亦一ノ良地ヲ占領セザルベカラズト思惟セリ。故ニ英國ハ其公法ニ違反スルト否ハ措テ論ゼズ、突然數隻ノ軍艦ヲ艤裝シテ巨文島ヲ掠奪セシメタリキ。蓋英相「グラッドストン」氏ハ埃及及伯林府ニ於テ經驗シタル覆轍ヲモ顧慮セズ、其權理ノ有無ニ拘ハラズ、且ツ此事ニ關シ他ノ諸大國ニ通知スルコトナク、惟々自國ノ專斷ヲ以テ之ヲ實行スルニ至レリ。夫レ英國ノ常ニ弱者ニ對シテ強暴ナルハ其事迹ニ就テ明ナリトス。今回ノ如キモ亦此慣手ニ依テ雷ニ巨文島ヲ以テ碇泊所ト爲スニ止マラズ、又其陸地ヲ併セテ兵備ニ供シタルモノナリ。既ニ英國ハ本年五月巨文島ニ向テ許多ノ薪炭木材及家畜等ヲ回送シ、且ツ三百名ノ匠人及二百有餘ノ職工ヲ派遣シタルニアラズヤ。是レ實ニ該島ノ港口ニ廣大ナル軍事上ノ建築ヲ爲サンガ爲メナリ。要スルニ英國政府ハ己レノ強大ヲ特ミ、無勢力ナル朝鮮及佛國ト交戰中ナル清國、又今日將ニ立憲國タラントスルノ日本國等ノ困難ヲモ顧ミズ、又公法ニ違乖スルヲ恬トシテ知ラザルモノ、如ク、恣ニ巨文島ヲ占領シテ在上海英國領事館ト連絡ヲ通ジタルガ如キハ、之ヲ正當ノ行爲ナリト云フヲ得

ベキカ、剩ヘ彼レ巨文島ヲ占有シテ眼中殆ンド清國日本及朝鮮ナキガ如シ。嗚呼是ノ如キ咄々怪事ハ吾人が古來公法上ノ沿革史ニ於テ未ダ曾テ見ザル所ニシテ、世人ノ評シテ英國ハ歐洲諸國ノ背ニ立テ姦計ヲ回ラスノ國ナリト云ハズシテ將々之ヲ何トカ言ハンヤ。

今「グラッドストン」氏ハ傲然トシテ東洋弱國ノ利害如何ヲ顧ミズ、第二ノ「ジブラルタル」ヲ東洋ノ地中海（日本海及支那海）ニ設置セント欲シ、力メテ良策ヲ畫シ陰ニ之ヲ施行セントセリ。故ニ「グラッドストン」氏ハ之ヲ國會ニ諮詢スルコトナク、密ニ歐洲諸國ヲシテ喙ヲ容レザラシムルノ長計ヲ畫籌シタリト雖モ、露國其間ニ顯出シテ此秘策モ亦遂ニ之ガ爲メニ發見スル所トナレリ。是レ英露兩國政府ノ間ニ會議ノ舉アリシ所以ナラン。然レドモ予ハ其細報ヲ得ザルヲ以テ今之ヲ詳ニスル能ハズ、而シテ英國ノ著名ナル新聞紙ニ載録スル所ニ依レバ、宰相「グラッドストン」氏ハ、露國若シ印度地方ニ朶頤スルノ念ヲ斷タバ、他ノ亞細亞地方ニ如何ナル政略ヲ施スモ敢テ喙ヲ容レザルコトヲ約シタリ云々。是ヲ以テ露國直チニ二三ノ軍艦ヲ「シモア」港ニ派遣シタリト雖モ、此事件ニ關シテ吾人ノ聞知スル所ハ僅ニ、露國ノ未ダ確乎タル動作ヲ見ザルト、歐洲各國ニシテ此舉ニ注目セザルトノ二點ナリト云フニ過ギズ。而シテ歐洲諸國ノ深ク此ニ注目セザルモノハ思フニ東洋ヲ去ルノ遠キニ致ス所ナラン、況ンヤ日清兩國ノ羸弱ナル、世人ノ認テ他國ノ政略ニ干涉スル威力ヲ有セザル邦國ト爲スニ於テヤヤ。

日清兩國間ノ天津條約其局ヲ結ブヤ、早ク既ニ第一ノ結果ヲ世ニ顯示セリ。即チ日清兩國ノ史上未曾有ノ動作ヲ現シタルコト是ナリ。蓋シ日清兩國ハ此時ヨリ相協同シテ斷然歐洲諸政府ニ向テ今回英國ノ巨文島ヲ占有スルノ非ナルヲ論告シ、又英國宰相「グラトストン」氏ニ向テハ其政略ノ目的トスル所公明正大ヲ旨トシ、決シテ侵略ヲ事トスルニアラザリシコトヲ詰リ、又英國ニシテ巨文島ヲ占領スルトキハ露國ヲシテ亞細亞ニ於テ益々海陸ノ版圖ヲ擴張セシメ、且其勢力ヲシテ遂ニ英國ト相軒輕セシムルニ至ルベキコトヲ論ゼリ。然ラバ日清兩國ニ於テハ露國他日自ラ其目的ヲ廢棄スベシ、又「グラトストン」氏ハ未ダ曾テ東洋植民政略ヲ有セザリシト信ジタルモノ、如シ。吾人ハ之ニ對シ何ヲカ言ハン、唯日清兩國ハ何レノ日カ天津條約中ニ約束シタル事項ヲ實行セザルベカラザルノ場合ニ至ルベシト云フノミ。若シ英國ヲシテ萬國公法ヲ蔑視スル常ニ此ノ如クナラシメバ、日清兩國豈拱手黙々ニ付スルコトヲセンヤ。日清兩國ニシテ既ニ然リ、況ンヤ歐洲諸強國ニ於テヲヤ。就中獨逸國ノ如キ清國ノ通商殆ント其半ニ居ルモノニシテ、何ゾ之ヲ傍觀スベキノ理アラシヤ。

英國ハ内財政ノ困難ヲ極メ、外埃及ノ敗蹟ニ苦ミ、内外多事ノ時ニ際シ、今又巨文島占領ノ一事件ヲ起シテ益煩擾ヲ加フルニ至ルハ、職トシテ英人東洋ノ事理ニ通ゼザルニ由ル、若シ此ノ時ニ當テ「アフガニスタン」ノ事件再興スルアラバ、英國ノ東洋ニ於ケル實ニ安危ヲ知ルベ

カラザルモノアリ。

英國一タビ妖雲ヲ東洋ニ起サシムルモ其軍略ニ至テハ常ニ迂遠ヲ免レズ、遷延躊躇爲メニ好機ニ乗ズル能ハザルヤ必セリ。加フルニ今某氏ノ報ズル所ニ據レバ、英國ハ香港及新嘉坡港ニ於テ炮臺ヲ建設センコトヲ企テ、其計畫已ニ定マリタルモ未ダ之ニ著手セズ、又巨文島ニ軍艦ト碇泊場ヲ設置シ、兵隊ノ屯營ヲ建造スルコトヲセズ、假令之ヲ建設スルモ亦之レヲ維持スルコト能ハザルベシト、蓋其故三アリ、何ゾヤ、夫レ英國ハ絶テ萬國公法ヲ破却スベカラザルコト、日清兩國ノ協力蔑視ス可ラザルコト、歐洲諸強國ハ必英國ノ姦計ヲ傍觀スルナキコトヲ曉知シテ却テ之ニ介意セザルモノ、是レ彼ノ遽ニ其目的ヲ達スル能ハザル所以ノ一ナリ。又英國ハ貴重ナル軍艦拾餘隻ノ修繕ヲ懈ルノミナラズ、假令之ヲ修ムルモ僅ニ現在ノ位置ヲ保維スルニ過ギズ。是レ彼ノ遽ニ其目的ヲ達スル能ハザル所以ノ二ナリ、而シテ今日一隻ヲ修繕セントスルモ三歲餘ノ星霜ヲ經ルニアラザレバ竣工セザルベシ。加フルニ英國ノ商業ハ旺盛ヲ極ムルノ日ニアラズ、威名モ亦昔日ノ比ニ非ザルベシ。既ニ都兒格ノ如キハ皆說ヲ作テ謂フ、今日ノ英國ハ辛フジテ「ナイル」河口ノ難ヲ避ケタル英國ナリ、南亞弗利加ニ敗ヲ取リタルノ英國ナリ、歐洲同盟ノ地位ヲ失シタルノ英國ナリ、我々「ダルトネル」海峽ノ險アリ、何ンゾ復今日ノ英國ヲ恐レンヤト。英國名望ノ萎靡スル既ニ此ノ如シ、是レ彼ノ遽ニ其目的ヲ達スル能

ハザル所以ノ三ナリトス。然ルモ彼レ猶ホ之ヲ覺知セズ、常ニ歐亞諸國ノ爲メニ嫌惡セラル、ガ如キ政略ヲ取テ止マザルモノ豈危殆ノ至ナラズヤ。

讀斯丁邊氏意見書

韓城變亂ノ事實今ヤ業ニ一定ニ歸シテ、復タ此ニ論辨スルヲ須ヒズ。惟ダ氏ノ意見書ヲ丁寧反覆シ、姑ク事體ノ輕重ヲ問ハズ、漸ク項ヲ追フテ徐々論評スル所アラントス。其全權大臣ヲ特簡シテ事局ヲ結了スルト、駐劄公使ニ訓令シテ之ヲ爲サシムルトハ自ラ廟議ノアルアリ、氏ノ起案スル所駐劄公使ヲシテ查辨セシメントスルモノナリト雖モ、政府設シ全權大臣ヲ特派スルニ決スルトキハ應々其意ニ隨テ案文ヲ變更スルヲ要スベシ。

第一段ハ我國ノ朝鮮ニ向テ充分補償ヲ要ムベキ理由權利アルニ拘ハラズ務メテ寬恕ヲ加ヘ能ク和好妥結シタルヲ明示スルニ止リ、敢テ論下スルノ要ナシトス。第二段ニ我公使ノ前キニ韓王ノ依頼ニ應ジ、寡少ノ護衛兵ヲ率テ王城ニ在ルヤ豫メ前報ヲ與ヘズ大數ノ清兵云々トアリト雖モ、倘シ清廷ヲシテ之ニ答ヘシメバ必ず將ニ云ハントス、袁吳張三將ヨリ竹添公使ニ送リタル書簡是レ前報ナリト、然ルニ今其書簡ヲ查閱スルニ月日ヲ載セズ、故ニ當初竹添公使ニシテ未ダ全ク前報ヲ接手セズ、或ハ之ヲ接手シタルハ業々事端ヲ啓キタル後ニアリキト答ヘタラン

ニハ、恐ラクハ清廷其否ラザルヲ證言スルヲ得ズト雖モ、如何セン竹添公使ノ復書中會々手翰ニ接シ未ダ拆封ニ及バズ、貴國ノ兵隊闖入ス云々ノ語アルヲ以テ見レバ、其實ニ未ダ拆封ニ及バザルト否トヲ問ハズ、豫メ前報ヲ與ヘズト謂フヲ得ズ。却テ彼ハ竹添公使ノ復書ヲ以テ反證トスルノミナラズ、口實ヲ彼ニ假スノ虞アリ、事實既ニ此ノ如ク、彼我往復ノ信書ニ徴シテ掩フベカラザルモノアルヲ以テ、宜シク豫メ前報ヲ與ヘズヲ相當ノ時間内ニ豫報セズニ更ムベシ又彼ノ清將ノ不法ヲ責ムルニ公使銃撃ノ一事ヲ以テスルハ尙ホ悉サバルニ似タリ。今其事ヲ討索シテ之ヲ公法ニ照スニ、二大要點ヲ得ベシ。第一ハ公使銃撃、第二ハ兵士死傷即チ是ナリ。公法ヲ按ズルニ公使ヲ冒犯スルハ即チ其國ヲ冒犯ス云々其註ニ公使ハ尊クシテ犯スベカラザルノ例トアリ。以テ其重キヲ視ルベシ。兵士死傷ノ事亦直接ノ加害ニシテ、軍隊ヲ辱シムルハ即チ其國ヲ辱シムルナリ。是レ清廷ニ關スル重大ノ案件ニシテ、均シク詰責セザルベカラザルモノトス。起案者ノ此ニ公使銃撃ノ一事ヲノミ舉グルモノハ惟フニ重キニ從ヒ輕キヲ示サバルノ意ナラント雖モ、併セテ兵士死傷ノ事ニ及ブハ我補償要求ノ本旨ヲ明ニスルニ於テ缺クベカラザルノ要點ナリ。又本案補償ノ點ニ至テ明示スルコトナシ、夫レ補償ノ道加害者ヲ刑戮スルアリ、地ヲ割テ與フルアリ、金ヲ辨シテ贖フアリ、起案者其孰レヲ擇バントスル歟。本項ノ末文ヲ翫味スルニ、貴國士官ノ所爲ヲ藐視スルコトナク、且各犯跡ノ輕重ニ隨テ刑ヲ加ヘンコトニ

躊躇スルナキヲ信ズトアルヲ觀レバ、起案者ノ所謂補償ノ意義蓋シ清國士官ヲ處罰スルノ一事ニ止ルモノ、如シト雖モ、抑モ今次談判ヲ清廷ニ開クニ及ンデハ、初メヨリ此ノ如ク自ラ權利ヲ局促シテ士官處罰ノ一事ヲ要ムルコトナク、其事局ヲ妥結スルニ當リテ我政府ハ隣交ノ和好ヲ重ンジ、善後償金ヲ獲ルノ意アラザルヲ明示スルノ餘地ヲ遺スベシ。而シテ第一公使銃撃、第二兵士死傷、此二事ニ就テ一方ニ於テハ士官ヲ處罰シテ前罪ヲ贖ハシメ、一方ニ於テハ我敢テ償金ヲ要メズ、却テ恩ヲ彼ニ施スニ至ラン。故ニ本案單ニ補償ト云フハ妨ゲナシト雖モ、末文ノ如ク士官所刑ヲ以テ補償ノ全部ヲ示スハ不可ナリ。宜シク本文ヲ刪除スル歟、或ハ満足ナル補償要目ヲ掲グル歟、二者其一ニ改メザルベカラズ。此ノ如ク論ジ來レバ起案者或ハ云ハン兵士死傷ノ事既ニ朝鮮新條約ニ於テ查辨シ了スト、然ルニ該條約ヲ展開スルニ約款第二ニ於テ此次日本國遭難人民ノ遺族並ニ負傷者ヲ恤給シ、暨ヒ商民ノ貨物ヲ毀損掠奪セル、者ヲ填補シテ云々トアリ、其人民商民トハ共ニ一個人ニシテ遭難負傷者亦一個人ヲ指稱ス。而シテ軍隊ノ謂ニアラザルヤ明ナリ。若シ此見解ヲシテ誤謬ナカラシメバ、朝鮮約款ニ拘ハラズ我ニ於テ清廷ニ補償ヲ求ムル固ヨリ其所トス。事理此ノ如クナレバ本項補償ノ要上ニ叙述スル二大間議ニ就テ變更セザルベカラザルナリ。第三段撤兵ノ事タル、惟ダ一片ノ勸告ニ止リ我ニ於テ要求スルノ權利ナク、彼ニ於テ必遵ノ義務アルコトナシ。然レドモ清國和好ヲ重ンジ事端ヲ將來ニ啓

クナカラシコトヲ欲スル我ノ如クナラバ、安ゾ此ノ勸告ヲ容レザランヤ。若シ幸ニシテ彼レ我ガ意ノ在ル所ヲ知了シ、共ニ撤兵ヲ肯ズルトキハ、第一双方撤兵ノ意ヲ明ニスルコト、第二双方期ヲ定メ同時撤兵スルコト、第三將來ノ事亂ヲ防護スルニ足ル軍隊ヲ組織シ、以テ中外ノ警ニ備フコトヲ日清兩國ヨリ韓廷ニ請求スル事ヲ訂約スルヲ要ス。

井上馨ノ朝鮮事件處理意見

井上外務卿ヨリ榎本ヘノ内訓書

京城事變ヲ辨理スルノ要領ハ左ノ一點ニ外ナラズ。

甲、若シ竹添ニシテ朝鮮政府ノ唱導スル所ノ如ク、洪英植、金玉均等ノ亂黨ト連謀スルノ事實又ハ情意アラシメバ、是レ日本公使ノ處置ハ朝鮮ノ内亂ニ干渉スルモノニシテ不正不法ノ事タルヲ免レズ。

乙、若シ竹添ニシテ始メヨリ亂黨ノ謀ニ預カラズ、又亂黨ノ隱謀アルコトヲ知ラズシテ單純ニ國王ノ依頼ニ因リ國王ヲ保護スル爲ニ入關シタルモノナラシメバ、是レ竹添ハ友國ノ爲ニ好誼ヲ盡スモノニシテ、公法ニ背クモノニ非ズ。而シテ他ノ外兵ノ之ヲ侵撃シ更ニ波及シテ我公使館ヲ焚キ、我兵民ヲ亂殺シタル者アリタレバ、我國ニ於テ其侵害ヲ回復セザルコトヲ得ズ。

余ガ全權大使ノ命ヲ受ケタルハ竹添ガ所爲ヲ辨護スルガ爲ニ非ズシテ、公法ニ據リ情義ニ基

キ公正ナル查辨ヲ爲シ、理ノ在ル所ニ從テ以テ此事件ヲ處分シ、上ハ以テ我
天皇陛下ノ一視同仁ノ盛徳ヲ輔贊シ、下ハ以テ兩國ノ和好ヲ全クシ、兩國人民ノ幸福ヲ維持
セント欲スルニ在リ。此重大ナル使命ヲ荷フガ爲メニ、余ハ朝鮮官吏ト談判スルコトノ前ニ於
テ先ヅ第一ニ左ノ手順ヲ以テ竹添ガ果シテ朝鮮ノ亂黨ト通謀セシヤ否ヲ查明スルノ方法ヲ執リ
タリ。

一、十二月 日京城事變ノ電報ヲ接スルノ第三日ニ於テ栗野書記官ヲ相模丸ニ載セ、仁
川ニ到ラシメ當時ノ事情ヲ探問セシタリ。

二、十二月十六日余ガ旅行ヨリ東京ニ歸リ横濱ニ到着スルノ日ニ於テ、直ニ井上議官ヲ
蓬萊丸ニ載セ仁川ニ至リ、面タリ竹添ヲ問訊セシメ、其後余ガ三十日ニ着スルヤ否ヤ
井上ヲ京城ヨリ召還シ其見聞スル所ヲ面陳セシメタリ。

三、余ハ仁川ニ入ルヤ否ヤ直チニ島村ヲ召シ、竹添ガ手ニ成ル所ノ事變始末書ニ據リ逐
項對比シテ面タリ島村ニ詢問シ、之ガ爲ニ仁川ニ於テ一日滯留スルコトノ猶豫ヲ取り
タリ。又京城ニ入ルヤ否ヤ竹添ヲ召シ當時ノ事情ヲ面陳セシメ殆ド鷄鳴ニ達シタリ。

余ガ最初ニ命ヲ受ケテ東京ヲ出ルノ日ニ方リテ實ニ未ダ竹添ガ所爲ノ曲直ヲ判然スルコト能
ハザリキ、下ノ關ニ於テ栗野書記官ガ歸國スルニ遇ヒ、初メテ京城事變ノ詳細ヲ知悉スルコト

得、余ガ辨理ノ目的ハ始メテ確定スルコトヲ得タリ。繼テ仁川ニ至リ京城ニ至リ、益々事情ノ
明瞭ナルヲ得テ余ガ目的ヲシテ一直ニ進行シテ誤ラザルコトヲ得セシメタリ。即チ竹添ハ始終
朝鮮ノ亂黨ニ連累セザリシコト是レナリ。

朝鮮人並ニ支那人ハ竹添ガ亂黨ニ干渉シタルコトヲ唱道シ、中外ニ報告シ、並ニ我國ニ向テ
モ亦之ヲ聲明シタリ。是レ蓋シ自ラ其責ヲ掩飾スルノ造意ニ出ルノミニ非ズシテ、其心ニ於テ
實ニ竹添ガ所爲ヲ疑ヒタルニ外ナラザルベシ。試ミニ其故ヲ尋ヌルニ左ノ四點ニ起由スル者ノ
如シ。

一、洪英植、金玉均等日本人ト親好ナル交際アリ、及び今度ノ亂魁ナル士官生徒ハ即チ
日本ノ學校ニ於テ演習セル生徒ナル事。

二、竹添ガ護衛兵ヲ引テ入闕セルニ因テ亂黨ハ實際其勢ヲ増シタル事。

三、竹添ガ入闕ノ後三日ヲ經ルモ王宮ヲ去ラザリシ事。

四、金玉均、徐光範等日本ニ逃竄セシ事。

此四點ノ疑似ノ形迹アルニ因リ、朝鮮人支那人ハ草々ニ判斷ヲ下シ、竹添ガ亂黨ト連累アル
コトヲ唱道セルハ蓋シ普通ノ感覺ニ起ルニ外ナラズシテ、強チニ捏造詐譎ノ情ニ出ルモノニ非
ザルベシ。即チ余ト雖モ始メテ電報ヲ接セシ時ヨリ、下ノ關ニ於テ栗野書記官ニ面會スルマデ

ハ實ニ半信半疑ノ迷夢中ニ在ルコトヲ免カレザリシ。

一、金玉均等ハ東京ノ學士諸生ト親密ナル交際アリテ互ニ密友ト稱スルノ有様ナリシモ却テ竹添トハ十五年已來互ニ相輕侮シ、其交情ハ甚ダ冷淡ナリシ。今度ノ事變ノ前一月ヲ隔ツル比、金玉均等竹添ニ到リ粗朝鮮改革ノ意見ヲ談ゼシニ、竹添ハ色ヲ改メテ之ヲ叱責シタルコトアリ、是ヨリ金玉均等ハ竹添ニ向テ親密ナル情話ヲ爲スコトヲ憚リ、反テ竹添ヲシテ朝鮮内部ノ事情ニ迂遠ナラシメタリ。

二、竹添ハ實ニ朝鮮ノ内情ニ迂遠ナリシ、而シテ竹添ハ實ニ朝鮮國王ノ需メニ應ジテ入闕スルニ匆卒ナリシ、竹添ガ兵ヲ引テ入闕セル故ニ金玉均等ガ實ニ其勢力ヲ増シタル事ハ疑ナキノ事情ナルベシ。併シナガラ是レ即チ竹添ニ於テハ偶然ノ事情ニシテ、實ニ豫期スル所ノ外ニ出デタルモノナリ。竹添ハ實ニ迂遠ト匆卒トノ謗ヲ免カレザルベシ。然ルニ竹添ハ亂黨ヲ陰助スルノ故造ノ罪アルモノニ非ラズ。

三、竹添ガ三日間王宮ヲ去ラザリシモ亦タ其自ラ計ルノ疎ナルニ因ルモノニシテ、其疑似ノ形迹ヲ避クルニ捷速ナラザリシナリ。竹添ハ入闕ノ翌日即チ五日ニ於テ王宮ヲ去ランコトヲ試ミタレドモ、國王ノ竹添ヲ引接シ溫言慰勞シ愛慕ノ情顔面ニ顯ハレタルヲ以テ、竹添ヲシテ其危難ヲ哀憐スルノ情ヲ深切ナラシメ、去ラント欲シテ復タ止マ

リ眷戀シテ措クコト能ハザラシメタリ。終リニ竹添ガ辭別ヲ請フニ臨ミテ國王ハ三宮各々其廬ニ還ルヲ俟テ而ル後ニ辭シ去ルベシトノ命ヲ傳ヘラレタリ。此時ニ於テ竹添ハ斷然トシテ辭別スルニ忍ビザリシ。

四、金玉均等ガ形ヲ變ジ仁川ニ來リ、終ニ千歲丸ニ搭載シ我國ニ逃竄セシハ實ニ彼等ノ平生親交スル日本書生ノ庇陰スル所ニシテ、竹添ハ動亂ノ際之ヲ查明スルニ暇アラザリシ。此時ニ於テ若シ金玉均等ヲシテ身ヲ公使館ニ投ジ、竄鳥入懷ノ情アラシメバ竹添モ亦故サラニ之ヲ掩護スルノ事ナキヲ保證シ難キモ、幸ニ彼等ハ竹添ヲ籍ラザルモ猶ホ其他ノ私友ノ力ニ倚テ以テ其身ヲ藏匿スルノ方法ヲ得ルニ餘リアリシ、竹添ガ千歲丸ニ載セテ歸國セシメタル屬員木下真弘ガ、外務省ニ於テ金玉均等ノ事ヲ訊問サレシ時、木下ハ茫然トシテ彼等ノ存否及行衛ヲ不知コトヲ答ヘタリ。此時席ニ在ルノ書生同時ニ歸國シタル者ハ啞然トシテ竹添及ビ木下ガ事情ニ迂遠ナルヲ冷笑シタルモノアリシ。

之ヲ要スルニ其情ヲ原ツケズシテ其形ヲ論ゼシメバ、竹添ガ亂黨ノ欺罔ヲ被ムリタリト云フモ可ナリ。又竹添ハ亂黨ト共謀シタリト云フモ可ナリ。余ハ細カニ其情ヲ推察シ之ヲ事實ニ參考シテ、竹添ハ果シテ其事情ニ迂遠ナリシヲ覺知シ、而シテ其事情ニ迂遠ナリシハ即チ其所行

ノ公法ニ悖ラザルノ證憑ナルコトヲ確信スルコトヲ得タリ。之ヲ余ガ日韓事件ヲ辨理スルノ根
理トス。

若シ事ノ情實ヲシテ前ノ陳スル所ト相反セシメバ、決シテ現ニ決行セル辨理ノ方法ヲ取ラザ
リシナルベシ。

朝鮮事變ニ對スル意見

榎 本 武 揚

清政府ヨリ便宜行事全權大使ヲ朝鮮ニ派出スベシト總署へ請求ノ懸合往復書類、並ニ總署ヨ
リ借覽シタル朝鮮王與李鴻章文抄及ビ朝鮮王布告叛臣罪狀ノ全文等其他一切並ビニ最近迄ニ得
タル各種情報北京各國外交團ノ意見概略等ハ一月三日付ヲ以テ在韓井上大使へ送致セリ。是ハ
李鴻章ヨリ派韓ノ急アルコト原領事ヨリ電報アリタレバ、公使ニ托シタルモノ也。此便ハ山海
關ヨリ出船アラバ四晝夜ヲ出ズシテ仁川ニ至ルベク或ハ陸便ニテモ一晝夜清里六百里走ミ飛脚
ナラバ、北京ヨリ漢城迄七八晝夜若クハ遅クモ十日以内ニ達スベケレバ、右ノ書簡ハ本月十四
日頃迄ニハ必ラズ漢城井上大使ノ許ニ届クベシト信ズ。五日午後四時十分原領事ヨリ電報アリ
。抑此度朝鮮事件ニ對スル本邦ノ政略ハ専ラ和ヲ主トシ其清國トノ關係ニ就イテハ清兵ヲ朝鮮
ヨリ引拂ハシメ而シテ我兵モ彼地ノ保安ノ見据立チ次第引拂ベシトノ約條ヲ清國出張官吏ト取
換シタル一點ニ止リタルガ如シ。吳大澂等ハ固ヨリ獨斷ヲ以テ右條約ニ記名調印ノ權ナケレ

バ、何レ北京政府ハ該件ニ付何等カノ議決ヲ見ルベク、其條約ノ性質ニ因テ諾否ヲ決スルナラシ。駐韓ノ清兵ヲ悉ク撤去セシメ、後來一兵モ韓地ニ派スルヲ得ズトノ義ナレバ、清廷必ラズ異議アルベク、若シ又撤兵ハ一時ノ事ニテ、後來緊要ト看做タル節ハ又々出兵ノ權ヲ保存スルノ義ナレバ敢テ不字ヲ唱ヘザルベシ。乍去右ニ而志不完全ナレバ詰ル處不得止我方ニテ駐韓ノ兵數ヲ増加スルノ手段ニ歸スベキ歟ト推察セラル。斯ル場合ニ於テハ漢城ノ南岡ニ砦ヲ築キ、並ニ一二要害ノ島々ヲ占拔シテ不慮ニ備フルノ覺悟アルヲ要スベシト信ズルニモ拘ラズ我政府ニ於テハ右様ノ見込モ更ニ無キガ如シ。又漢城ニ於テ本邦人三十名清兵ノ爲メ殺害セラレシ件ハ實ニ不容易件ナレバ、右ハ如何ノ處置ニ出ヅル所存ナルヤ。

六日我新年ノ祝儀トシテ總署王大臣始メ六部九卿大抵殘ラズ來館セリ。此三十名以上ノ大臣等ハ何レモ凡骨ノミ多ク、甚キハ大學士管理吏部事務靈中堂ノ如キハ本邦ト朝鮮トハ地續キ也ト信ジ、今次ノ變ガ何事ナルヤモ知ラザリキ。

明治十八年一月初七日

於北京 榎本武揚

王大臣ト榎本武揚トノ對話

郡王 斯ル末節ニ拘リテ、兩國交渉之要務ヲ談判セザルハ了解ニ苦ム。

榎本 井上大使ガ吳欽差ニ交渉要務ヲ談判セラレザリシハ、元來吳欽差ニ全權之字據ナキト、

同氏當ニ議ニ當ルベキノ資格無シト自稱セシヲ以テ本トス。之ニ次デ同氏舉動輕卒ナル遂ニ井上大使ヲシテ私談ニ妥議セントノ好意マデモ併セテ斷念セシメシ也。

郡王及鄧承修 閣下ハ吳欽差之舉動ヲ以テ無禮ト認メラルレドモ、同氏ハ韓事ヲ查辨スル爲メ特派セラレ、而シテ其事タル三國ニ相關スル所アルヲ以テ、井上大使之議席ニ蒞ミ、韓廷トノ商議ニ與聞セシトテ不相當ノ舉動トハ認メ難シ、假ヘバ閣下ト此席ニ面議ノ際、英米公使ガ入り來ラバトテ敢テ無禮ト看做スヲ得ズ。

榎本 否々韓事ヲ議スルハ唯我が大使ト韓廷ノ大臣トニ限ルベキガ如キハ辯ヲ俟タズ、吳欽差ガ查辯スベキ韓事ハ貴國ト韓トノ事ニテ、我ニ關セザル事猶ホ我ト韓トノ事貴國ニ關セザルガ如シ。惡ンゾ之ヲ以而吳氏ノ舉動ヲ回護スルヲ得ン、又王爺ハ自分ト王爺トノ議席ヘ英米

公使が不意ニ入り來ルヲ以テ失禮ト見做サズト稱セラルレド、自分ハ斯ル議席へ他國公使ノ來テ座ヲ占ムルヲ許サズ、他國公使モ亦人ノ議席へ斷リモナク入來リテ座ヲ占ムルガ如キ不作法ノ舉動ハ決シテ無シ、二國全權大臣ノ議席ハ諸人集會場ト一樣ニ觀ルヲ得ズ。

王大臣等 我輩ハ不作法トハ看做サズ。

榎本 吳氏ノ舉動ヲ不敬ト看做サルトハ世界各國中蓋シ貴國人ノミニ限ル所見ト謂フベシ。貴國王大臣等ヨモヤ斯ル癖見アルベシトハ思ハザリキ、恐ラクバ自國使臣ヲ回護セントノ一念ヨリ、姑ラク之レガ辭ヲ造ラレルニアラズヤ。

閔敬銘獨語シテ ヨモヤ吳欽差斷リナク人ノ議席ヲ犯スガ如キ事アリトモ思ハレズ。

榎本 吳欽差ハ再度ノ上諭ヲ接收セザルニアラズヤ。

郡王 爾カアラザルベシ、但シ此電文ハ諸事曲ヲ我ニ負ハシムル者也。

榎本 否、本國政府ノ意ハ井上大使ガ韓地ニ於テ日清相關之事件ヲ談判セザリシ理由ヲ申越セシノミニテ、敢テ之ヲ以テ爭端ヲ開クニアラズ、但シ曲直ハ虚心者能ク自カラ之レヲ知ルベキノミ。

郡王 兎ニ角是レハ既往事ニシテ抗論ヲ要セズ。

榎本 敢テ問フ、王爺ハ吳欽差ノ舉動ヲ不敬トアラズト公言セラル、趣意ナリヤ、若シ然ラバ

其一語ニテ足レリ、其旨ヲ日本政府ニ電知スベキノミ。

郡王 否々予ノ云々セシハ閣下トノ閑話ナリ、況ヤ其事タル末節ニアラズヤ。

榎本 閑話ナレバ夫ニテ宜シ、但シ王爺ハ末節ト稱セラルレドモ、小事ヲ以テ大事ヲ傷フ事古今其例ニ乏シカラズ、我等以爲ラク吳欽差ハ蓋シ軍人ニテ禮節ヲ能ク辨ゼザルノ人タラン。鄧承修 此等ノ事ヲ以テ吳氏ヲ譴責スルハ氣ノ毒ニアラズヤ。

榎本 我等ハ吳欽差ヲ譴責セヨト抗言スルニアラズ、只々實在ノ狀況ヲ貴署ニ通知セシノミ、只前ニ一言スベキ事アリ、凡ソ人情誰レモ自國之人ヲ回護セザルハナシ、然レドモ餘リ其情ニ過ルトキハ公樂ノ道地ヲ拂フニ至ルベシ。一昨年長崎阿片一件ニテ、我巡查ト貴國人民トノ紛擾ヲ起セシ案ノ如キ、本國人中ニハ異議ヲ唱ヘシ者アリシ由ナレドモ、我法廷ハ情ニ依テ法ヲ枉ゲズ、遂ニ我巡查ヲ嚴罰ニ處シ、貴國人民ニ救恤金マデモ與ヘシハ貴國大臣等之知ル所ナルベシ。凡ソ公平之二字之レヲ唱フルハ容易ナレドモコレヲ踏ムハ到テ難シ。

閔敬銘 然リ。

榎本 我等ハ昨夕始メテ朝鮮事件ニ細報ヲ得タリ、未ダ悉ク披閱セズト雖ドモ、此小冊子ノ如キハ竹添公使ノ筆記ニ係レバ當日ノ實狀ヲ概見スルニ足レリ、御一覽アルベシトテ出示ス。

(此ハ竹添公使ヨリ接到セシ朝鮮事變始末ノ漢譯ナリ)

又云ク、之ヲ一讀セラレバ是迄貴署ヨリ借覽セシ貴告人ノ報告トハ頗ル異ル所アルベシ。
須ラク公平ノ眼ヲ以テ讀下セラレヨ。

王大臣等苦笑 諾。

朝鮮事件ト清廷ノ杞憂

原

敬

吳大徵ノ朝鮮行及ビ朝鮮増兵ノ件ハ李ノ異論ニヨリテ中止セシ趣最モ信用スベキ筋ヨリ探聞セリ、然ルニ十六日夕六時過、朱湛然ヲ以テ李ヨリ我等ニ面會ヲ申込來レルニ付、同夜八時李氏ヲ訪問セシガ、同日ハ此度派遣スベキ吳大徵ヲ我等ニ紹介スル爲メニテ、(去六月吳氏ニハ兩度面會セリ)種々談話シタリ、大要左ノ如シ。

李氏ハ過日面會セシ時ト同様ニ、平和ニ結局ヲ望ム旨ヲ述べ、且ツ日本ヨリ朝鮮ニ増兵アルベシトノ説アレドモ、右様ノ事アリテハ世間之耳目ヲ驚カスノミナラズ、却テ兩國兵ノ間ニ滋事ヲ増スノ恐レナキニ非ラザレバ、願クハ右様之舉ナキ事ヲトノ意ヲ反覆縷陳セリ、依テ我等ハ夫ハ先般モ申述ベタル如ク、我等モ同意見ニテ、平和ヲ望ム事ナレバ、閣下ト我等トノ間ニハ固ヨリ異論ナシ、恐ラクハ我外務卿モ榎本公使モ皆ナ同様ナルベシト信ゼリ、然ルニ閣下ノ所謂平和ニ結局トハ如何様ニセラル、事ナリヤト推問セシニ、夫ハ吳欽差ガ彼地ニ

赴キ、事實取調シ上ナラデハ如何様トモ申サレズ、乍去平和ノ主意ニテ互ニ穩便ニ處置ヲ致シタシ、予ハ此報ヲ得ルヤ否ヤ在朝鮮ノ我官吏ニハ靜謐ニ致スベキ旨嚴令ヲ出セリ、又吳欽差ハ一兵ヲモ帶ビズ、直ニ彼地ニ出發スル積リナリ、己上ノ事ハ外務卿並ニ榎本公使ニモ報告アリタシ云々。

又吳大徵ヨリ、予ノ勅令ヲ奉ジテ朝鮮ニ赴キ、此度ノ事件ヲ取調べ、暴徒ヲ處分シ、朝鮮ノ内政ヲ改革シ、若シ清兵ニ不良ノ事アレバ夫ヲ嚴重ニ處分スル見込ナリ、又徒ラニ紛擾ヲ増ス事ヲ恐ル、ニ付、一兵ヲモ帶ズ、又向後モ増兵ハ致サヌ積ナリ、又予ノ身分ニ對シテ附屬スベキ兵モアリ、又隨行ヲ望ム者モアレドモ、予ハ皆ナ之ヲ退ケ全ク單身上途ノ見込ナリ云々。

李氏ハ又竹添公使ノ惡口述ベタレドモ、我等ヨリソレハ閣下平和ヲ望マル、ニモ似合ハヌ事ナリ、且ツ竹添一己ニテ萬事ヲ處分スルモノニモ非ラズトノ意ニテ之ヲ駁シタリ。又李ハ頻ニ朝鮮ハ屬國ユエ云々ト（此前面會ノ節モ同様）述ベタレバ、是モ我等ヨリ屬國云々ニ關シテハ我等ハ大ニ異論アリ、乍去此懇親ノ席ニ於テハ論ズルヲ好マズト述ベタルニ、李氏ハ稍々語ヲ翻シ、屬國ナリトテ清國ノ版圖トイフニモ非ラズ、萬國公法之所謂半主國ニ類ス云々ト言ヒタレバ、夫モ異ル所アリ朝鮮ハ獨立國ト信ジテ可ナリト駁シタリ。其後此屬國論ハ熄ミタリ又日

兵王宮ヲ護衛セシハ不當ナリ、國王モ國王ナリ、竹添モ竹添ナリト彼是申タレバ、是モ我等ヨリ國王ノ依頼ニヨリテ王宮ヲ護スルハ世界萬國何レノ國ニテモ不當ナリト論ヲ聞カズト駁セシニ、此度ハ國王ハ宜シカラズ、又朝鮮ハ官吏モ人民モ仕方ナキ者共ナリトノ說ニ語ヲ轉ジタリ。

要スルニ同夜ノ長談ニヨリテ彼等ノ意見ヲ判定スルニ、日本ヨリ嚴重ニ談判アルベシト深ク憂慮スルニ相違無ク、而シテ早ク事ヲ終ランガ爲メニ、暴徒ト清兵トヲ處分シテ以テ其申譯ニセントスルノ色ハ充分ニ見エタリ。且ツ彼等ハ佛ト同時ニ起リタル事ナレバ日本ニ激抗スルコトノ氣力ハ毫モ無ク、只ダ早ク結局ヲ望ムニ急ナルノミ。乍去彼等ノ本心ハ眞實ニ日本トノ交渉ヲ重ンジテ起見セシニハアラズ、一時日本ヲ籠絡シテ事ヲ收メントスルノ内心ハ充分ニ看破セラレタレバ、縱令本邦ニ於テ寛大ノ處置アリタリトテ、彼ハ決シテ恩トハ思ハズ、却テ甘ク籠絡セリト冷笑スル事是亦眼前ニ顯ハル。此等ノ事實ヲ直チニ清政府ノ意見ナリト判定ハ爲シ難キモ、大概一班ヲ知ルニ足ルモノアリト信ズ。

其後去十八日朱湛然ヲ以テ李氏ヨリ吳大徵ハ明後二十日早朝ニ出發ストノ通知アリタレバ、十九日午後吳大徵ヲ訪問ノ上、竹添公使ヘノ書信ヲ托シタリ。同日種々ノ談話モ交セシガ要スルニ彼ハ前日ノ主旨ヲ再述スルニ過ギズ。

翌二十日清國ヨリ五百ノ兵ヲ朝鮮ニ派遣セリトノ風説ニ付同日李氏ヲ訪問ノ上之ヲ訊ネタルニ、右ハ全ク誤聞ナリト判然セシモ、李氏ノ申スニ、吳大徵ハ護衛兵トシテ五百ノ兵ヲ山海關ヨリ引率スベク、又右ノ一行ハ貳艘ノ軍艦ニテ渡航スルトノ事ナレバ、我等ヨリ前日ノ明言ニ齟齬スル旨ヲ述ベタルニ、彼ハソレハ支那ノ事ユエ一兵モ帶ビズト申シテモ其人ニ屬スル護衛丈ケハ伴フ事ニテ、現ニ予ガ保定府ニ赴クモ全ク一兵ヲモ帶ビズト申ナガラ、矢張り二百ヤ三百ノ親兵ハ召連レシナリ、支那ハ當分他國ノ如ク輕便ナラズ、馬鹿々々シキ儀式アリナドノ託言ヲセシ上、實ハ北京ヨリハ三千ノ兵ヲ吳大徵ト共ニ可送トノ内命有タレドモ、予ハ斷ジテ其不可ヲ陳シ、全クノ護衛ノミニ止メタリ云々ト述ベタリ。

吳氏ノ護衛五百トハ一兵モ帶ビズト李鴻章並ニ吳大徵ノ繰返シ明言セシ處ト凡テ反對シ、殊ニ少許ノ兵ナレバ兎モ角モ、五百即チ一黨ノ兵ヲ伴フトハ言語同斷ノ次第、彼ハ俄ニ其議ヲ變ジタルカ、又ハ最初ヨリノ企ナルカ、孰レニセヨ不都合千萬ナリ。是ニテ彼等ハ我ヲ瞞着セリト喜ブベキヤモ計ラレザレドモ、我ニ於テハ他日ノ一口實ニモナルベシト信ジタレバ、我等ハ其事實ヲ確カメタル迄ニテ、強テノ辯論ヲ爲サズ。乍去此件ハ緊要ノ事ト信ズ、又李氏ヨリ凌雲號ノ來報ナリトシ聞知シタル洪英植及ビモルレントルフノ二氏使節トシテ本邦へ出發云々ノ風説モアリシガ、且ツ是ハ李氏ノ内意ニ出ル事ナルベシ、又此回ノ談話ニ據レバ、彼ハ我ニ秘

シテ朝鮮ニ向テ充分ノ處置ヲナサントスル企ナルベシト思惟セラル。

一千六百ノ兵ヲ朝鮮ニ送リタル由外國人出ノ電信ニ見エタレバ李ニ面談直ニ尋ネタルニ、彼ハ最初拙官ニ内話セシトコロニ反スルノミナラズ、一昨日ノ談話ニモ齟齬セル左ノ言ヲ吐露セリ。

予ノ兵ヲ送ラヌトハ増兵セヌ事ヲイフ、而シテ縱ヒ一兵ヲモ帶ビズトイフトモ、清國大官ニハ通例附屬スベキ護衛兵伴ウモノナリ、殊ニ吳氏ノ如キハ彼ノ地ニテ夫々處分又ハ取調等ノ必要モアレバ四百人ノ護衛兵ヲ召連ル、ナリ、五百人ニハアラズ、又吳ハ貳艘ノ軍艦ニテ渡航スル事ヲ熄メ、旗昌洋行ノ商船ヲ雇ヒテ乗ル事ニ決シ、既ニ其商船ヲモ雇入レタリ、右ノ外ニ吳氏ヨリ先キニ別ニ三百人ノ兵ヲ三艘ノ軍艦ニ載セテ送ル筈ナリ。是ハ馬山浦ニ止マリ吳氏ノ衛兵并ニ駐韓兵ノ食料其他ノ用辨ヲ謀ル都合ナリ。

予ハ此度ノ件一切ノ處分ヲ内命セラレタリ、予ノ考ニテ萬事取極マル故、予ノイフ所ニハ僞ナシ、予ハ法國トノ關係ノ如ク小ヨリ大ニ至ル事ヲ恐ルレバ、最初ヨリ云フ通り平穩ノ處置ヲ望メリ、依之軍艦モ兵隊モ皆馬山浦(先キニ清兵ノ駐在セシ地ナリ)ニ行クベシ。仁川ニ行クナカレト命令セリ。同地ニハ日本兵モ軍艦モアレバ、自然間違ヲ起サズトハ斷言出來ザレバナリ、又此後ハ決シテ兵隊ヲ送ラズ、此度送リタル分トテモ前陳ノ通り全ク護衛ノミニテ他ニ考アルニ非ラズ、云々。

右李氏ノ言ハ是ニテ三回言語ニ相違ヲ發見セリ。即チ前陳ノ通り最初ハ一兵ヲモ送ラズト云ヒ、後ニハ五百ノ兵貳艘ノ軍艦ト云ヒ、最後ニハ四百ノ衛兵ノ外ニ三隻ノ軍艦ト三百ノ兵ヲ先發セシムトノ言ナリ。彼ノ意中少シク疑ナキヲ得ザレバ、種々談話ノ模様ニヨリテ篤ト之ヲ推考スルニ、東京駐在ノ清國公使及ビ領事又ハ清國雇ノ外國人等ヨリ種々ト報告ヲ得テ、平穩ニ結局困難事ニヨルト大事ニ至ルベシトノ杞憂ヲ抱キ、追々ニ其施設ヲ變ジタル事ト判定ス。尙約言スレバ恐懼ノ餘リニ所謂疑心暗鬼ヲ生ジテ此等ノ事ヲナス者ナルベシ。其他ノ景況ニ至リテハ去十七日李吳兩氏ノ談話ニ大異ナキガ如シ。

右ニ付千六百ノ兵云々ハ無論虛説ト判明セルモ、前陳ノ談話ハ今後多少ノ御參考トモ成ルベシ。尤モ同日我等ヨリハ清國ニ於テ兵ヲ朝鮮ニ出サルル事ハ貴官ノ御意見ニ在ル事ナガラ、懇親上打明ケテ申セバ、此際眞ニ平和ヲ望マル、ナラバ、兵ヲ出サル、事ハ宜シカラズト信ズ。若シ貴國ニテ多數ノ兵ヲ護衛ニ送ラルレバ、我國ニ於テモ勢ヒ送ラザルヲ得ズ、而シテ貴我互ニ兵ヲ朝鮮ニ出スコトハ獨リ世上ノ物議ヲ醸スノミナラズ、兩國兵ノ間ニ再ビ紛擾ナキコトモ亦保シガタク、遂ニハ意外ノ點ニ至ランモ亦知ル可ラズトノ旨ヲ縷陳セシニ、彼ハ悉ク尤モ至極ノ事ナリトテ同意ヲ表シタレドモ、然ラバ送兵ハ見合ハスルト云フマデニハ至ラズ、却テ送兵ニ付テハ種々ノ托言ヲ申タル程ナレバ、彼ノ心中ニ一疑團アル以上ハ致方ナシト思惟セリ。

以上ハ今日迄ノ事實要略ナリ。惣ジテ此度ノ件ニ關シテハ清國ノ意見ハ激抗政略ニハ非ズ、他マデモ平穩ニ結局ヲ希望スルコト最モ急ナルハ明白ナレバ、此後談判ノ時ニ至リテモ甚ダシキ抗抵ハナカルベシト信ズ。且ツ李氏ハ種々ノ報告ヲ得テ、本邦ニ對シ目下多少ノ疑念ヲ抱キ居ルモノ、如クナレドモ、其全體ニ於テハ頗ル杞憂ヲ存シ、佛ノ件モ最初ヨリ予ニ委任アラバ如此大事ニハ至ラセマジキモノヲトマデ陳述セリ。且同人從來ノ主義ニ於テモ、又目下主戰黨ヲ壓却セラレタル勢威ヲ快復スル一家自身ノ策略ニ於テモ、平和手段ヲ主トスル事ハ云フマデモ無ク、而シテ同人果シテ一切ヲ處分スベキ内命ヲ受ケ居ル事ナレバ、此際談判ハ決シテ本邦ノ不利ニ歸スル事ハ有ルマジト現下ノ情況ヨリ推測セラル。

將又清官ニ對シ我等ノ應接ハ何時モ穩和ヲ主トシテ、是迄ト毫モ替リタル形跡ヲ示サザレハ勿論、常ニ李氏等ノ言ニ唱和シテ穩便ヲ主トスル様陳述セリ。努メテ穩便ヲ主トスルモ、他日如何成リ行クカハ固ヨリ豫定シ難ク、殊ニ我等ノ一私言ハ何等ノ効力モ無カル可キハ勿論ナレドモ、彼等ニ於テハ是モ幾分カ杞憂中ニ慰藉ヲ存スル如クニ見ヘタリ。

明治十七年 十二月廿六日

榎本李與談話筆記要略

一千八百八五年四月八日午後八時天津直隸總督衙門ニ於テ榎本公使李鴻章ト談話筆記要略

榎本 昨日ノ議席ニ於テ中堂ハ總署ヨリ伊藤大使在韓清將處分ノ件ハ申越タレドモ、清兵日本人民ヲ殺害ノ件ハ申越サズト述べラレタリ、其節伊藤大使ノ述べラレシ通り、大使ハ王大臣等ニ科條ヲ分テ談ゼラレザリシト雖モ、韓兵ノ事罰將ノ事並ニ清兵犯罪處分ノ事ヲ判然説明セラレシノミナラズ、猶ホ其他ノ事柄モアレドモ是ハ主任者ト語ルベシト述べラレタリ。我方ニハ此ノ如キ筆記アリ。(英文ノ筆記ヲ出シ羅豐祿ニ示シテ李氏ニ聽カシム)

李 該件ハ今日篤ト取調べシニ、總署ヨリノ書翰中ニハ見ヘザリシ、附屬ノ對話書中ニ於テ見出スベシ。只貴方ノ筆記程詳細ナラザルノミ。

榎本 總署ヨリノ對話中ニ記載アレバ可ナリ、然レドモ我方ノ筆記ヲ騰寫シテ總署ヘ送ラレン

ト欲セバ借スモ妨ナシ。

李 借用スルヲ要セズ。

是レヨリ榎本公使總署ニ於テ三日間抗論セシ事、並ニ榎本ハ李使ノ責任ヲシテ成ル丈ケ輕カラシメント欲シテ王大臣等ヲ頗ル困却セシメン等ノ内話ニ及ブ、李使笑テ之ヲ領ス、是ニ於テ榎本ハ暫時黙止シテ李氏ヨリ昨日ノ談判ニ對シタル事柄ヲ言ヒ出サシメント欲シテ待チタルニ、李ハ固ヨリ榎本來訪ノ本意ハ前件ニ止マラザルヲ察知セルヲ以テ、彼ヨリ敢テ口ヲ開カズ、相持シテ語ラザルコト良ヤ久シ。

榎本 昨日ノ談判ニ於テ双方ノ論意ハ既ニ判然セシニ似タリ、就テハ復タ入り込ミタル談論ヲ要セザルベシ。次會ニ於テ中堂ハ我大使ノ請求並ニ協議ノ案件ニ對シテ諾スルノ二字ヲ陳セラル、ニ止マルベシ。抑モ本使今般ノ地位ハ兩全權ノ中間ニ在テ妥議ヲ幫助スベキノ務アリ加フルニ中堂ハ相知ノ日久シキヲ以テ中堂モ其内意ヲ話シ易カルベシ。

李 實ハ貴言ノ如シ。

榎本 大使ハ此地ニ在テ曠日スルヲ得ザル身柄ナレバ、其提出セシ案件ニ對シ中堂ノ諾了セララル、歟、或ハ全棄セラル、歟ヲ可成速ニ知了セントノ望アリ。中堂若シ其所見ヲ語ラレナバ本使ハ今次談判ノ成否ヲ推測スルヲ得ベシ。

李 余ハ伊藤大使ノ請求(デマンド)ヲ全棄セザルベク、又全諾モセザルベシ。
榎本 其詳ヲ聞クヲ得ベキヤ。

李 請求中ノ一箇條ヲ諾スベキノミ、貴使ハ知ラル、ナルベシ、前日貴外務卿ハ我徐公使トノ
談判ニ於テ、韓兵ノ件ヲ提出セラレタリ。徐公使ハ直チニ其旨ヲ總署並ニ余ニモ電知セリ、
總署ハ直チニ電令ヲ以テ撤兵ヲ否ミ、徐公使ヲシテ之ヲ貴外務卿ニ轉達セシメタリ。

榎本 本使ハ更ニ知ラザル事ニ係ル。

但本文ノ事ハ曾テ英國故バークス氏ヨリ側聞セシコトアリト雖モ、本省ヨリハ公私共
ニ文通ナシ。

李 貴使御承知ナクバ伊藤大使ハ必ズ御承知ナルベシ。

榎本 大使ノ知レルヤ否ハ知ラザレドモ、今次日清交渉事件ハ伊藤大使コソ其主任者タリ、我
外務卿ガ徐公使ト閑話ノ序ニ撤兵ノ事ヲ語ラレシナラン。

此時鄭永寧側ヨリ李ニ語テ曰ク、其時通辨セシ者ハ余ナリ、外務卿ハ徐公使ト閑話ノ
時、日清ノ交渉ヲ保セン爲ニハ何レ撤兵ノ事ハ貴政府ヘ掛合フ積ナリト語ラレシノミ

李 井上外務卿ガ徐公使ニ向テ語ラレシハ撤兵ノ外ニ別ニ提出セラレシ問題ナシ。而シテ總署
ハ此一案ヲモ諾セザリシ、今伊藤大使ハ撤兵ノ外ニ猶二個ノ案件ヲ提セラレタリ、此件ハ是

今度創テ承ハルコトニ係ル。

榎本 外務卿ト徐公使トノ對話ハ閑話ノ序ニ出タルコトナレバ、其他ヲ語ラザリシモ亦宜ナリ
伊藤大使ハ之ニ異ナリ今次ノ案件ヲ公談スルノ特簡全權大使ナレバ、我ヨリ貴國ニ請求スル
案件ヲ詳述セラル、ハ當然ナリ。既ニ本使ガ昨日ノ議席ニ於テ陳述セシ如ク、我在韓ノ人民
清兵ノ爲ニ多人數殺害セラレシ電報ハ本使ヨリ正シク總署大臣ヘ手渡セリ、即チ客歲十二月
十六日ニシテ、シカモ吳續兩欽差ノ韓地ヘ出立ノ前ニ在リ。況ヤ漢城ノ變ニ清將及ビ清兵ノ
所爲ニ就テハ我國ノ諸新聞紙及ビ他國ノ新聞紙ニモ記載セシコト一ニシテ足ラズ、徐公使東
京ニ駐劄シナガラ豈此等ノ件ヲ貴政府ニ報告セザルノ理アラシヤ、然ルニ中堂ハ伊藤大使ノ
提出ニ由テ始テ知りタリト稱セラル、ヲ得シヤ。

李 夫ハ全ク側聞セシコト無之ト云フニハアラズ、然レドモ是レ見ラレヨ、伊藤大使ヨリ示サ
レシ我兵犯罪證書中ニ、我兵ノ手ニ懼リテ殺害セラレシ確證トテハ一モナシ、皆口供者ノ推
測ニ止マルノミ。譬ヘバ福井以年老氣力不支至石橋傍倒地トアレドモ、地ニ倒レタル者ハ再
ビ起テ難ヲ避ケタルベシ、我兵ニ殺サレシトノ證ナシ。又奥川嘉太郎妻ノ所供ニ、俄然銃聲
數響人聲囂然須臾而止乃知是良人兄弟與收之輔之死斯也トアレドモ、是亦推測ニ過ギズ、如
何ゾ之ヲ以テ實證ト爲スヲ得ン。

榎本 死人ヨリ口供ハ取り難シ、又此口供書ハ辛フジテ難ヲ免カレシ者ノ口供ナレバ、他ノ刑事裁判上ニ用ユル口供書ノ如ク詳細ナル能ハザルハ察セザルベカラズ、我人民ノ死體四十、(内四人ハ兵士)ヲ仁川ニ於テ朝鮮官吏ヨリ受取リシハ事實ナリ、假ニ殺害セラレシ者ナシト做ストモ、本多ノ妻ヲ汚辱セシ一條ニテ既ニ重大ノ犯罪タリ。

李 伊藤大使ハ我方ヨリ出ス證書ヲ以テ不充分ノモノトシテ擯斥シ、貴方ノ證書ノミヲ以テ實據トセラレドモ夫ハ公平ヲ缺ケリ。

榎本 昨日ノ議席ニ於テ在韓貴將ノ所爲ヲ防禦スル中堂ノ陳述セラレシ四點ハ、伊藤大使逐條辯駁セラレ、又清兵暴害ノ件ニ對シ、吳大徵ガ其證ヲ得ザリシトノ語ニ、夫ハ我方ノ過失ニハ非ズト答ヘラレシヲ中堂ニハ了解セラレシナラン。即チ之ヲ云ヒ返セバ、吳大徵不調法ノ致ス所ナリトノ意ナリ。

李 我方ニテハ偏口ニシテ併モ不充分ナル證據ヲ以テ人ヲ罪スルヲ得ズ。我方ノ調ニハ斯ル罪ヲ犯セシ兵士ハ一人モナシト吳續兩欽差ノ屈アリ。抑モ客歲漢城ノ變竹添公使ノ所業ハ朝鮮ノ社稷ヲ顛覆セント欲セル亂黨ノ奸計ヲ幫助セシニ外ナラザルハ皆人ノ知ル所ナリ。予ハ此事ヲ當面ニ伊藤大使ニ語ルヲ憚カル、只貴使ニ向テ直言スルノミ。試ニ北京ニ於テ同様ノ所業ヲ爲ス公使アラバ貴使ハ何等ノ見解ヲ下サル、ヤ。

榎本 否々竹添公使ノ所業ハ國王ノ請ニ應ジタル者ニテ、我等間然スベキナシ。中堂猶ホ異論アラバ何ゾ議席ニ於テ伊藤大使ニ辯駁セラレザルヤ。本使ハ只全權ニ付テ一言セン、抑モ一國人民同志ノ犯罪ハ其國ノ裁判所ニアリテ之ヲ裁決スト雖モ、國ト國トノ間ニ起リシ事柄ハ自國中ノ事ヲ處スルヲ以テ例視スルヲ得ズ。各國ヲ管轄スベキ普通ノ裁判所ナルモノ之レナシ。

李 伍廷芳ハ英國ニ於テ法學士ノ免狀ヲ得タル者ナリ。伊藤大使ヨリ示サレシ口供書ノ英譯アラバ渠ニ借サレタシ、予ハ渠ヲシテ一閱セシメント欲ス。

榎本 諾、中堂ハ伊藤大使請求中ノ一個條ヲ諾セント稱セラレルリ、何ヲ指シテ云ハル、ヤ。此時李氏本使ノ顔ヲ熟視シテ發言セズ。

榎本 恐ラクハ撤兵ノ一事ナラン。

李 然リ。

榎本 是レ請求ニアラズ、協議ナリ。請求ハ罰將ト殺害ノ二件ナリ。撤兵一件ニ至テハ是レ互ニ交誼ヲ將來ニ固フセン爲メノ一協議ニシテ、之ヲ議スルヲ以テ讓歩ト看做サル、ハ左ヘリ此一件ヲ議スル位ノ役目タランニハ我國何ゾ伊藤大使ヲ特簡センヤ。

李 伊藤大使ガ來清セラル、モ貴使ガ負擔セラル、モ我方ノ諾否ニ於テハ一ナリ。抑モ貴國モ

中國モ共ニ獨立國タリ、貴方ハ貴方ヲ以テ自ラ是ナリト爲シ、中國ハ中國ノ所爲ヲ以テ是ナリト認メ居リ、互ニ相強ユルヲ得ズ。撤兵ノ件ノ如キ總署ハ擯斥セシ所ナリト雖モ、予ハ獨斷ヲ以テ其責ニ任ジ、此件丈ケハ商議セント欲ス。是レ一ハ伊藤大使ノ任ヲ輕クシ、一ハ兩國保和ノ懇情ニ出ヅルモノナリ。

榎本 中堂眞ニ其所見ナレバ次會ニ於テ其旨ヲ斷言セラルベシ。本使以爲ラク、今次ノ談判ヲシテ撤兵一事ノ承諾ニ止マラシメバ、大使ノ使命ハ不調トナルベシ。大使ハ不止得歸國シテ復命ノ外ナカルベシ。事此ニ至ラバ兩國ノ平和ヲ保スルニ甚ダ難カルベシ。是レ本使ノ憂フル所ナリ。

李 撤兵ヲ承諾スルハ中國貴國ト保和ヲ重ンズルノ厚意ニ出ヅ。然ルニ大使ニ於テ不満足ナリト看做シ歸國セラル、ニ於テハ是非ナキ次第ナリ。我ハ戰爭ノ用意ニ取掛ル外手段ナシ。

此時李ヨリ伍ニ私語セシ言ナリトテ鄭書記官曰ク、李ハ伍ニ對シテ中國ハ佛ニ向テスヲ戰ヲ開キタルニアラズヤト云々。

榎本 夫ハ貴方ノ御勝手次第ナリ、只惜ムラクハ我 皇帝ノ御意モ全ク之ガ爲メ烏有ニ歸センコトヲ。

李 御同様ナリ、貴使ハ猶ホ此外ニ御内話アリヤ。

榎本 否。

以上榎本公使自ラ筆記スル所ニ係ル伊東大書記官更ニ之ヲ英文ニ譯ス。

明治十九年三月廿六日寫之

日清交際沿革説

日清交際ノ沿革ヲ略説スルニ、明治四年ニ我政府ノ始メテ伊達大藏卿ヲ使節トシテ兩國ノ條約ヲ締結スルコトヲ求メシニ、總理衙門ハ兩國ノ通商ハ舊慣ニ依リ商民ニ任カスベク、更ニ締約ヲ要セズトノ言ヲ以テ我要求ヲ拒絶セントシタリ。此時偶々曾國藩天津ニ在リテ李鴻章ト議ヲ協セ、日本ト約ヲ結び、唇齒ノ交ヲ固クシ、以テ東洋共同ノ利益ヲ謀ルベシト云フノ説ヲ以テ清國政府ニ勸告シ、清國政府ハ僅カニ其説ヲ容レ、乃チ李鴻章ニ任ズルニ日清定約ノ全權ヲ以テシ、爾來李鴻章ハ専ラ日本ニ於ケル交際ノ事ヲ擔當シタリ。

伊達氏結約ノ使命ヲ遂ゲ還テ上海ニ到ル頃ニ、我政府ハ或ル外國公使ノ説ニ動かサレ、伊達ノ結ビタル條約ノ第二條ヲ不當ナリトシテ批准ノ前ニ更ニ之ヲ改正センコトヲ試ミ、別ニ使員ヲ派シ、天津ニ到リ李鴻章ニ面議セシメタルニ、李ハ墨痕未ダ乾カザルニ遽ニ前議ヲ變ズルコト能ハズト云フノ説ヲ以テ之ヲ謝絶シタリ。此ヲ日清交際間ノ違言ノ第一トス。

其後六年ニ副島外務卿ハ全權大使トシテ條約批准交換ノ使命ヲ奉ジ、北京ニ到リ謁見ヲ終ヘ歸朝スルニ方リ、通辯官鄭永寧ヲシテ總理衙門ニ到ラシメ、朝鮮、臺灣、澳門ノ三事ヲ問ハシメタルニ、總理衙門ノ大臣ハ其不意ノ問題ニシテ且ツ副島ノ使命ヲ以テ照會セルニアラザルヲ以テ、一時偶然ノ談話トシテ即時ニ一應ノ答言ヲナシタリ。然ルニ副島ノ歸朝スルノ後未ダ一年ヲ經ザルニ我國ハ陸兵ヲ發シテ遽ニ臺灣ニ到リ、琉球難民ノ爲ニ讎ヲ復スルノ名義ニ據リ、臺灣ノ蠻民ヲ攻伐シタリ。清國政府ハ不慮ノ變ニ驚キ、條約第一條ニ據リ侵越疆土ノ責ヲ以テ我國ニ問ハントセンニ、我政府ハ前日副島ノ談判ニ於テ既ニ臺灣ハ化外之民ナル答議ヲ得タリトノ説ヲ以テ之ニ答ヘ、遂ニ大久保大使北京ニ到リ往復論辯ノ末、清國政府ハ五十萬テールヲ撥支シテ其局ヲ結ブニ至レリ。此ヲ日清交際ノ第二ノ違言トス。

十二年ニ琉球藩ヲ廢シテ沖繩縣トシ、該藩兩屬ノ舊慣ヲ禁止シタリ。清國ハ其封冊朝貢ノ藩國ヲ滅絶スト云フヲ以テ我レニ照會シ、復封ノ處分ヲ求メタリシニ、我政府ハ廢藩置縣ノ舉ハ我内治ニ係リ他人ノ干涉ヲ容レズト云フヲ以テ之ヲ拒絶シタリ。其後互相讓歩ノ便法ヲ以テ突戶公使ヲシテ談判ヲ試ミシメシニ、未ダ成議ニ至ラズシテ總理衙門ハ其約案ニ調印スル事ヲ拒ミタリ。此ヲ日清交際ノ第三違言トス。

日清ノ締約歴年未ダ久シカラズシテ不幸ニシテ屢々事端ヲ生ジ、兩國ヲシテ互ニ相凌駕スルノ跡アラシムルハ實ニ各國ニ其比類ヲ見ザル所ニシテ、而シテ兩國ノ官民ヲシテ頻リニ不快ノ

感ヲ重ネ、一年一年ヨリモ長シ。以テ今次朝鮮京城ノ變ニ至テ兩國ノ怨氣ハ殆ンド其極點ニ達シタル者ノ如シ。

李鴻章ハ實ニ最初日本ニ對シ締約好和ヲ主張セシ者ナリ。臺灣ノ役ニ於テ彼レハ專ラ主戰ノ說ニ抵抗シ、總理衙門ノ讓歩和議ヲ贊成セシ者ナリ。然ルニ我琉球ノ廢藩ノ處分アルニ及デ遽ニ一轉シテ主戰ノ說ヲ執リ、日本人ノ詐僞ニ長ジ侵略ヲ好ムコトヲ唱へ、朝鮮ノ守ヲ固クシ、以テ我國ノ併吞ヲ防ガントシ、琉案ノ成議ヲ中阻シ以テ疎外ノ意ヲ示シタリ。今日ニ在テ彼レハ日本ニ於ケル政略ハ兵力ニアリト云ヒ、專ラ西ニ和シテ東ニ戰フノ說ヲ執ルト云フ。嘗テ柳原公使ノ七年ニ於テ天津ヲ通過シ李鴻章ニ面會セシ時、彼レハ其始メニ日本ト締約スルノ說ヲ主張シタルニ、未ダ幾バクナラズシテ日本ノ爲メニ侮弄サレタル事ヲ痛恨シ、流涕噴沫シテ談話シタルコトアリシ。前後ノ事情ヲ觀察スル時ハ前說或ハ李ガ心事ヲ誣ルモノニアラザルガ如シ。

故ニ若シ今日ニシテ清佛ノ事件ナカラシメバ、朝鮮ノ事變ヨリシテ日清ノ間ノ決裂ハ既ニ避クベカラザルノ事ナリシナラン。今度ノ談判ニ於テハ清國ハ必ズ充分ノ讓歩ヲナスナラン。而シテ日清ノ間ノ危險ナル形勢ハ爾後益々切迫ヲ加フルトモ、今度ノ談判ノ結局セルガ爲メニ將來ノ平和ヲ保證スベカラズ。却テ早晚彼レヨリ起テ我レニ凌駕スルノ事アルハ必至ノ勢ナルベシ。

シ。

熟々思フニ今日ハ以テ戰フベク、又以テ和スベキノ時ニシテ、再ビ得ベカラザルノ機會トス何トナレバ清佛ノ事件ハ清國ノ爲メニ其國脈ニ關スル非常ノ厄運ニシテ、恩怨共ニ例外ノ感觸ヲナスベキ時ナレバナリ。清國人ノ胸中ニ日佛ノ密約アルヲ疑ヒ、朝鮮ノ事變ヲモ併セテ其一部ナリトスルニ至ル、若シ我國ノ朝鮮ノ事變ニ於ケル談判ハ平穩ナル事ヲ憚ラズシテ、剩サヘ時宜ニヨリ清佛ノ交戰ニ向テ局外中立ヲ布告スベシト謂ハンニハ、清國君臣ハ其推測ノ外ニ出ヅルナルベシ。此機ニ乘ジテ我好和ノ誠心ヲ示明シ、日清兩國十年ノ積怨ヲ消シ、永久ノ和平ヲ保チ禍ヲ轉ジテ福トスルハ此一舉ニアリ、此レヲ失フベカラザルノ機會トス。

然ト雖モ事若シ平凡ニ出デバ、僅ニ一時ノ平和ヲ得一事ノ結局ヲ得ルニ止マリ、以テ我が好和ノ精神ヲ彼レノ腦漿ニ感通セシムルニ足ラズシテ毫モ大局ニ補ナカルベシ。譬ヘバ貴價ヲ以テ賤物ヲ買フガ如シ、深ク惜ムベキニアラズヤ。

廟堂ノ君子大局ヲ達觀シ時機ヲ洞見ス、必ズ神算ノアルアラン。

類纂 朝鮮交渉資料 上卷 終

秘書類纂 朝鮮交涉資料 上卷

人名索引

(イ、中)

井上良馨 一、四、
 井田讓 五二、
 飯田俊介 八四、
 井上毅 八五、三〇二、三三九、三四五、三四六、三五〇、
 三五二、三五九、三九三、三九四、三九五、三九七、四八一、
 四〇一、六三四、七二四、
 井上馨 一一五、一三〇、一四四、一七六、二二四、二二七、
 二二三、二四九、二五一、二六四、二六八、二七八、二八六、
 二八八、二九四、二九六、三〇一、三〇三、三〇三、三〇三、
 三二九、三三〇、三三一、三三三、三三四、三三八、三五六、
 三五八、三五九、三六九、三八四、三八六、三八八、三八九、
 三九一、三九八、四〇〇、四〇三、四〇七、四三一、四三四、
 四三五、四三七、四七四、五五四、五五五、五七四、五七五、
 五七六、六五七、六九八、七二三、七一九、七二二、七三四、

索引

引

伊藤博文

一三七、三五一、二六四、二六八、二七八、二八六、
 二八八、二九四、二九五、三三六、三三七、四六八、四七一、
 四七三、四七三、四八一、四八八、五〇三、五二一、五四三、
 五四四、五七一、五七二、六〇一、六三四、六七三、六七三、
 六七四、六七五、六七七、六七八、六八一、六八二、六八三、
 六八四、六八五、六八六、六八七、六八九、七〇〇、七〇一、
 七三二、七三四、七三五、七三六、七三七、七三八、
 尹泰駿 二六五、二六九、二七一、二八三、二八四、四三三、
 四三九、四三〇、四三五、四四四、四五一、四五四、四五八、
 井上角五郎 二六八、二七八、二七九、二八一、二八六、二八七、
 四四三、四五四、

尹泰駿

井上角五郎

茨木惟昭

飯島碩太郎

磯上百太郎

磯林眞三

尹致昊

尹景完

尹景純

尹泳觀

尹雄烈

伊東巳代治

一

五四三、五四四、五七〇、五七二、六〇一、六三四、七三九、

(口)

ローゼン 一七五、

(ハ)

花房義質

一五五、一六六、二一八、二三五、二六六、二八八、
二九九、一四九、一七七、一七八、一七九、一八〇、一八一、
一八六、二四五、二四七、四三〇、

パロン、コルフ

一五一、

馬建忠

二四七、

原敬

三三九、四七四、四七五、四七六、六七六、七二五、

ハクス

四四三、四四五、

白樂雲

四五八、

パークス

七三四、

(ホ)

朴護修

二、一三、一九、三三、四〇、四三、
六三、七三、一一一、

ポアンナード

九〇、九四、九五、一〇〇、一〇一、一〇五、
一〇九、一一一、一一三、一一五、一二五、一四二、一四三、

ホンブラン ト

二〇五、二一〇、二一一、二一二、二一四、二一五、二一六、
二二七、二三三、三三九、三三〇、三三二、

朴泳孝

一三〇、
二六九、三〇〇、二七三、二七三、二八三、二八六、
二九九、三〇〇、三三三、三七三、三九〇、三九一、四二二、
四三三、四三四、四三九、四三〇、四三二、四三五、四三六、
四三八、四四三、四四六、四四七、四五〇、四五三、四五五、
四五六、四五九、四六〇、四六一、四六二、四六三、四六五、
四六六、

朴定陽

二七六、

朴泳教

二九九、三〇〇、四二三、四二四、四六〇、四六五、

朴瀨陽

三〇〇、

穆麟德

三四二、三九九、三九九、四〇九、四三〇、四三六、
四四三、四四四、四四六、四四九、四五五、

朴奎鏞

三九七、

朴齊綱

四三九、四四二、四五六、

朴三龍

四五二、

朴應學

四五八、

ホーオート

四五九、

ボットレル

五四〇、

(ヘ)

ペルナド

二九八、三〇四、五五三

(ト)

董恂

六一、

トーマス

一三〇、

鄧承修

一三六、四八一、四八八、四九五、四九六、五〇〇、
五〇二、六七二、七二二、七二三、

富永軍吏

三七、

讀斯丁邊

七〇九、

(チ)

沈桂芳

六一、六四、六五、六六、六七、六八、
六九、七〇、七一、

沈葆楨

一三九、一四〇、
二六九、四五三、

趙寧夏

二七六、

張光前

二八〇、二八一、

趙準永

三〇〇、

趙東冕

三〇〇、

沈舜澤

三〇〇、三五八、三九〇、

索引

千葉泰治

三一五、

趙秉鎬

三四一、三四二、三四五、三五三、三五四、三五五、
三六一、三九九、四〇三、四〇七、四〇九、四一八、四二五、
四二六、

沈相薫

三九八、四五八、

陳樹棠

四五五、

趙敬憂

四六〇、

趙漢國

四六一、

(リ)

李中堂

五九、四八七、四九五、四九八、五〇〇、五〇四、
五二七、五六一、六五七、六七四、六七五、六七七、

李鴻章

一三六、一三九、二四七、二五九、二六〇、二六二、
二六四、四七三、四八五、四八六、四八七、五〇三、五〇四、
五〇五、五〇六、五〇七、五〇八、五〇九、五一一、五一一、
五一一、五二四、五一五、五一七、五一八、五一九、五二〇、
五二二、五二二、五二四、五二五、五二七、五二八、
五二九、五三〇、五三一、五三二、五三三、五三四、五三五、
五三六、五三七、五四一、五四二、五四四、五四五、五四六、
五四七、五五〇、五五一、五五二、五五四、五五五、五五六、
五五七、五五九、五六〇、五六一、五六二、五六三、五六四、
五六五、五六六、五六七、五六八、五六九、五七〇、五七一、

李會正 一七八、一七九、
 李奎遠 一七九、
 李祖淵 二五五、二七〇、二七六、二八三、二九八、四三三、
 四三九、四三六、四三七、四三八、四五二、五五五、四五八、
 五七二、五七三、五七四、五七五、五七六、五七七、五七八、
 五七九、五八〇、五八一、五八二、五八三、五八四、五八五、
 五八六、五八七、五八八、五八九、五九〇、五九一、五九二、
 五九三、五九四、五九五、五九六、五九七、五九八、五九九、
 六〇〇、六〇一、六〇二、六〇三、六〇四、六〇五、六〇六、
 六〇七、六〇八、六〇九、六一〇、六一一、六一二、六一三、
 六一四、六一五、六一六、六一七、六一八、六一九、六二〇、
 六二一、六二二、六二三、六二四、六二五、六二六、六二七、
 六二八、六二九、六三〇、六三一、六三二、六三三、六三四、
 六三五、六三六、六三七、六三八、六三九、六四〇、六四一、
 六四二、六四三、六四四、六四五、六四六、六四七、六四八、
 六四九、六五〇、六五一、六五二、六五三、六五四、六五五、
 六五六、六五七、六五八、六五九、六六〇、
 六六一、六六二、六六三、六六四、六六五、六六六、六六七、
 六六八、六六九、六七〇、六七一、六七二、六七三、六七四、
 六七五、六七六、六七七、六七八、六八九、七〇〇、七〇一、
 七〇二、七〇三、七〇四、七〇五、七〇六、七〇七、七〇八、
 七〇九、七一〇、七一七、七二七、七二八、七三〇、七三一、
 七三二、七三三、七三四、七三五、七三六、七三七、七三八、
 七三九、七四〇、七四二、

柳在賢 三九八、四五七、四五八、四五九、
 李戴戴 二九八、
 李戴元 二九八、三〇〇、三三三、四九八、
 李戴完 二九九、三〇〇、四六〇、四六一、
 李昌圭 二九九、三〇〇、四四二、四五八、
 李寅鐘 三〇〇、四三八、四三九、四四二、四四三、四四七、
 四五一、四五三、四五六、四五八、
 李熙正 三〇〇、
 李殷明 四三九、四五〇、五五一、四五八、
 李奎楨 四四二、四五八、
 李赫魯 四四二、四五一、
 李殷石 四四八、
 李圭真 四五〇、
 李圭完 四五〇、四五二、四五八、四五九、
 李鐘視 四五〇、四五二、四五八、
 李熙伊 四五二、四五六、
 李錫伊 四五二、四五六、
 李秉虎 四五八、
 李建英 四五八、

李戴冕 四六〇、
 李達昌 四六〇、
 李熙善 四六一、
 李戴純 四六一、
 李竣銘 四六一、
 李輔國 四六一、
 李輔國 四六一、

(才、子)

大山巖 四九、五〇、
 大久保利通 五九、一四〇、七四一、
 王爺 六九、八三、七二、
 王大 七二、七八、七九、八二、一四〇、一九〇、
 一九一、一九三、一九四、一九五、一九六、一九七、一九八、
 一九九、二〇〇、二〇一、二〇二、四七九、四八〇、四八一、
 四八二、四八三、四八四、四八五、四八六、四八七、四八八、
 四八九、四九〇、四九一、四九二、四九三、四九四、四九五、
 四九六、四九七、四九八、四九九、五〇〇、五〇一、五〇二、
 五〇三、五〇四、五〇五、五〇六、五〇七、五〇八、五〇九、
 五一〇、五一七、五一八、五一九、五二〇、五二一、五二二、
 五二三、五二四、五二五、五二六、五二七、五二八、五二九、
 五三〇、五三一、五三二、五三三、五三四、
 五三五、五三六、五三七、五三八、五三九、五四〇、
 五四一、五四二、五四三、五四四、五四五、五四六、五四七、
 五四八、五四九、五五〇、五五一、五五二、五五三、
 五五四、五五五、五五六、五五七、五五八、五五九、
 五六〇、五六一、五六二、五六三、五六四、五六五、五六六、
 五六七、五六八、五六九、五七〇、五七一、五七二、五七三、
 五七四、五七五、五七六、五七七、五七八、五七九、
 五八〇、五八一、五八二、五八三、五八四、五八五、
 五八六、五八七、五八八、五八九、五九〇、五九一、五九二、
 五九三、五九四、五九五、五九六、五九七、五九八、五九九、
 六〇〇、六〇一、六〇二、六〇三、六〇四、六〇五、六〇六、
 六〇七、六〇八、六〇九、六一〇、六一一、六一二、六一三、
 六一四、六一五、六一六、六一七、六一八、六一九、六二〇、
 六二一、六二二、六二三、六二四、六二五、六二六、六二七、
 六二八、六二九、六三〇、六三一、六三二、六三三、六三四、
 六三五、六三六、六三七、六三八、六三九、六四〇、六四一、
 六四二、六四三、六四四、六四五、六四六、六四七、六四八、
 六四九、六五〇、六五一、六五二、六五三、六五四、六五五、
 六五六、六五七、六五八、六五九、六六〇、
 六六一、六六二、六六三、六六四、六六五、六六六、六六七、
 六六八、六六九、六七〇、六七一、六七二、六七三、六七四、
 六七五、六七六、六七七、六七八、六八九、七〇〇、七〇一、
 七〇二、七〇三、七〇四、七〇五、七〇六、七〇七、七〇八、
 七〇九、七一〇、七一七、七二七、七二八、七三〇、七三一、
 七三二、七三三、七三四、七三五、七三六、七三七、七三八、
 七三九、七四〇、七四二、

奧義制

索引

一三七

應植來 二八一、
 面高俊一 三三三、三四四、三五五、三六六、
 小野寺直理 三五五、
 尾方惟善 三九九、
 奧川嘉太郎 七三五、

(ワ)

渡邊修 一五四、

(力)

郭壽 六一、六三、
 韓來穆 二七〇、四二九、
 韓圭稷 二七一、二七六、二七九、二八三、四三三、四三三、
 四三七、四三八、四五一、四五五、四五六、四五八、
 樺山資紀 三三八、三四三、三四三、
 河應善 四四八、
 ヨング 一三〇、四七三、
 吉田清成 一四五、一四六、一四七、一四八、一四九、一五〇、
 二九五、二九六、三三九、三九八、四三一、

(夕)

種田 政明
竹添進一郎

五、
六、二四七、二四八、二四九、二五五、二五六、
二五七、二五八、二五九、二六一、二六二、二六三、二六四、
二六五、二六八、二七三、二七四、二七七、二七八、二七九、
二八四、二八六、二八七、二九二、二九四、二九五、二九六、
三〇一、三〇三、三〇四、三〇五、三〇六、三〇七、
三〇八、三二〇、三二一、三三〇、三三二、三三三、三三四、
三三六、三三七、三三八、三三九、三四〇、三四一、三四二、
三四三、三四四、三四五、三五〇、三五二、三五五、三九七、
四〇〇、四〇五、四〇九、四一五、四二〇、四二二、四二三、
四三四、四三五、四三八、四三九、四四二、四四三、
四四四、四四五、四三六、四三七、四三八、四三九、四四〇、
四四一、四四二、四四三、四四四、四四六、四四七、四四八、
四四九、四五〇、四五三、四五四、四五五、四五七、四六一、
四六二、四六三、四六四、四六五、四六六、四六八、四六九、
五一二、五一三、五一四、五一六、五一一、五二二、五二四、
五二五、五二七、五二九、五三〇、五三三、五三三、五三四、
五三七、五三八、五四八、五四九、五五〇、五五三、五五五、
五五六、五六九、五八九、六四三、六四四、六四五、六四六、
六四九、六五〇、六五一、六五二、六五三、六五四、六六二、
六六九、

(ツ)

ツウツトム

四五四、四五五、

(ナ)

ナポレオン二世

二五六、

(ラ)

羅世煥
羅芳祿

三九九、
五〇三、五〇八、五一二、五二二、五二六、五三八、
五四四、五五六、五七二、六〇一、六三三、六三四、

(ム)

村上正積

三三三、三三七、四三八、四四一、四四八、四六二、

(ウ)

ウエド
宇川盛三郎
ウキルレズ

五七、五八、二五三、
一三三、二〇五、
七〇三、

(ノ)

野津鎮雄

四九、五〇、

索引

高島頼之助

七〇九、七二〇、七二三、七二四、七二五、七二六、七二七、
七三三、七三六、七三七、七三九、七四〇、
一三五、二四五、二四六、二四四、三三八、三四三、
三四三、三五〇、

田邊太一

一三八、二〇〇、

大 院 君

三四七、

武田邦太郎

三四五、三五九、

(レ)

黎 庶 昌

一四四、一四五、一四六、一四七、一四八、一四九、
一五〇、三三八、

靈 中 堂

七二〇、

(ソ)

曾我祐準

五〇、

曾 國 荃

三五九、二六〇、

宗 尙 吉

三四七、

續 昌

三九九、五〇四、五〇六、五一二、五二二、五二三、
五三六、五四〇、五四一、五四四、五五二、五六二、五六四、
五七二、六〇一、六三四、六五七、六五八、六七〇、七三五、
六六九、

(ク)

黒田 清隆

九、一五、一八、二三、二四、二五、
六〇、六三、八五、

栗野慎一郎

三〇二、三〇三、三三九、二二四、七二五、

國友直治

三七、

グラッドストーン

七〇四、七〇五、七〇六、

郡 王

七二二、七三三、七三三、

(ヤ)

山縣有朋

四九、

山本兼吉

三七、

(マ)

松岡幸喜知

三二七、

松 延 玆

三四五、三五九、

(ケ)

嚴 永 世

三九六、

慶 郡 王

四八一、六七二、六七三、

(フ)

フオンブランド 二五三、
フー ト 二六六、三九九、四〇五、四三二、五二八、五二九、
五五三、五五四、五九〇、

藤代市十郎 三二五、

古野辰三 三二七、

福 六七三、

フオン、スタイン 六九〇、

フィリップ二世 六九一、

(コ)

洪英植 二六九、二七一、二七三、二八三、二八五、二八九、
二九二、二九三、二九九、三〇〇、三〇三、三九〇、三九一、
四二二、四三三、四三四、四三九、四三五、四三六、四三七、
四三八、四四〇、四四七、四四八、四五五、四五八、四五九、
四六五、四六六、七一五、七二八、

吳兆有 二七六、二九八、四三三、四三四、四四二、四四三、
四六二、

吳益泳 二九九、

洪淳馨 二九九、

洪晋游 三〇〇、

兒島益謙 三二二、

榎本武揚 三三八、四七三、四七六、四八一、四八五、四八六、
四九二、四九三、四九八、五〇〇、五〇三、五二一、五三〇、
五三三、五三六、五四四、五五七、五五八、五七〇、五七二、
五七四、五七七、五九一、五九二、五九四、五九五、五九八、
五九九、六〇一、六〇七、六二六、六三八、六三四、六六三、
六七二、七二二、七二九、七三〇、七三二、七三三、七三三、
七三五、七六六、七三三、七三三、七三四、七三五、七三六、
七三七、七三八、七三九、

閣敬銘 四八、六七三、七三三、七三三、

(テ)

寺島宗則 一一三、一一三、五六、

鄭永寧 五六、六一、八二、七四一、

丁汝昌 三九九、

鄭行徵 四三九、四五八、

鄭蘭教 四三八、

鄭鐘振 四五八、

(ア)

相澤勇吉 三二五、

淺山顯藏 三四二、三五三、三五六、四〇三、四二二、四三九、

兒玉利回 三八、

近藤真鋤 三三八、三四〇、三四一、三四二、三五〇、三五一、
三九五、三九七、三九八、

吳大徵 三三九、三四七、三四八、三四九、三五〇、三五二、
三九三、三九四、三九九、四〇六、五〇三、五〇六、五一一、
五二二、五二三、五二八、五三六、五三七、五三八、五三九、
五四〇、五四四、五五五、五五五、五五八、五五九、
五六〇、五六二、五六三、五六四、五七二、五七九、
五九〇、五九四、六〇一、六〇五、六〇六、六一六、六二二、
六三三、六三六、六三〇、六三四、六三七、六三八、六五二、
六五三、六五五、六五八、六五八、六六四、六七〇、七〇九、
七一九、七二二、七二三、七二五、七二五、七二六、七二七、
七二八、七二九、七三〇、七三五、七三六、

黃龍澤 四五〇、四五二、四五八、四五九、

高永錫 四五二、四五八、四五九、

洪瀟馨 四六〇、

伍廷芳 五〇三、五二二、五四四、五七二、六〇一、六三四、
七三七、七三八、

(エ、エ)

袁世凱 二七六、二八四、四三三、四三四、四三八、五四一、
四四二、四六二、四六三、四六五、四六六、六六九、七〇九、

アストン 四四七、四五〇、四五六、四六六、四六七、
四五五、五五三、

アンドレ 七〇二、

(サ)

三條實美 二二二、二四、二五、五〇、八四、三三九、
三三〇、三三二、三三四、三三六、三三七、三三九、

蔡祐良 八二、

齊藤修一郎 三三八、三四三、三四五、三四六、三五〇、三五九、
三六七、三八一、三八二、三九六、三九七、

恭親王 一九三、二〇一、

金充植 二六五、二六九、四三四、四六〇、
二七六、二七八、二八三、二八六、二八七、二九三、二九九、
三〇三、三〇四、三〇五、三二八、三三三、三三六、三五〇、
三七一、三九〇、三九一、四〇一、四二二、四三三、四三三、
四二四、四三五、四三九、四三〇、四三二、四五五、四六〇、
五四四、七二五、七二六、七二七、

(キ)

金玉均 二六五、二六九、四三四、四六〇、
二七六、二七八、二八三、二八六、二八七、二九三、二九九、
三〇三、三〇四、三〇五、三二八、三三三、三三六、三五〇、
三七一、三九〇、三九一、四〇一、四二二、四三三、四三三、
四二四、四三五、四三九、四三〇、四三二、四五五、四六〇、
五四四、七二五、七二六、七二七、

昭和十一年八月七日 印刷
昭和十一年八月十一日 發行

(非賣品)



朝野新聞

朝鮮交涉資料

校訂者 平塚
發行者 平塚
印刷者 君島

東京市杉並區西荻窪二丁目六六番地

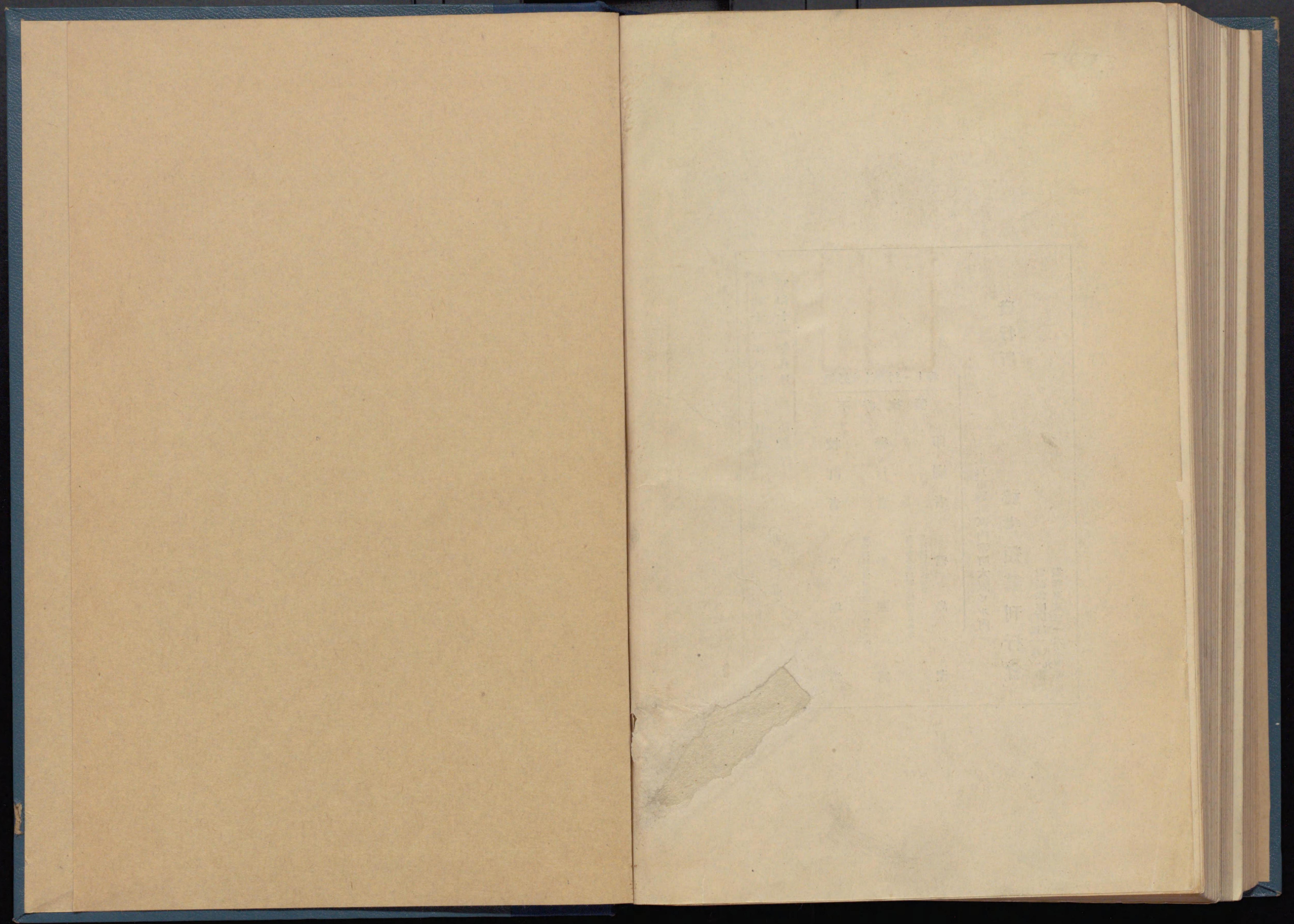
東京市小石川區久堅町百八番地
共同印刷株式會社

東京市麴町區內幸町大阪ビル内

秘書類纂刊行會

電話銀座(57)五一八一
振替東京三一六六四番

發行所



712
37

